

鈴木信太郎宛書簡（辰野隆・J・ヴィゲルス・

三好達治・日夏耿之介）の翻刻と注釈

戸塚学・多田蔵人・水野太朗

はじめに——鈴木信太郎宛書簡について

鈴木信太郎（一八九五～一九七〇）は、東京帝国大学文学部仏蘭西文学科で辰野隆に次ぐ日本人教授をつとめ、象徴詩研究の基礎を築き、多くの弟子を育てた、日本のフランス文学研究草創期の立役者である。

二〇一八年三月二十八日に開館した豊島区立鈴木信太郎記念館には、鈴木に宛てられた書簡が多く蔵されている。このうち、日本人の書簡については整理が進み、その中から文学者をはじめとする知名の差出人のリストが公開された（永嶋里佳「鈴木信太郎宛書簡について」、「生活と文化——研究紀要」二〇二一・三二）。

差出人は、辰野隆や山田珠樹、山内義雄、渡辺一夫といった大正昭和期を代表するフランス文学者や、小林秀雄、中原中也、三好達治といった東大仏文科と関わる文学者、高島達四郎や須田国太郎といった洋画家、鈴木の中学院時代の担任だった諸橋轍次など、当代一流の文人達である。

それらの人々の書簡からは、東大仏文科を中心とする人と人のつながり、この時期の仏文科の研究や教育の模様、大正期の日本人のフランス留学の様子や、アカデミズムと文壇との交流などが浮かび上がってくる。

仏文学者の書簡は全集類にも載らないことが多く、従来の研究の網の目からはこぼれ落ちてきた。だが堀辰雄や小林秀雄、三好達治など、学生時代に学んだ仏語・仏文学の素養をその後の文学に生かした作家は多く、文学創造の基盤として高等教育期における仏文学受容や、その背景にあった人間関係、彼らを教えた教師達の仏文学受容を解き明かすことには大きな意味があるはずである。

本稿は、鈴木木の生涯の盟友で仏文学研究の基盤をとともに作った辰野隆の書簡五十三点、東大仏文科でフランス語講師を務めたジョゼフ・ヴィグルス (Joseph Vigroux) の書簡一点、鈴木や辰野の教え子で詩人の三好達治の書簡九点、鈴木・辰野と親しく交わった詩人の日夏耿之介の書簡三十七点を翻刻し、注釈と解題を付したものである。

書簡の公開をお許し頂いた関係者の皆様、ここまで書簡を整理され、資料調査や許諾に際してご協力頂いた鈴木信太郎記念館及び同館学芸研究員の奥村景子氏に感謝申し上げます。

【翻刻の方針及び凡例】

- 1、本稿は、鈴木信太郎記念館所蔵の鈴木信太郎宛書簡を、差出人ごとにまとめて翻刻するものである。
- 2、差出人ごとに、一、二、三、四と項を立ててまとめた。
- 3、書簡番号は差出人ごとにまとめ、おおよそ年代順に並べて振った。() 内に鈴木信太郎記念館の館内整理番号を示した。配列を変更した場合、解題で断った。
- 4、翻刻に際して、資料種別や内容、許諾の関係で翻刻を見送ったものもある。その場合、必要に応じて解題で

その旨を記している。本文中に省略がある場合、（…）で示した。

5、書簡の発信年月日は、封筒表書きや裏書き、本文の日付に基づく。日付に誤りがあると考えられる場合は注記した。表書き裏書きと本文の日付が異なる場合はその旨を注記し、推定の場合や日付不明の場合はその旨を記した。併せて（ ）内に消印の日付と引き受け局所在地を示したが、消印不鮮明の場合は省略した。消印が複数ある場合、両方を示した。

6、日付に続き、宛先住所・宛名、差出住所・氏名を示した。表書きや裏書きに記されていない場合、本文に拠って補った。表記は原簡に基づくが、脇付は取捨した。これらの項目が欠けている場合、「」で注記した。

7、封書・葉書・絵葉書等の別と、筆記具（ペン、鉛筆、墨筆等）の別を示し、用紙の別が有意と思われる場合は注記した。

8、絵葉書の絵及び写真について、本文の後に注記した。

9、封書内に複数の葉書や書簡等が封入されている場合や転送書簡が入っていた場合、別項を立てるか【】で注記した。

10、翻刻に当たっては原文の記載や形式を可能な限り尊重したが、読みやすさを考慮して以下の方針で表記を整理した。

- i、漢字は通用字体に直したが固有名や筆者独特の表記、別字などでそのままにしたものもある。
- ii、変体仮名や合字は、適宜現行の仮名・カナ表記にあらためた。
- iii、仮名遣いや送り仮名、濁音・半濁音は原文のままとしたが、通読に困難をきたす場合は整理した。
- iv、おどり字は、原則漢字は「々」、平仮名は「ヽ・ヾ」、カタカナは「ヽ・ヾ」、二字以上は「く・く」

で起こした。

v、誤字・脱字と思われる箇所には「ママ」と振り、そのまま起こした。原文のフリガナや圏点、アンダーライン等はなるべく再現した。

vi、行替えや空白は有意な場合を除き再現せず、行送りにした。ただし一行空けや詩形式の記述など、有意と思われる行替えについては、段落で再現するか／によって改行箇所を示した。

vii、句読点は原文に基づくが、読みやすさを考慮して整理した箇所がある。また、句読点が欠けて通読に困難をきたす場合、空白を挿入した箇所がある。

viii、仮名・カナの大書き・小書きは判別が難しいため整理したが、有意な書き分けは都度判断して再現したものがあ

ix、手紙筆者による修正箇所は必要に応じて「」内に注記した。判読不能な箇所は□とし、類推される文字や汚損等の状況を「」内に注記した。

x、便箋の枚数や順番を示す「1」等の数字は割愛した。

11、書簡本文に続き、補足が必要な事項を(1)、(2)、(3)……として注記し、本文の背景等を補った。

12、翻刻及び注釈・解題は一・二を戸塚、三を多田、四を水野が担当し、三者で相互にチェックを行った。難読箇所について後述する協力者に協力を仰いだ部分があるが、最終的な判読の責任は稿者に帰する。

13、注記・解題の西暦元号表記は文脈により統一が困難なため、都度判断した。

【参考文献】

以下の文献は、注釈に際して書誌を略した。

『鈴木信太郎全集』第一巻～第五巻・補巻（大修館書店、一九七二～一九七三）

『辰野隆随想全集』第一巻～第五巻・別巻（福武書店、一九八三）

『三好達治全集』第一巻～第十二巻（筑摩書房、一九六四～一九六六）

『日夏耿之介全集』第一巻～第八巻（河出書房新社、一九七三～一九七八）

一、辰野隆書簡

書簡1 (30191) 大正六（一九一七）年九～十月（推定） 「宛先住所欠」 鈴木さま 「差出住所欠」 隆 封書（封

筒欠） ペン

昨日は失礼 御気に召すやうなものを書けません 此んなものでも宜しければ これから雑誌の続く限り僕も筆を濡らせて頂きます 鈴木さま（名前は「宇乃里雨」と云ふアンノニウムで願ひます） 隆

（1）フランス文学の同人雑誌「玫瑰珠」（大正六年一月～十四年十月）への辰野の執筆を指す。辰野は大正六年十一月号に初めて「信天翁の目玉」を寄稿した。本書簡は原稿送付の添え状と見られる。同人は鈴木、山田珠樹、実吉捷郎、團伊能、久能木慎治、石川欣一、西園寺実、尼子富士郎、石本巳四雄、豊島與志雄、大槻菊男、菊池香一郎ら。同誌については『鈴木信太郎全集』補

巻編者註(平井啓之)が詳しく、目次や表紙、執筆者等について行き届いた注釈がほどこされている。辰野は大正六年十一月号から加わり、仏文エッセイ「信天翁の目玉」を連載する。(2)辰野は「玫瑰珠」に宇乃里雨(りゅう隆)の筆名で執筆した。なお、大正七年五月号より、「立乃里雨」に変更している。

書簡2 (1301-02) 大正六(一九一七)年十一月四日付(五日消印・青山) 神田区佐久間町四一五 鈴木信太郎様 赤坂新坂町一四 隆 葉書 ペン

前略。⁽¹⁾組方は今月の通りで結構です。然し君が二段にした方が読みい、と思ふなら二段でも結構です。それは *comme vous voudrez*。⁽²⁾バンヴィルの詩はい、でせう。あれはバンヴィルの詩の中でも自分では有数のものと思つてゐます。但し僕の訳は、アリア駄目です。君でも團君でもお暇なら、始めから訳し直ほして呉れませんか。僕にはとても原詩の微笑したシヤルマンな調子が出せないので *Et quand reviens la primevère* を、「桜草の花咲く頃ともならば」としましたが *reviens* を生かすなら、「桜草の花咲く頃のめぐり来ば」とした方が忠実にはなります。*Pendant deux ou trois mois de mai* の *mai* は必しも五月に限つた事はないのでせう。五月のやうな佳い時節と云ふ事と思ひます。だから、「楽しいニタ月三月」と云ふ程の意でせう。僕は「…きさらぎのニタ月三月」とやりましたが何だか少し変ですね。「初夏のニタ月三月」でもやつぱり変です。「五月の如きニタ月三月」ではかたくりしいでせう。妙へなるニタ月三月ですかね。楽しきニタ月三月とでもしますか。

＝。＝

「⁽⁴⁾退却」を読みました。一郎君は無論君でせう。⁽⁴⁾退却から突撃にうつるのはいつ頃ですか。承り度いな。

(1) 「玫瑰珠」大正六年十二月号の辰野「信天翁の目玉」原稿の組み方に関する指示。実際の誌面では前月通り一段組になった。
 (2) テオドール・ド・バンヴィル (Théodore de Banville, 1833 ~ 1891) はフランスの詩人。技巧をこらした詩に特徴があり、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーに影響を与えた。辰野は「玫瑰珠」十一月号の「信天翁の目玉」でマラルメの激賞した詩人として触れ、十二月号扉でその詩《A Adolphe Gautier》を引いている。(3) 掲載は原文のみで、訳文は載せられていない。(4) 「退却」は十一月号掲載の鈴木信太郎の小説『退却』を指す。

書簡 3 (13-01-03) 大正六(一九一七)年十一月六日付(七日消印・赤坂) 神田区佐久間町四一五 鈴木信太郎様 赤坂新坂 隆 葉書 ペン

前略 原稿紙がのこりずくになり候。僕の「読む脚本」は段々進んでいきます。君がビックリする程珍説奇論に充ちてゐますよ。颯田⁽²⁾から君の「退却」を面白く読んだと云ふ電話がかゝりました。あれはハチャさんの事にちがないと颯田は云つてゐます 作者はなか／＼虫が善良だと云つてゐました。Vive Ichiro 君。 ──

(1) 辰野が「玫瑰珠」大正七年一月号に発表した、戯曲形式の『如是我聞』を指す。大正末期は読む脚本＝レーゼ・ドラマの流行期であった。(2) 颯田琴次(一八八六～一九七五)は耳鼻咽喉科学者で音声学者。辰野とは学生時代からの友人関係にあり、「玫瑰珠」同人としても名を連ねた。

書簡 4 (13-01-04) 大正七(一九一八)年六月五日付(七月五日消印・赤坂)／七月六日消印・群馬伊香保) 栃木県

伊香保温泉木暮武大夫本店 鈴木信太郎様 東京赤坂新坂町一四 辰野隆 封書 ペン

ソシキ
小曲

七月号を見た。君の「瓦」⁽¹⁾を読んだ。／仁木のねづみ⁽²⁾が唯のねづみでない如く／信太の「瓦」は断じて唯の瓦ではない。／春秋斉の瓦⁽³⁾に銅雀の銘があると云ふ。／其の銅雀の銘は、確かに結構には相違ない。／然し、信太の「瓦」が己を矜若⁽⁴⁾たらしめたら／なほ更ら結構だと思へないかい。ねえ君。／その方が正に結構だと云つて呉れよ。／文体は相も変らずシヤルマンである。／あらためて褒めたとして、君は驚くまい。／唯。今迄は心理や性格の描写に際して／時々尻尾を出した其君が、尻の穴の掃除以来／尻尾も出さず旨く化けてバルナツスの油揚を／巧にさらつた其の手腕は、信太さん、偉いと思ふ。 六月五日。

此度の表紙は甚だいい、ね。今迄の表紙の中で一番いい、じゃないか。それよりも嬉しい事は創作が号を追ふて落つて来る事だ。従つていゝものも載るわけだ。「二度目の寂莫」⁽⁶⁾と云ひ「瓦」と云ひ立派なものだ。但し二度目の即ち蛇の目のからかさ⁽⁵⁾と云ふ題だけは今でも吾人は消極説をとるね。僕は断言する「二度目の寂莫」と云ふ題よりは「初めての処女膜」の方が遙かに有がたい。御賛成の方は御起立を願ひまアアアアす。だ。「処女膜⁽⁷⁾や破瓜やリボンや青嵐」てのはどうだらう。 信太郎賢台 ボアアオ・アンピユデイツク 再拝

(1) 「玫瑰珠」大正七年七月号に掲載された鈴木の小説「瓦」を指す。(2) 『伽羅先代萩』の仁木弾正が鼠に変化することを指す。
(3) 鈴木『瓦』中に銅雀台の瓦が登場することを指す。銅雀台は魏の曹操が築いた楼台の名で、屋上に銅製の鳳凰を飾った。(4) 業績などに目をみはる様。(5) 七月号の表紙絵は、オーブリー・ビアズリー (Aubrey Beardsley, 1872～1898) による、着物

をはだけて着た女性と猫らしき動物の絵で、従来の「玫瑰珠」の表紙と趣を異にしている。(6)「玫瑰珠」大正七年五月号掲載の坂津木慎太郎（久能木慎治）の小説『二度目の寂寞』を指す。(7)鈴木「フランス文学黄金伝説」〔全集〕第五巻）に辰野が詠んだ初めての「句」として紹介されている。(8) 詩人・批評家のニコラ・ボワロー＝デプレオー（Nicolas Boileau-Despréaux, 1636～1711）に impudique（不品行な）を冠している。手紙における自身の姿勢を不品行なる諷刺家・批評家と自認したのか。

書簡 5 (1301-06) 大正七（一九一八）年十月十二日（消印・赤坂） 府下巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 赤坂新坂一四 辰野隆 葉書 ペン

⁽¹⁾ エツク先生を僕等三人で招くのは明后日（月曜）の午后五時半からにした 場所は中央亭⁽²⁾ 会費はエツク先生がヌキだから一人毎四円か五円位になるかも知れないと思ふ。 赤坂新坂一四 辰野隆

(1) エミール・エック (Émile Heck, 1866～1943) はソリア会の修道士で、東京大学でフランス文学・フランス語を長く講じた。鈴木信太郎「仏文事始」〔全集〕第五巻）によれば、明治二十五年から大正十年まで東大でフランス語学・文学の講座を持ち、鈴木は「最後の弟子の一人」である。アルザス生まれで辰野と鈴木の恩師であり、辰野は留学時にエツクの父のもとに挨拶に行っている。鈴木がマラルメに開眼したきっかけもエックによる紹介だという（『私のフランス文学』、『全集』第五巻）。なお、エミール・エックはこの年の十一月にレジオン・ドヌール勲章を受けている（『暁星百年史』『暁星学園』一九八九）。(2) 中央亭は八重洲にあったフランス料理の開拓者渡辺鎌吉の料理店で、明治四十年に開業。精養軒などと肩を並べる一流レストランだった（中央亭『西洋料理事始——中央亭からモルチェまで』中央亭、一九八〇）。

書簡6 (1301-06) 大正七(一九一八)年十月二十九日付(二十九日消印・赤坂) 府下巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 赤坂新坂一四 辰野隆 葉書 ペン

明日(水曜)午後のチームを持つてるかい。持つてるなら御知らせ願ひ度い。とうく君もユニバアサル、インフルエンザ分の一になつたね。やつぱり熱があるのかい。而し此度の風邪は四五日でなほるんだから一寸洒落れてるよ まあく御大事に。

書簡7 (1301-07) 大正八(一九一九)年七月二十三日付(二十四日消印・赤坂) 府下巢鴨村向原三五一九 鈴木信太郎様 府下下渋谷羽澤二一五 辰野隆 葉書 ペン

【印刷】 拜啓今般左記ニ転居仕候間御通知申上候 大正八年七月廿三日 府下下渋谷羽澤二一五 辰野隆 電話 芝五五三三

【手書き】 引越したものの、狭くて不潔でお話にならない。驚いたね。此処に暫く居て九月の末にはまた近所に移転する。此処では君達に遊びに来て呉れと云ふ勇氣がない。二三日中に房州⁽²⁾に逃げ出す。

(1) 大正八年三月に父金吾が死去したことを受けての転居と見られる。(2) 辰野家は毎夏房州館山で避暑生活を送っている(父と私)、『辰野隆随想全集』第五巻)。

書簡 8 (1301-08) 大正八(一九一九)年八月九日付(十日消印・館山) 東京府下巢鴨向原坂下 鈴木信太郎様
房州館山上須賀 辰野隆 絵葉書 ペン

里昂^①大学の用も済んだから早速房州に逃げて来た 月末迄で此処^②にゐる 今君の訳したシラノの続きを読んでゐる。今迄怠けたからうんと勉強する。久能木、山田、西園寺、実吉の諸兄に宜しく 八月九 房州館山上須賀 辰野隆

【裏面】鷺ノ島から沖ノ島方面の海の写真

(1) リヨン大学。辰野隆「空瀾先生」(『辰野隆随想全集』第四卷)によれば、大正八年の夏に辰野はリヨン大学教授モーリス・クーラン(Maurice Courant, 1865～1935)と総長ポール・ジューバン(Paul Jobin, 1862～?)が「日仏知的親善」で来日した際、接待している。東大では総長室で山川健次郎総長が二人を招いて午餐会をして辰野も出席(「陸上競技の思い出など」、『辰野隆随想全集』第五卷)、また文部大臣中橋徳五郎が二人とフランス関係の学者や学生を招聘し、麹町の富士見軒でもてなしたという(「舌の保養」、『辰野隆随想全集』第二卷)。辰野は大正十年五月に渡仏し、リヨン大学に入学する。(2) エドモン・ロスタン(Edmond Rostand, 1868～1918)『シラノ・ド・ベルジュラック』(Cyrano de Bergerac)の翻訳は、第一幕(大正八年一月号)、第二幕(大正八年四月号)が既に鈴木・辰野共訳で訳出されていた。なお、「玫瑰珠」大正八年十月号には、第三幕が訳出される。この書簡而言及されているのは、第三幕と見られる。(3) いずれも「玫瑰珠」同人。書簡1(1)を参照。

書簡 9 (1301-09) 大正八(一九一九)年八月十五日付(十六日消印・館山) 東京府下巢鴨

向原三五一九 鈴木信太郎様 房州館山上須賀 辰野隆 封書 墨筆

手紙ありが度う 別封の紹介状を岸田君に渡して呉れ給へ シラノは訳してゐるがなか／＼進まない 廿日頃迄には是非訳了して来月号には間に合せ度いと思つてゐる 既に訳了の部分は明日送る 更らに送り返へして頂かなくてもい、君が直ほしてそのまゝ印刷にして呉れ給へ 家内からも奥さんに宜しく 僕からはあんまりやり過ぎてはいけません。 八月十五日 隆 信太郎学兄

(1) 岸田國士。岸田はこの年の八月にパリ留学のため、台湾に渡っている。(2) 「玫瑰珠」は大正八年八月号・九月号が休刊になる。十月号に同人の渡欧や暑中等の事情で休刊の由が断られている。

書簡10 (130110) 大正八(一九一九)年八月二十七日付(二十八日消印・館山) 東京府下巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 房州館山上須賀 辰野隆 葉書 ペン

シラノの第四幕目は3・4・5・6齣を僕が訳す。今日からぼつ／＼取りかゝる事にした。三十日頃に帰京のつもりだ。此地へ来て本は思ふ様には読めなかつたがそれでも少し読んだ フランソワ・ド・キュレルの脚本を四部読んで今はリイル・アダンのアクセルを⁽³⁾読んでゐる。

(1) 『シラノ・ド・ベルジュラック』第三幕は「玫瑰珠」十月号に掲載されている。書簡8・9を踏まえると、大正九年一月号掲

載の第四幕に関する言及か。第四幕は全十齣。(2) フランソワ・ド・キュレル (François de Curel 1854 ~ 1928) はフランスの劇作家。フランスのイブセンとも呼ばれた。岸田國士も「近代劇論」(『現代演劇論』白水社、一九三四) で言及している。(3) フランスの小説家・劇作家・詩人ヴィリエ・ド・リラダン (Auguste de Villiers de l'Isle Adam, 1838 ~ 1889) の遺作『アクセル』(Actuel)。リラダンの日本での紹介は、鈴木信太郎や辰野、山田珠樹、渡辺一夫らが進めた。『アクセル』は一九四三年に斎藤磯雄訳『リラダン全集』第四卷(三笠書房)として翻訳・刊行されている。

書簡11 (1301-11) 大正八(一九一九)年九月二十九日付(二十九日消印・東京中央) 府下巢鴨向原三五一九
鈴木信太郎様 府下下渋谷四四六 辰野隆 葉書 墨筆

【印刷】 拜啓私儀今般左記ニ転居仕候間御通知申上候 大正八年九月二十九日 府下下渋谷四四六 辰野隆 電話
芝一〇三番

書簡12 (1301-12) 大正八(一九一九)年十月十八日付(十八日消印・渋谷) 府下巢鴨向原三五一九 鈴木信太
郎様 下渋谷四四六 辰野隆 葉書 ペン

- 1 秋田玄務^① 芝白金台町二一四一
- 2 井上琢為 茨城県古河町西鷹匠町七七二
- 3 山本直文 小石川西原町一十一

- 4 池田立基 浅草北松山町八六
 - 5 後藤末雄 本郷弥生町三 は―三
 - ⑥ 佐藤貞次郎 中野町三三〇〇 ―― 九
 - ⑦ 大宰^マ施^マ門 本郷森川一牛屋横町
 - 8 土屋正直 千駄ヶ谷穩田一六四
 - 9 豊島與志雄 本郷駒込千駄木町四九
 - 10 内藤濯 本郷菊坂町八六
 - 11 福岡易之助 神田裏神保町白水舎書籍店內
 - 12 仁羅山政治郎 麻布区永坂町四二
 - 13 新城和一 牛込区陸軍士官学校内
 - 14 林原耕三 麹町区文部省普通学務局
- 会場 本郷三丁目 燕^ㇿ楽軒
日 十月廿九日(水曜) 午后五時
会費 約三円

ㇿㇿ 廿七日迄に小生宅に返事を呉れるやうに附加して呉れ給へ 今、大学一覽が手元にないので仁羅山政治郎と云ふ人が仏文科出だか何だかよくわからない 一応調べて呉れ給へ

(1) 以下、林原耕三を除き東京大学仏蘭西文学科出身者(東京帝国大学編『東京帝国大学卒業生氏名録』一九二六)。秋田は大

正二年卒、井上は明治四十一年卒、山本は大正六年卒、池田は明治四十四年卒、後藤は大正二年卒、佐藤は明治四十四年卒、太宰は大正二年卒、土屋は明治三十九年卒、豊島は大正四年卒、内藤は明治四十三年卒、福岡は明治四十三年卒、仁羅山は明治四十二年卒、新城は大正四年卒。林原は英文科大正七年卒。芥川龍之介を夏目漱石に紹介したことで知られる林原は、一高の寮で豊島與志雄と仲がよかった。この会合は「東大仏文学卒業生の懇親会」で、リストのうち半数ほどが集まったという（前掲「フランス文学黄金伝説」）。（2）燕楽軒は大正七年、元築地精養軒料理長西尾益吉が開業したフランス料理店で本郷三丁目にあった。文学者が集い、東京大学関係者の会合場所として多く利用された。

書簡13（1301-13） 大正九（一九二〇）年一月七日付（七日消印・渋谷） 神田駿河台西紅梅町二三七八 佐々木杏雲堂医院隔離室一号 鈴木信太郎様 下渋谷四四六 辰野隆 葉書 ペン

一度御見舞に行かう／＼と思つてゐながら自分も少々風邪気味で時々咳が出るので用心と不精とが一緒になつて遂ひ失礼し且つ御ぶさたと云ふわけなんだ。

兎に角君の新年は月並でない。全快と先が極まれば流行感冒で煩はしい正月を追払ふのはいゝ考だ。いつ頃退院するんだい。

僕はシラノ⁽²⁾を訳了した。肚に溜まつてゐたものを下して了つたやうな気がする。晴々したやうでもあり、力が抜けたやうでもある。兎に角俺達はベルジュラツクを愛してゐたからね。

ゆつくり養生したまへ。家内からも宜しく。

(1) 鈴木は大正八年末から九年のはじめにかけて、猩紅熱で杏雲堂病院に入院した。次の書簡14を鈴木は辰野の「病氣に対して神経が細い」例としてエッセイに引いている(前掲「フランス文学黄金伝説」、『全集』第五卷)。(2) 『シラノ・ド・ベルジュラック』は第五幕が「玫瑰珠」大正九年三月号に訳出され完結、大正十一年に白水社から単行本が刊行される。

書簡14 (1301-14) 大正九(一九二〇)年一月十六日付(十九日消印・渋谷) 神田駿河台西紅梅町二三七八 佐々木杏雲堂医院隔離室一号 鈴木信太郎様 下渋谷四四六 辰野隆 葉書 ペン

是非一度お見舞に行かう〜と思つてゐて未だに果さない。それに少し風邪気味で外へ出るにもびく〜ものなんだ。猩紅熱は皮が剥け出すと感染するんだらう。それも少々恐いので遠慮してゐる。病氣を恐がる僕の癖が此頃の流行寒冒の噂で益々病的に鋭くなつて来たやうだ。予防注射もした。外出の時はマスクも用ひてゐる。家に帰ると必ず嗽^{うがひ}をやる事にしてゐるがそれでも未だ安心が出来ずに熱がありはしないかと毎日二度か三度づ、検温器を挟んで見る。幸ひに熱は無い。検温器の上に熱が表はれなくても実際は何処かに悪い熱が潜^{ひそ}んでるのではないかと考へて見る。而し医者はその事はないと云ふ。全くマ^マラ^ラデ^イ・シ^マジ^ネエ^ルになつて了つた。早く桜が咲けばい、なアと思つてる。全くだ。恐い〜。此んなわけでお見舞にも行かないんだ。悪しからず。

(1) モリエールの『病は気から』(Le Malade imaginaire)を踏まえている。

書簡15 (1301-15) 大正九(一九二〇)年一月二十一日付(二十二日消印・渋谷/二十二日消印・神田) 神田駿

河台西紅梅町 佐々木杏雲堂医院隔離室 鈴木信太郎様 下渋谷 辰野隆 封書 墨筆

君が快くなつて行くのは非常に嬉しい ゆつくり養生をし給へ ところで僕はとう／＼やられて了つた 日曜の晩から三十八度七分の発熱で流感和極まつた 唯予防注射の御かげで肺エンにはならず済んでゐるが 今日で四日間全で不眠の結果 頭がボーッとして何も考へる事が出来ない それに頭が妙に痛んでいやな気持ちだ 眠らう／＼と焦つてゐる いやに苦しい 今夜は少し気分がいゝから 手紙を書いた 而し之れ丈け書いても非常に頭が痛いからもうやめる 隆 信太郎様 二十一日夜

書簡16 (1301-16) 大正九(一九二〇)年八月十四日付(十六日消印・館山) 東京府下巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 房州館山上須賀 辰野隆 葉書 ベン

御無沙汰しちやつた。僕も勉強してゐる。此の休みは比較的によく読んだ。バルザツクの御勉強は結構だ。僕は殆どバルザツクを読んでゐない。マラルメの小曲ははつきり了解出来ない。ゆつくり味はつて見た上でなければ未だいゝと悪いとも僕には見当が付かない。リイル・アダンの「民衆の声」^{ツオラス・ボキウリ}を殆ど訳了したが原作を傷ける事が甚しと思つた程不出来だつたから破いて了つた。今日から又稿を改めて訳し出す。「己のものが旨く訳せるかな」とリイル・アダンの地獄で例の *rire funebre* を漏らす事だらう。僕は廿七八日頃帰京する 実吉君の送別会と石川君の歓迎会とは九月早々し度いね。皆にもひどく会ひ度いんだ。お宅では皆さん御変りない？宜しく。妻からも宜しく。

(1) リラダン『民衆の声』(Vox Populi)は「玫瑰珠」大正九年十一月号に訳出される。(2) 実吉、石川は「玫瑰珠」同人。書簡1(1)参照。実吉は大正九年六月に大学院を退学、九月より水戸高等学校の講師を嘱託されているので、その送別とみられる(熊谷恒彦「年譜」、『つばくらめ——実吉捷郎遺稿集』同人社、一九六三)。石川欣一は大正七年に東大英文科からアメリカのプリンストン大学に転学し、九年に卒業して毎日新聞に入社した(石川周三「著者について」、石川欣一『比島投降記——ある新聞記者の見た敗戦』中央公論社、一九九五)。その帰国の歓迎会のこととみられる。

書簡17(1301-17) 大正九(一九二〇)年八月十五日付(十五日消印・館山) 東京府西巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 房州館山 辰野 葉書 ペン

手紙と原稿とを受取つた。⁽¹⁾リイル・アダン論は無論書く事は書くが九月号に間に合ふかどうか。九月号を廿日頃に出すつもりで今月中に書いてよければすぐに取りかゝる。慎治兄に相談して見て呉れ給へ。山田の「人間になるのぞみ」の旧訳を出す気があるかどうか。出せばいゝと思ふがね

(1) 「玫瑰珠」大正九年九月号掲載の鈴木原稿と辰野に寄稿を慫慂する内容の手紙と見られる。(2) 「玫瑰珠」大正九年十一月号の「信天翁の目玉」はリラダン論。(3) この時期、「玫瑰珠」の編集は久能木慎治が行っている。(4) 「玫瑰珠」大正九年十一月号に山田珠樹はリラダン『人になりたい望』(Le Désir d'être un homme)を訳出している。

書簡18(1301-18) 大正九(一九二〇)年八月二十三日付(二十三日消印・館山) 東京市外西巢鴨三五一九 鈴木

信太郎様 房州 隆 葉書 ペン

房州の生活も浜辺の蟹の目玉から秋風が立ちそめたから一先づ切上げて明日天氣が佳ければ江戸の巢に帰へる。ロザリヨ九月号は、僕も、何とかして出し度いと思つたが君達の原稿が集まるさうで、何より結構だ。一月をきには、出し度いと思ふね。「ビヤンファイアトル」を対照しながら読んでゐる。僕にもわからない箇所がある。共訳として出す事は僕は差支ないが、此度は全部君が訳したのだから。君の訳とし上梓する方がいゝ。さうし給へ。「民衆の声」は曲りなりにも出来上つた。依然として気に食はない。不文の致すところとあきらめてはゐるが。折角やり始めたのだから、今更らやめるのもいやだ。またやり直しかな。 八月廿三日 妻から宜しく。 房州 隆

(1) 「玫瑰珠」大正九年九月号は、石川欣一「小さな事」、トオマス・マン／実吉捷郎訳『墓地へゆく道』、鈴木信太郎「習作」、山田珠樹「二通の手紙後篇」の四篇収載。この時辰野が用意しているリラダンの翻訳やリラダン論は、次の十一月号に載る。(2) 鈴木信太郎訳『ビヤンファイアトルの姉妹』(Les Demoiselles de Bienfilâtre)は「玫瑰珠」大正九年十一月号に載る。同号は、リラダンの詩を扉にかかけ、前掲の辰野のリラダン論と翻訳、鈴木と山田の翻訳を載せ、リラダン特集の観を呈する。

書簡19 (1301.19) 大正九(一九二〇)年十二月六日付(六日消印) 市外西巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 府下荏原郡上目黒駒場九二八 隆 葉書 墨筆

【印刷】 拝啓 小生儀今般左記ニ転居仕候間御通知申上候 府下荏原郡上目黒駒場九二八(駒場郵便局前) 大正

九年十二月六日 辰野隆

(1) 辰野金吾の死後転居が続いていたが、以後一家はこの駒場の住居に落ち着く。

書簡20 (13-01-20) 大正十(一九二二)年二月十一日付(十一日消印・渋谷) 府西巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 「発信住所欠」 隆 葉書 鉛筆

僕の⁽¹⁾ professeur assistant の件は未だ内定なのだから、そのつもりに願ふ。確定迄には尚一二週かかるのだから。い、かい。 二月十一日 隆

(1) 辰野隆は大正七年九月に東京帝国大学仏蘭西文学科副手、九年一月講師となり、十年三月に助教となつてゐる。

書簡21 (13-01-21) 大正十(一九二二)年七月十六日付(十八日消印・GRENOBLE) Tokyo Japon 日本東京西巢鴨向原三五一九 M.Sh.Suzuki 鈴木信太郎兄 絵葉書 ペン

先月廿五日に里昂⁽¹⁾に着いてから一週間ばかりして巴里から来た山田⁽²⁾と一緒に、と云ふよりも寧ろ山田に案内されて巴里見物をして来た。巴里では一週間のうちに芝居に六度行つた。オペラ⁽³⁾。グラン・ギニヨール。レ・ドウ・マスク。エドワアル・セツトに各々一回づゝ、テアトル・フランセエには二度行つた。一度はブリユウ⁽⁴⁾のラ・ロオプ。

ルウジユ。で一度はラフオンテエヌの三百年祭だつた。役者が代り々々お伽詩をデタラメエして呉れたのは己達にはめづらしかつた。ギットロイ親子はル・グラン・デュツクをエドワアル七世座で演じゐた。芸はやつぱり親の方が遙かに上だと思つた。サツシヤの女房で一座の立おやまのイヴオン・プランタンと云ふ女優の芸が頗る自然なのに感心した。若くて美しい女優なんだ。

~~~~~

去ル十三日に一旦里昂に帰つてまた山田と一緒にグルノオブルに來た。今月下旬には瑞西に行く。 七月十六日

グルノオブル。 隆・珠樹

【裏面】グルノオブルのフェリックス・プラ通り、地下鉄駅とサン・ルイ教会の写真

(1) 大正十年四月、辰野隆は文部省在外留学生として二年間のフランス在留を命じられ五月に渡仏した。(2) 辰野は大正十年六月二十二日にマルセイユに着、その後リヨンに向かつた。七月二日に山田珠樹とパリ見物に出かけ、七月十二(十三?)日にリヨンに帰る。リヨン大学が夏期休暇のため、グルノオブルに夏期大学を聴講しようとして十五日出発するが、聴講をとりやめて以下八月にかけて、エクス・レ・バン、シャモニーを経てスイスのジュネーヴ、ローザンヌ、ベルン、ルツェルン、チューリヒ、オーストリアのザルツブルグ、ウィーン、ハンガリーのブダペストへと回つた(辰野隆「旅のたより」、「スーヴニール」、『辰野隆隨想全集』第四卷)。このうちフランス旅行については、山田珠樹「フランスの夏の旅」(『小展望』六興商会出版部、一九四二)に詳しい。本書簡はその途次にグルノオブルから出されたもの。(3) いずれもパリの劇場。(4) フランスの劇作家ウージェーヌ・ブリウー (Eugène Brieux, 1858 ~ 1932) の代表作『法服』(La Robe rouge) を指す。(5) ラ・フォンテーヌ (Jean de La Fontaine, 1621 ~ 1695) の生誕三百年祭。(6) リュシアン・ギトリ (Lucien Guitry, 1860 ~ 1925) とサシヤ・ギトリ (Sacha

Guitry, 1885 ~ 1957)。特に父のリュシアン・ギトリの演技を辰野は高く評価し、「リュシアン・ギトリー」(『辰野隆随想全集』第四巻)他で言及している。『ル・グラン・デュック』(Le Grand Duc)はサシャ・ギトリの作。辰野は同文でリュシアン・ギトリがこの戯曲で「モスコウの貴族」を演じて当たりをとった初演の様子を描いている。

書簡22 (13-01-22) 大正十(一九二二)年九月四日付(五日消印・MÜNCHEN) Tokio Japan 日本東京東京帝国大学文学部仏蘭西文学研究室にて M.Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 [発信住所欠] 辰野隆 絵葉書 ベン

皆さん御変りない? 僕も山田も頗る元気で多少バタ臭い弥次喜多を国境から国境につけてゐる。独乙ではやはり南がいゝ。殊にバイエルン<sup>(1)</sup>にはいると余程フランス的で非常に気持がいゝ。ニュルンベルヒとミュンヘンは就中気に入つた。中世紀の建築物で充たされてゐるニュルンベルヒの古雅な趣はすばらしくいゝ。明后日はラインを下つてケルンから白耳義にはいらうと思ふ。エツク先生には其後非常に御無沙汰してゐるから君から宜しくさう云つて呉れ給へ。毎日く足に任せて歩くので日本語ではがきを書くのも実は楽ではない。況んや旨くない仏蘭西語で手紙を書く事は難中の難だと云ふ事を察して僕のパレツス<sup>(2)</sup>をかんべんして下さるやうに願ふと先生に伝へて呉れ給へ。後藤兄<sup>(3)</sup>、豊嶋兄を始め石川、池田、内藤、山本の諸兄並びに研究室の方々にも呉々も宜しく 九月四日 独乙  
ミュンヘンにて 辰野隆

【裏面】ミュンヘン・マリエン広場の写真

(1) 書簡21(2)で述べた旅程を経て、再びウィーンに戻り、チェコのプラハ經由でドイツのドレスデン、ベルリン、ライプツィッ

ひと北部を回り、ワイマールに回った（辰野隆「馬鹿々々しい話」、『辰野隆随想全集』第二巻）。南部のニュルンベルク、ミュンヘンはその続きで回ったものか。（2）パレツス（paresse）は怠惰、怠けること。（3）石川欣一を除き、いずれも仏文学科卒業生。書簡12を参照。

書簡23（1301-23） 大正十（一九二二）年九月十三日付（十四日消印・BRUGGE）Tokio Japon 大日本東京市外西巢鴨向原一<sup>4</sup>五一九 Monsieur Suzuki 鈴木信太郎様 プリユーージュ市 山田珠樹・「辰野隆」 絵葉書 ペン

〔1〕プリユーージュは見に来てよかつたと思つた。本屋で「沈黙の郷」を探したけれど見つからなかつた。薄暗い女僧院の庭で、楡の葉陰に初時雨をよけながら、日本人らしい男が写生をしてゐた。今日も二人で鈴木が一番寂しがつてゐるだらうと話し合つた 大正十年 九月十三日 プリユーージュ市 山田珠樹

プリユーージュはさすがにいゝ処だね。おまけに今日は此街にはおあつらへ向きの時雨と来てゐるのだ。大したものだ。此処では木の葉がそろ／＼黄になつてゐる。クウワンの中庭にはもう落葉がそここに散らばつて雨にぬれてゐる。それを窓から寂しさうに眺めてゐる尼さんの顔が己達の気を惹いた。山田が佳い町だねと云ふ。己が答へて、<sup>1</sup>Oui, y compris une religieuse !

【裏面】プリユーージュ・緑の運河（Quai Vert）の写真

（1）前掲「馬鹿々々しい話」によれば、ドイツ北部のハンブルクを回つて辰野・山田はベルギーに入った。（2）ベルギーの詩人ジョルジュ・ローデンバック（Georges Rodenbach, 1855～1898）の詩集『沈黙の支配』（*Le Règne du silence*）を指すか。町

をめぐる所感は、ブリュージュがローデンバックの小説『死都ブリュージュ』(Bruges-la-Morte)によって陰鬱な町としてのイメージが強かったことを踏まえている。(3) クウヴンは couvent (修道院)。この訪問については、「十年の昔、秋雨瀟々と降りしきる一日、ベルギーの古都ブリュージュを訪れて、風情に富む縦横の堀割に沿って雨を賞しながら、灰白の空を支うる寺院の奥に香の煙の揺曳するのを眺め」たと後年描かれている(『雨の日』、『辰野隆随想全集』第二巻)。(4) 「そうだね、尼さんも含めてね」の意。

書簡24 (13:01-24) 大正十(一九二二)年九月二十九日付(十月五日消印・LYON) Tokyo (Japan) 日本東京西  
 巢鴨向原三五一五<sup>△</sup> Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 「発信住所欠」 隆 封書 ペン

<sup>(1)</sup> 中欧ノ永イ旅ヲ了つて二三日前ニ再ビ静カナ里昂ニ帰ヘツテ来タ。領事館ニ行ツタラ故国カラ沢山手紙ガ来テキ  
 タ。其ノ中ニ君カラノモアツタノデ非常ニ嬉シカツタネ。久シ振りデ君ノ手紙ヲ読ンデ全ク君ト話ヲシテ居ル時ノ  
 氣持ニナツタ。ヒドク愉快ニナツテ独リデニコニコシタト思ヒ給ヘ。

<sup>(2)</sup> シラノガソンナニ早ク出版ノ運ビニナルトハ思ハナカツタ。且ツ、目玉ガソンナニ早ク出ルヤウニナルノモ意外  
 ダツタ。君ノ骨折ニ対シテウント感謝ヲスル。「仏蘭西文芸ノ研究」ノ研究ガ少々大ゲサデキマリガ悪イナ。「仏蘭  
 西文芸ノ話」グライガ丁度イ、ノダガ。然シ今カラデハモウ晚イダローカラソレハソレデイヤ。

<sup>(3)</sup> 恩師エツク先生ガ大学ヲ去ラレタノハ君ニトツテモ僕ニトツテモ実ニ惜シイト思フ。僕ハ全ク先生ト別レタクナ  
 イ。僕等二人ハ先生カラ見レバダツツ見カモ知レナイガ僕等二人カラ見レバ先生ハ実ニ親切ナ嬉シイ<sup>(4)</sup> *ouche* ダカラ  
 ネ。君ガサンチマンタールニナツテ涙ヲ禁ジ得ナカツタコトヲ本当ダト思フ。其時僕ガ傍ニモシ居タラヤツパリ君

ト同じ心持ニナツタコトダロー。

然シ凡テガ先生ノ希望通りニナツテアンベル氏ガ後任ニナリヴィグルス氏ガ一高二行クヤウニナツタノハ甚ダ結構ダ。

一三十年間帝国ノ最高学府ニ教鞭ヲ採ツテ、余生ヲ捧ゲテ兒童ノ教育ニ尽精スルト云フコトハエツク先生ニシテカラガ初メアリ終リアル立派ナキヤリエールダト思フ。先生ガ暁星ノ親玉ニナルノハ将来暁星ト文部省トノ間ニ今日モ密接ナ關係ガツイテ非常ニイイコトダト思フ。

僕ハ日本ニ帰ヘツテカラム絶ヘズ先生ヲ訪問シテ先生ノ余生ヲ慰メ先生ノ仕事ヲ援助シタイト思フ。先生ニハエライ御ブサタヲシテキテ誠ニ相スマナイト思ツテキル。近日手紙ヲ書カウト思フガ里昂ニ帰ツテ来テ間モナイノデ何トナク氣ガ落チツカズ、仏文デ手紙ヲ書クト思フヤウニ書ケナイカラ、書カウ書カウトハ思ヒツ、ツヒ筆ブシヨ一ニナツテ了フ。而シ二三日中ニハ必ズ書クカラドウカ君カラ先生ニ宜シク云ツテ呉レ給へ。

N.B. 忘レヌ中ニ云ツテ置クガ「シラノ」第一幕ノ劇中劇デ *Monfeury* ガ出場スル前ニ *On frappe trois fois* トアルノヲ三度手ヲタタクト訳シタノヲ覚ヘテキルガアレハ手ヲタタクノデハナク、棒デ舞台ノ床ヲ三度タタクノダヨ。ダカラ「三度台舞ヲ打ツ」ト直サナケレバイケナイノダ。今ナホセナケレバ改版ノ時ニ。

君ノ手紙ニハ愈々近日爆発シサウダト書イテアツタガ同日ニ受取ツタ女房カラノ手紙ニハ鈴木サンノトコロデモトウトウ赤チヤンガお生レニナリマシタト書イテアツタ。蓋シ将然ト既然ト間髪ヲ容レヌコトニナツタワケダ。誠ニお芽出度イ。遙カニ御悦ビヲ申上ゲル。

全ク君ガオヤヂニナツタト思フト実ニ光陰矢ノ如ク月号ニ似タリダ。トコロデ、我輩ノ女房ノ通信デハ唯赤チヤンガお生レニナツタカラ御祝ヒニ行ツテマキリマシタテナコトハワカツタガソノ赤チヤント呼バレルホヤホヤノ新

人ノお臍ノ下ガ凸面体デアルカ凹面体デアルカニ就テハ何トモ云ツテ来ナイノダ。コレデハ誰カ赤チヤンノ雌雄ヲ知ランヤ、ダ。女房ノ奴大事ナコトヲ失念シヤガツタ。全体ドツチナンダイ。アダムカ? イーブカネ?

ロザリヨ同人ハ皆元氣ダローネ。團(9)ガ帰朝シタノデ大イニ賑ヤカニナツタコトト思フ。團ハタツタ独リデ歐羅巴中ヲ歩キマワツテ立派ナ男ニナツタ。専門(10)ノ研究ヨリモ人間ヲ造ル上デ團ノ漫遊ハ空シクナカッタト思フ。(…)

七十日ニ余ル中欧大旅行ヲ了ツテ巴里ニ帰ヘテ来テカラ山田ノ下宿デ一週間バカリ一緒ニ暮シテ毎日芝居ニ行ツタ。オペラデハ Rigolette. テアトル・フランセーデハ Le Cid ト Poil de Carotte. オデオンデハ Andromaque. スウヴェル・アンビギユ座デハ Maurice Donnay, L'Oiseau de passage. グラン・ギニヨール座デハ灯台守ト恐ロシキ経験(何レモ凄イヤツタ) コメディーモンデエン座デハベルンスタイン、Samson 皆相当ニ面白カツタ。然シ仏蘭西ノ近代劇ハドウモ甘イトコロガアルネ 仏蘭西デハヤツパリクラシツクノ劇ガ一番氣持ガヨカツタ。ル・シッドハ非常ニヨカツタ。オデオンデヤツタ Andromaque ハ役者ガ悪カツタ為メニ見劣リガシタ。

近代劇デハ何ト云ツテモ伯林ノレヂデント座(11)デ見タストリンドベルヒ、「死ノ躍(トレンクンツ)」ガ最モ印象ガ深カ、ツタ。独乙語デヤルノダカラ白ハ殆ドウカラナイ。ソレニモ不拘僕ハ息モツカヌ程キン張シテ最后ノ幕ノ下リル迄見詰メテ居タ。近代劇デハ未ダ仏蘭西デハイブセン・ストリントベルヒノ墨ヲ摩スル作者ハ出ナイヤウダ。

暇ガアツタラ手紙ヲ呉レ。菊地ニハ呉レグレモ宜シク。「象徴ノ雲深クワケ入ル」ハヨカツタ。我ハビユルレスクノ浪ヲ潜ラン哉ダ。然ラズンバグロテスクノ馬ニ跨ツテプレシオジテノ鞭ヲ振ハン哉ダ。

僕ノ此度ノ下宿ハ左記ノ如シ

<sup>(12)</sup> T. Tatsumo (Y. Tatsumo 氏ハナイ。 T. Tatsumo タリ)

chez Madame Clief 12 Rue Molière Lyon France

此ノ下宿ノ Madame<sup>(14)</sup> ハ芳紀正ニ五十三。其ノ昔ハピヤノト歌ノ名手ダ。宿ニハ君ノ昔ノ謡ヒノ友デアアル三井物産ノ辻君ガキル。君ニ宜シク云ツテ呉レトサ。ロザリヨノ連中ニ僕ノ宿所ヲ知ラセテ置イテクレ。

久能木ニモ西園寺ニモアンマリ事務家臭クナラズニチツター手紙ヲヨコセト云ツテ欲シイ。

豊嶋君ニモ非常ニ御無沙汰ヲシテ相済マナイ。宜シク云ツテクレ。クレグレモ。アンベル先生ニモダヨ。

ソレカラ君ノ奥サンヤ、お父サンお母サンニハ無論ノコトダ。ソレカラ例ノ雌雄ヲ弁ゼヌ少国民ニモダ。

早く帰ヘツテロザリヨノソアレーニ出タイナー。仏蘭西モ佳イガ結局日本ノ方ガ Mon cher Japon dont je suis ノ方ガ更ラニサラニ佳イカラナ。

此方ノ大学ハ十一月カラ始マルノダ。Tijdelijkカラ夏休ミンダヨ。呑気ダネ。九月廿九日 隆 信太郎賢台  
 虎皮下 (其ノ上ニヂケツガ乗ツカツテキルトコロロ) 天プラトスシガ食イタイ!!! Nota Bene (此ノ通信ロザリヨニ転載ヲ禁ズ)

(1) 七月十五日にリオンを発つて以来、二ヶ月半にわたつてスイス、オーストリア、ハンガリー、オーストリア、チェコ、ドイツ、ベルギーを回ってきたことになる。(2) 辰野隆・鈴木信太郎共訳『シラノ・ド・ベルヂユラック』(白水社)は翌大正十一年十月の刊行、辰野が「玫瑰珠」に連載したエッセイ「信天翁の目玉」は、『信天翁の眼玉』(白水社)として翌十一年三月に刊行。辰野は出立前に『さ・え・ら集』を提案、出版社が『仏蘭西文学の研究』を提案した。だが、「玫瑰珠」同人の菊池香一郎の強い反対で、結局『信天翁の眼玉』になつたという(鈴木信太郎「跋」、前掲『信天翁の眼玉』)。なお、大正十四年に春陽堂から再版した際、この書簡で辰野が提案したように『仏蘭西文学の話(信天翁の目玉)』と改題された。(3) エミール・エックは大正十年に退官し、暁星中学校の校長に就任した。マリアア会修道士の高齢化に伴い帰国や一時帰国が検討される中で異動が行われた影

響である（前掲『暁星百年史』）。後任には暁星及び一高の教師をつとめていたアンリ・アンベルクロードが就任した。（4）鈴木はエッセイで自身の恩師としてエックの名を何度か挙げている。鈴木はその関係を「極めて親しい師弟関係」（「二人の恩師」、『全集』第五巻）と規定する。（5）アンリ・アンベルクロード (Henri Humbertclaude, 1878～1935) は暁星中学校所属のマリア会修道士で一九〇八年来日、暁星中学の副校長や一高教授をつとめた。アンベルクロードについては、暁星と一高、東大で教わった渡辺一夫の回想が詳しい（「アンリ・アンベルクロード先生のこと」、「白日夢」講談社、一九九〇）。ジョゼフ・ヴァイグルス (Joseph Vayroux) も暁星のマリア会修道士で、大正十一年から十五年まで講師をつとめた（『東京帝国大学学術大観 総説・文学部』東京帝国大学、一九四二）（6）エックは暁星学園校長となり、関東大震災で罹災した学校の復旧に努めることになる。昭和五年に病を得て長崎で療養し、病が癒えると大阪の同系列の明星学校で教えた（西堀昭「元東京帝国大学文科大学教師エミール・ルイ・エック（一八六六—一九四三）」、手塚豊編『近代日本史の新研究』第三巻、北樹出版、一九八四）。（7）この箇所は、辰野・鈴木訳『シラノ・ド・ベルヂユラック』では、大正十一年版もそれ以後も、「舞台を三度たたく」場面として訳されている。（8）大正十年七月十三日に長女式子（鈴木道彦「鈴木家系図」、『フランス文学者の誕生——マラルメへの旅』筑摩書房、二〇一四）が生まれている。生年は全集年譜参照。（9）同人の山田珠樹・辰野隆・團伊能が次々と渡欧していたが、團はいちはやく大正七年に留学、大正十年に帰国した。團は大正九年二月以来二度イタリアに行き、八月からは一年弱イタリアに滞在し、さらにその翌年にも北イタリアを訪れた。この時の経験が『伊太利亚美術紀行』（春陽堂、一九二二）に生かされる（末永航「望みの青空の下——團伊能」、『イタリア、旅する心——大正教養世代がみた都市と美術』青弓社、二〇〇五）。（10）『リゴレット』(Rigoletto) は一八五一年初演のヴェルディのオペラ。『ル・シッド』(Le Cid) は一六三七年初演のコルネイユの悲劇。『にんじん』(Pois de carotte) は一八九四年出版のジュール・ルナールの小説。『アンドロマック』(Andromaque) は一六六七年初演のラシーヌの悲劇。『パサージュの鳥』(Oiseaux de passage) は一九〇四年初演のモリス・ドノーの劇。灯台守はクロクマン・オティエ『灯台守』か。『サムソン』

(Samson) は一九〇七年初演のアンリ・ベルンスタンの劇。オペラ、テアトル・フランセー、オデオン、ヌーヴェル・アンピギユ、グラン・ギニョール座、コメディー・モンテンはいずれもフランスの劇場。(11) 『死の舞踏』 (Dødsansen) は一九〇五年初演のストリンドベリの劇。(12) 菊地は菊池香一郎を指す。菊池は大正六年から鎌倉で結核療養を続けていた。鈴木と菊池の關係については、前掲『フランス文学者の誕生』を参照。(13) 以後、辰野は何度か「Tatsuno」と署名している。隆(たかし)を指すものか。(14) リヨンの下宿の主婦について辰野は何度か回想で触れているが、「若い時分には、リヨンの音楽学校でピアノ科と声楽科を首席で出たほどの才媛」で、十五歳の息子と十三歳の娘との三人暮らしたという(『フランス氣質』、『辰野隆随想全集』第四卷)。(15) 「玫瑰珠」には「仏蘭西近信」として辰野の書簡が載せられた(大正十年十一月号・大正十一年三月号)。公開が望ましくない手紙に辰野はその旨を断っている。本翻刻でもプライベートな内容など、記載に従って一部省略している。

書簡25 (1301-25) 大正十(一九二一)年十月二十三日付(二十五日消印・LYON)十二月五日消印・TOKIO)  
Tokio (Japan) 日本東京市外西巢鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 在仏国里昂 辰野隆  
封書 ペン

先ヅ<sup>(1)</sup> 拝啓トヤルカ。其<sup>(2)</sup> 后恋著セル婦人モ之ナク無事消光マカリ在<sup>(3)</sup> ルカラ安心シテ呉レ。先月の廿六日ニ里昂  
ニ帰ヘツテ来タト云フコトハ已ニ知ラセタネ。其<sup>(4)</sup> 后ザツト一ト月タツタガモ一里昂ニハ飽キアキシタ。大学ノ講義  
ハ来月ノ七八日頃カラ始マルンダガ、己ヲ啓発スル程<sup>(5)</sup> のProfesseursガキルカドウダカ。ト云フト少々話ガ大キク  
キコエルガ、少クモ己ヤ君ヲ<sup>(6)</sup> (此度ハ安心シタロー) 啓発スルヤウナ(仏文学の) professeursガソウ沢山<sup>(7)</sup> ニキヤ  
ウトハ思ヘナイカラネ。駄法螺デモ気焔デモナク。

此ノ十二月ノ末迄此処ノ大学ノ講義ヲ一寸ヤヂツテ来年早々巴里ニ行カウカト思ツテキル。

何ンテ云ツテモ巴里ハ大シタ都ダゼ。七月二十日バカリ九月二ハ一週間バカリ居タガ。全ク味ノアル都ダナ。セーヌ河ノホトリヲブラツイテモ、リユクサンブル公園ノベンチニ腰ヲカケテモ、モンマルトル界ワイヲソノソシテモ全ク Paris sentimental (巴里ハ男性ダツタカ女性ダツタカ忘レタ) テナ気ガスルネ。巴里ト云フ都全体ガ sentimental デアルノハ大シタコトニチガイナイ、ツマリ都一体ニ詩ガタダヨツテキルトデモ云フノカナア。

グランブールヴールアタリノキヤツフエーのテラツスニ腰ヲユツクリ卸シテ行キ来ノパリジヤンパリジエンヌヲ眺メテキル気持ハ何処ニモナイネ。

<sup>(3)</sup> Maurice Scève ガ Dêlie ノ中デ歌ツタ

美ナル哉 ローヌの流レ／金ノ砂 銀ノ水／Tu cours superbe, O Rhône florissant, / En sablons d'or et argentines eaux.

ノ Lyon モ悪イ都デハナイガ。ヤツパリ巴里ダ。

~~~~~

此頃ハ毎朝二時間ヅ、語学ノ稽古ニ行ツテキル。五十バカリノ女ダガナカナカ教養ガアル。シヤムピヨン夫人ト云フノダ。始メテノ日ニ Pierre Corneille 街11番地ノ五階ノ夫人ノドーアノベルヲ引ツパツテマダム・シヤムピニ^② ヨンハ御在宅カトツイマチガツテ発音シタノデソコノ娘ニ散々笑ハレチャツタ。女ガシヤムピニヨンダツタラ男ハ振袖ヲ着ラアネ。尤モソソナコトハ相手ノ娘ニハワカラナインダ^マンガ。

デ兔ニ角ソノ老夫人ニ就イテ Molière ヲ読ンダリ La Fontaine ヲ読ンダリシテキルノダガ、ナカナカアナタハ lecture ガお上手ニオナリダナンテ時々褒メラレル。褒メラレタツテ嬉シクモナイガ怒ル気ニモナラナイ。

一 ベン Dicterie ラヤラレタ。トコロガ案外ムツカシイ Dicterie が sans faute ダツタノデモウ Dicterie ハヤラナイデイ
 イト云フコトニナツタ。作文モ時々ヤラサレルンダ。「秋ノ日ガフルヴィエールノ丘ノ彼方ニ沈ンデ、黄ニ染ンダロー
 ヌ河ノ岸ノプラターヌガ風ニソヨグ。モラン橋ノタモトデ盲目ノ乞食ガ一竿ノクラリネツト。吹ク曲ハ白浪岩ヲカ
 ムブルターアーニユノ民謡」ト云ツタヤウナ件リヲ綴ツテ見セタラ大キナ声デ讀ンデ C'est beau ! C'est à la
 Chateaubriand !⁽¹⁾ダトサ。Chateaubriand テノハビフテキノ一種ダナドト早合点スベカラズ。己ノ文章ヲ褒メタノダ。
 「⁽²⁾ Chateaubriand ハ Chateaubriand ダガ未ダアナタハ動詞ノ時ノ用法ニ精通シテ居マセンネ。本統ノ
 Chateaubriand ハ動詞ノ時ノ用法ヲ決シテマチガヒマセンデシタ」トニヤニヤ嗤ハレタニハ私製 Chateaubriand 少々
 恐縮シタ。

~~~~~  
 里昂ニハ昔カラ有名ナ人形芝居ガアル。今デモ老人ヤ小供ハギニヨオルノ常連ダ。Faust, Samson et Dallah, la  
 Favorite, Carmen ト云ツタヤウナオペラヤ芝居ノ外題ヲモチツタモノガ多イ。カルメンデハチツポケナ闘牛ガ出テ  
 来テ、チツポケナ舞台ノマン中デプットオナララスルト尻カラ黄色イ粉パツト散ル。ヂイサン、バアサン、ヤ小供  
 達ガ悦ンデアツハハト笑フ。罪ガナクツテイ、ゼ。ドンナ外題デモ必ズギニヨオルトニヤツフロンソレカラマ  
 ドロント云フ女型ノ人形ガ必ズ出テ来テフザケル。肩ノ張ラナイコト夥シイ。

~~~~~  
 瑞西、壞地利、ハンガリイ、独乙、白耳義トグルグルマワツテサテ仏蘭西ニ再ビ落付イテパンヲ食ベテ見ル。実
 ニ旨イ。又色々ナパンガアルンダ。三日月型、大根型、ステツキ型、胡瓜型、牛ノ糞型、お盆型。振クレタ奴、平
 ベツタイ奴、円イ奴、輪ニナツタ奴、……皆ンナ味ガ少シヅ、チガウンダ。

朝ローヌの岸ヲ散歩スルトソコイラノオカミサンラシイノガ手サゲノ籠ニ野菜ヲ一パイ詰メテ小腋ニ長サ二尺徑三寸位ノパンヲ抱ヘナガラゾロゾロ歩イテキル。

~~~~~

兩ガ降ルト電車ノ運転手台ノ前ニ大キナカオモリ傘ヲクツ着ケル。運転手が巻蓑ヲクワヘナガラ電車ヲソロソロ走ララセル。「抹消「呑気ナモンダ。」」里昂ノ天下ハ正ニ泰平デアル。十月二十三日 仏国里昂ニテ 隆

エツク先生慰勞会ノコトハ何分宜シク願フ。何カラ何マデお願ヒシテ恐縮ダ。心カラ御礼ヲ申上ゲル。豊嶋君ニモ宜シク。

シラノノコト、目玉ノコト、凡テ君ノ思ツタヤウニ取計ラツテ呉レ。

慰勞会寄附金ノコトハ早速家ニ手紙ヲ出シテ置イタカラ、遠慮ナク取りニ行ツテ呉レ給ヘ。

- (1) この書簡は前掲「フランス文学黄金伝説」に一部省略・改編のうえ、辰野の留学時の様子を示す手紙として引用されている。
- (2) 実際に辰野がリヨン大学で聴いたのは、ジャン・マリ・カレ (Jean-Marie Carre, 1887 ~ 1958) の比較文学やフォション (Henri Focillon, 1881 ~ 1943) の美術史の講義だという (「ほりだしもの」)。「辰野隆随想全集」第四卷)。辰野は親交のあった東洋学者モリス・クーランと総長ポール・ジューバンの他 (書簡8 (1) 参照)、商法・ローマ法のユウラン (Paul-Louis Huvelin, 1873 ~ 1924) と指紋法のロツカール (Edmond Locard, 1877 ~ 1966)、ギリシア語のルグラン (Émile Legrand, 1841 ~ 1903) の名も挙げている (前掲「空瀾先生」)。(3) モーリス・セーヴ (Maurice Scève, 1501-05頃 ~ 1560頃) はフランスルネサンス期の詩人。引用は詩集『デリー』(Délire) 中の一篇。辰野は母親宛の手紙でもこの詩を引用している (「旅のおもいで」)。「辰野隆随想全集」第四卷)。(4) 作文の文章を名文家シャトープリアン (François-René de Chateaubriand, 1768 ~ 1848) 風の文章だからかわれ

ている。(5)人形芝居ギニョールは革命後にリオンを発祥の地として生まれた。織物職人で主人公のギニョールと酔っ払いのニャフロン、ギニョールの妻マドロンなどが共通する人物として作中に登場する。(6)大正十年に退官したエックの慰労会は、翌大正十一年三月四日に上野の精養軒で行われた。この会は鈴木と豊島で相談して進めたが、直前に鈴木が高熱を発し、豊島が主に進めることになった(鈴木信太郎「豊島與志雄」、『全集』第五卷)

書簡 26 (1301-26) 大正十(一九二二)年十一月十一日付(十一日消印・LYON/十二月十一日消印・TOKIO)  
Tokio (Japon) 日本東京市外西巢鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 里昂にて 隆 絵葉書  
ペン

先月の末三日ばかり旅をしてアヴィニヨン<sup>(1)</sup>、ニーム、アアルを見物して来た。仏蘭西の南部はゆつたりしてゐていゝ、気持だせ。アヴィニヨンでは法皇家をニームでは円舞場やデアヌのタムプルをアアルでは古墳やミストラル博物館を見た。何もかも古い。そして落付いてゐる。里昂はどうく冬になつて了つた。ロオヌの岸を歩いてモソオヌの岸を歩いてても川風が刺すやうにいたい。十一月十一日 里昂にて 隆

【裏面】アヴィニヨン・サン・ベネゼ橋の写真

(1) いずれもリヨンの南方、アヴィニヨン、ニーム、アアル。アヴィニヨンの法王庁、ニームの円形闘技場やダイアナ神殿、アアルのアリスカン及びアルラタン博物館が言及されている。

書簡27 (13-01-27) 大正十一(一九二二)年一月四日付(五日消印・LYON) Tokyo (Japon) 日本東京市外西巢  
鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 リオンにて 隆 絵葉書 ペン

賀正。暮の卅日から南方<sup>(1)</sup>ニス、モンテカルロ、マントンの方面を旅して来た。モナコの大バクチ場を見た記念に  
此葉書を買つて来た。僕は君子だからバクチはやらなかつた。七日には愈々<sup>(2)</sup>巴里に移る。宿は山田と同じホテル  
ジャンダルクだ。

Hôtel Jeanne d'Arc 52 rue de la Clef Paris (V<sup>e</sup>)

御無沙汰ばかりして申わけないが筆無精は君もよく知つてゐるから怒らずにかんべんして呉れ給へ。御両親マダ  
ム、及び小さなマドモアゼルに宜しく。甚だ恐縮だが<sup>(3)</sup>ロザリオの「如是我聞」の号が若しあるなら一部巴里のオテ  
ルジャンタルクに送つて呉れないか。其后頗る品行方正だ。相不変頑健。一月四日 リオンにて 隆

【裏面】モンテカルロのルーレットの絵

(1)この時の旅行は、三井物産の支店に勤めていた友人と行ったもの。モンテカルロの賭博場の様子は「映画妄談——『モザ館』  
その他」(『辰野隆随想全集』第二巻)に描かれている。(2)セーヌの左岸、学生街に近い横町にあり、「名だけは立派で実はき  
たならしい下宿」。辰野はここで一年を過した(『懐しいパリ (1921—1923)』、『辰野隆随想全集』第四巻)。森茉莉は建物の構  
造を細かく回想している。「汚れ、すり減った絨緞に靴の踵がひっかかる狭い階段が建物の真中を五階まで通っていて各階に(コ)  
の字型に六室ずつ部屋がある。表通りに向いた窓は人間が一人立てる位の張り出し窓で、窓掛けは薄茶の碁盤目の細いレエス。  
階下には表通りに面して応接間と、主人夫婦の居間があった」(『ホテル、ジャンヌ・ダルク』、『記憶の絵』筑摩書房、一九九二)。

(3) 辰野の戯曲『如是我聞』が掲載された「玫瑰珠」大正七年一月号を指す。『如是我聞』は、『信天翁の眼玉』にも収録されている。

書簡 28 (13-01-28) 大正十一(一九二二)年一月二十五日付(二十五日消印・PARIS) Tokio (Japon) 日本東京  
西巢鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 巴里にて 辰野隆 絵葉書 ペン

① ロザリオ(六月十一月号)及び明星の君のネ・オ・ヴンとサ・エ・ラとを面白く読んだ。いつもながら達文だと思ふが少々ビュルレスクすぎるところがありはしかとも思ふ。ロスタン論<sup>②</sup>に書いてゐるぐらいの調子が却つてよくはないか。御一考を煩はず。僕も何か通信<sup>③</sup>を書き度いと思つてゐるが、書く事がきらいなんだから困る。日々新聞にも未だ一回も送らない。其のうち何か書き度いとは思ふがその「そのうち」がいつになる事だか。一月廿五日巴里にて 辰野隆

【裏面】パリのアレヴィ通りの写真

(1) 「玫瑰珠」大正十年六月号には鈴木信太郎「さ・え・ら」、大正十年十一月号には同じく「NEZ AU VENT」が掲載されている。「Nez au vent」は「シラノ・ド・ベルジュラック」の第二幕九齣に出てくる表現からとられたもの。また「明星」大正十年十二月号にも「Cine Tharaud の名」<sup>①</sup>「NEZ AU VENT」が掲載されている。(2) 鈴木「エドモン・ロスタンについて其の一」(「玫瑰珠」大正十年六月号)、「エドモン・ロスタンについて(其の二)」(「玫瑰珠」大正十年十一月号)を指すか。(3) 辰野隆「仏蘭西近信」が、この後の「玫瑰珠」の大正十一年三月号に掲載されている。

書簡29 (130129) 大正十一(一九二二)年三月二十九日付(三十一日消印・PARIS / 五月三日消印・TOKIO) Tokio

(Japon) 日本東京西巢鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 T. Tatsuno Paris, France 封書 ㄟ

永イ手紙ヲアリガトウ。

君ハ日本デヒドク忙シソーダネ。僕ノ代リニ奮闘シテ居テ呉レルノハ甚ダウレシク頼モシイ。

目玉ヤ「シラノ」ノコトデ色々お骨折ハ感謝ノ他ハナイ。

夜学<sup>(2)</sup>ノコトヤ仏文出身者トノ交渉ヤデ不愉快ナコトガ多イノハ実ニお氣ノ毒ダ。然シ大学ノ方ハ万事愉快ニヤツテ居ルト云フノデソレハ何ヨリ結構ダ。コレガ一番肝心ナノダカラネ。エツク先生、アンベル先生ニ宜シ<sup>(マ)</sup>云ツテ呉レ給ヘ。

若シ仏文出身者ト君トノ間ニ不愉快ナコトガダンダン増シテ来テ、而シテ君ノ方ニ常ニ正シイ理由ガ在ルナラバイツデモソシナ野卑ナ連中トハ絶縁スルガイイ。不愉快ヲ忍ンデ交ハル必要ナドハ些<sup>(ト)</sup>モアリハシナイノダカラネ。アラユル時間ヲ君ノ、君自身ノ仏文学研究ニ使ハナケレバ嘘ダヨ。癩ニサワツタライツデモ喧嘩シタマヘ。菊地ノヤウニ。

己ハ毎日芝居バカリ見テ居ル。時々コメディーフランセーズノ廊下<sup>(3)</sup>デ太宰ニ会フ。ガンムドキヲモ一度アゲタヤウニ肥ツテキルゼ。生イ<sup>(ナ)</sup>キニ芝居デ通ヲ利カサ<sup>(マ)</sup>トシヤガルカラ、滑稽ダ。ソノ癖格蘭ギニヨール座ナドハ一度モ行ツタコトガナイト見ヘテ、「其ノウチニキツト行ク」テ云ツテキル。巴里ニ二年モ居テ一角ノ劇通ヲフリマワシナガラ格蘭ギニヨールヲ知ラナイノハ大イニ笑ハセル。

彼奴ハ新聞批評ガ悪イ芝居ニハ行カナイラシイ。トコロガ大抵ノ劇評家ノ評ナドハお座ナリデソシナモノナドヲ

当ニシテ居タ日ニハ初マラナイノダ。

山田ガ日本ニ居タ時太宰ニ頼ンデフランスカラ本ヲ送ツテ貰ラツタコトガアル。ソノ勘定ヲ払フ為メニ太宰ニ逢ハナケレバナラナイト云ツテ居タ。ソコデ我が輩曰ク「其ノ時ニ太宰ガ何ンテ云フカ当テテ見ヤウカ。少々自分ノ方デ立テカヘテ置イタガ、ナアニソソナモノハドウデモイイサ」ト云フニチガヒナイ。」

此ノ話ヲシタ翌日コメデイーフランセーズデ山田ガヒヨツクリ太宰ニ逢ツタノデ、本ノ代ノ話ヲシタラ、「少シタテカヘテ置イタケレドモ、ソソモノハドウデイイ」ト云ツタソーダ。山田ガニヤリト嗤ツテ「お前ガ昨日云ツタ通りダヨ」ト己ニ話シタコトダ。一寸太宰施門君ガ目ノ前ニチラツキハシナイカイ。

前便デモ話シタヤウニシラノヲ二度観ニ行ツタ。リオンデハ三度見タ。兎ニ角見テ居テハ頗ル面白イ芝居ダ。一寸忘レナイ中ニ云ツテ置クガ、シラノ第一幕の終リノ方デシラノガ役者達ニ向ツテナゼ自分ハリニエールガ氣ニ入ツテ居ルカラ説明スルクダリガアルダロー。リニエールガ惚レタ女ノ'eau benite ヲ一氣ニ飲ンデ了ツタト云フ文句ガアツタネ。君ノ訳「只ノ水デハタマラス：」トカ何トカアツタト覺エテ居ルガ、アレハリニエールガ其ノ時ニ非常ニ喉カ乾イテキタノデイキナリ女ノ持テ居タ'eau benite ヲグツト飲ンデ了ツタト云フ意味ダ。

モリエールノ三百年祭ハ甚ダ旺ンダツタ。各芝居デモリエール物ヲ出シタ。殊ニコメデイー・フランセーズデハ一週間ニ四五回ハモリエール物ヲ出シテソレガ一ヶ月以上続イタカラ、モリエール研究ニハ甚ダ都合ダツタ。ヤハリミザントローブガ一番イイネ。次ガ僕ノ考デハドンジュアンダ。ソレカラ、アヴール、タルチュツフ、フアンム・サヴント、マラデイーシマジエールカナ。仏蘭西人ハモリエールヲ神様ニシテキルガ、ソソナモンデハナイ。モリエールノ作ハ三分ノ二ハ駄作ダ。ブルジョワジャンチヨムナドハ人ヲ馬鹿ニシタモノダ。

此度ノ三百年祭興業デ最モ感心シタノハアドウワール七世座ノミザントローブダツタ。リュシヤン・ギットトリイ

ガアルセストニ扮シタガ、スバラシイ出来ダツタ。

仏蘭西ニハ上手ナ役者ガ実ニ多イ。殊ニ女優ハ相当ナ芸ヲ持ツタ奴ガ升デハカル程キル。然シコレコソ名優ダト思フヤウナノハサテ居ナイモノダ。先ヅリユシヤン・ギットリイト（サツシヤ・ギトリイニハ失望シタ）コメデイーフランセーズ、Pierrot<sup>(7)</sup>云フ女優ノ二人ヲ措テハ名優ヲ以テ許スコトガ出来ナイ。コメデイーフランセーズノフエロオデイーモ上手ト云フ点デハ申分ナイガ深イトコロガ欠ケテ居ル。Pierrotハ全ク名女優ダネ。顔ハアマリ美シクナイ。然シ芸ハ申シ分ナイ。頭ガヨクテ、ヒドク品ノアル女優ダ。年ノ頃ハ三十七八カナ。今后十年ガ此ノ女ノ全盛ダロト思フ。

<sup>(8)</sup> コルネイユ物デレ Cid, Horace, Polyucte, ラシイヌデハ Andromaque, Phèdre, Britannicus, Bajazet ヲ既ニ觀タ。ソノ他、マリヴオー、ミユツセ、ユーゴーノモノモ二ツ三ツツ、見タ。

芝居ニ一週ニ四五回ハ必ず行ク。コメデイーフランセーズノ役者ナラ、下女・下男ノ役ヲスル奴マデ顔ト名前ダケハ知ツテ居ル。

先夜<sup>(9)</sup>ホルトサンマルタン座<sup>(9)</sup>に Rostand, Romanesque ト La Dernière nuit de Don Juan ヲ觀タ。ヤツパリ Rostand デハ Cyrano ニ止メヲ刺スネ。

ソルボンヌノ講義ハ未迄ニ二三度聴イテ見タ 此頃デハメツタニ出ナイ。

~~~~~

此ノ手紙ノ初メハ二月ノ初メニ書イタンダ。ソシテ書キカケテ今迄枕ノ上ニ置イテアツタノヲ今日又書キ足シタ。呑気ナ話ダネ。此ノ間ニ君ガチブステ入院シテ居ルト云フ知ラセヲ家カラモ、実サンカラモ、エック先生カラモ得タ。

然シ重大デハナイト云フコトヲ聞イテ安心シタ。大事ニ養生シテ呉レ給ヘ。山田ハ細君⁽¹⁰⁾ガ来ルノデ毎日ニヤニヤ

シテ居ル。チンボコニヨリヲカケテ待つテキルンダロー。

僕ハ馬鹿々々シイ程品行方正ダ。巴里ニ来テモウ三月ニナルガ未ダ女ヲ知ラナイ。第一欲シクナイノダ。不思議ト云ヘバ不思議ダガ。アマリトーモロコシニハ興味ガナインダ。ドウモ此方ノ女ニハ *delicatesse* ガ著シク欠ケテキルネ。

宿ノスグ近所ニラビラントト云フカツフエーガアルガ芝居ノ帰ヘリニハ必ズソコニ寄ツテアンボツクヲ飲ム。芝居ニ行カヌ時ニハ山田⁽¹³⁾矢田部石本トツレ立ツテ夜ノ十一時頃カラ十二時頃迄ソコニ行ツテ何カ飲ンダリ食ツタリシナガラ話シヲスル。ソコニEdmond⁽¹⁴⁾ト云フ年寄ノギヤルソングキテ已達ハ其奴ト仲ヨシナンダ

Edmond⁽¹⁵⁾ハEmile Faguetヲヨク知ツテ居テFaguetガ死ヌ前ニハヨク看病シテヤツタソードダ。Faguetハ毎日此ノラビラントニ来タノダソードダ。EdmondハFaguetハアカデミシヤンダカラ *immortel* ダト云ツテキル。僕ノ方ガFaguetナドヨリハ偉イト云フコトヲ知ラナインダ。ソシテ“*Vous êtes étudiant ? Travaillez bien.*”ト来ルニハ恐入ル。皆ニ宜シク云ツテ呉レ給へ。原稿ナドハトテモ書ク氣ニナラナインダ。

(要件) エツク先生ニ呉々モ宜シク。非常ニ御無沙汰ヲシテキルカラ君カラ御詫ビヲ云ツテ呉レ給。

此ノ夏ニハエツク先生ノ故郷⁽¹⁶⁾ヲ訪ネルツモリダ。エツク先生カラ先生ノ巖君ニ紹介状ヲ貰ツテアルノダガソレニハ宿所ガ書イテナイノダ。ダカラ君カラエツク先生ニキイテ知ラセテ呉レ給へ。何ンデモBerfort⁽¹⁷⁾ノ近所ダト云フコトハカネテキイテ居タガ。

ロザリオノ一週年記念号ハ確カニ落手シタ。

君ノ家デモ皆サン御変リナイダローネ。

御両親初メマダムニモ、少サナ方々ニモ宜シク。

僕ハ此年ノ十二月ニハ仏蘭西ヲ去ルツモリダ。英・米ヲ經由シテ来年ノ二月ノ末カ三月初メニハ再び君ヲ見ルコトガ出来ルダロー。名士ノ訪問ナドハ元々キラヒダカラ一切ヤラナイコトニシテキルガ、フトシタ機会カラ此頃⁽¹⁷⁾ René Ghilbert⁽¹⁷⁾云フ詩人ノ家ニ時々遊ビニ行ク。此人ハヴエルレーヌ、マラルメ以后ノ人トアル批評家ハ云ツテ居ル。而シマラルメヨリ更ラニ難解ダ。僕ニハ全ルデ見当ガツカナイ詩バカリ書ク。ヒドク真面目ナ詩人ダガ何分ニモワカラナイ。困ツタ人ダ。年ハ六十ダト云フガ四十五六ニシカ見エナイ。

時々ストロフスキイノ家ニモ遊ビニ行ク。人ノイイオヤヂダヨ。三月廿九日 鈴木兄 隆
菊地ニハメチャメチャニ御ブサタシテキル 呉々モ宜シク。

52 rue de la Clef. Hôtel Jeanne d'Arc Paris (V^e).

(1) 『信天翁の眼玉』は鈴木の跋文を付して三月に刊行、共訳『シラノ・ド・ベルヂユラツク』は十月に刊行される。(2) 暁星の夜学への講師の派遣を指すか。大正十年からフランス語を暁星の夜学で学んだという大野俊一は、後藤末雄と鈴木信太郎に教わったと回想する(大野俊一「神西清と堀辰雄」、『新潮』一九五九・二)。講師の派遣や卒業生の集まり等で、エツクの教え子に当たる仏文科卒業生との関わりが東大仏文科研究室との間にあつたと見られる。(3) エツク門下の太宰施門は大正二年に仏文科を卒業、大正九年二月から十二年二月までフランスに留学している。滯仏中の大正十年に京都帝国大学文学部の助教に任命されている。(4) 該当箇所は大正十一年版では「弥撒の帰りに規則の通り、此奴の惚れてる女が、聖水をうけたのを見やがつて、只の水ではたまらぬ此奴も、聖水の壺に馳け寄つて、呑み口に身をかがめると見る間に、きれいに底まで呑みほしたんだ」。(5) モリエール (Molière, 1622 ~ 1673) の生誕三百年が一九二二年。コメディー・フランセーズでは、一月がモリエール月間で、二十四作品三十五公演が上演された(榎本恵子「モリエール年のコメディー・フランセーズ」)〔コミュニケーション文化論集〕

二〇二三・三)。以下「辰野が挙げているのは『人間めくら』(Le Misanthrope)、『ドン・ジュアン』(Don Juan)、『守銭奴』(L'Avare)、『タルチュフ』(Tartuffe)、『女学者』(Les Femmes savantes)、『病は気から』(Le Malade imaginaire)、『町人貴族』(Le Bourgeois gentilhomme)。(6) この時の公演について、辰野はリュシアン・ギトリが饒舌に語りながらも人物の語られぬ内面を表現しえていたとその夜の印象を詳しく振り返っている(前掲「リュシアン・ギトリ」)。(7) マリー・テレーズ・ピエラ(Marie-Thérèse Piérat, 1883～1934) について「辰野は『現代フランス女優中最も注目し値する名人』として取り上げている(『ピエラ』、『辰野隆随想全集』第四卷)。フェロオデーはモーリス・ド・フェロデー(Maurice de Féraudy, 1859～1932)。辰野はギトリと対照し、「我々の近くに生活する人間を描き出す」俳優と評し、その「白まわしの自在」さを評価した(「モーリス・ド・フェロデー」、『辰野隆随想全集』第四卷)。(8) 以下、挙げられている演目はコルネイユ「ル・シッド」(Le Cid)、『オラーヌ』(Hortense)、『ポリユークト』(Polyeucte)、『ラシーヌ』(Andromaque)、『フェードル』(Phèdre)、『ブリタニキウス』(Britannicus)、『バジャゼ』(Bajazet)。(9) ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』はポルト・サン＝マルタン座の一八九七年の当たり公演。「Romanesque」は『ロマネスク』(Les Romanesques)のこと。「ドン・ファンの最後の夜」(La Dernière nuit de Don Juan)は遺作。(10) 大正十一年二月、鈴木信太郎は腸チフスで高熱を出して生死の境を彷徨った。次の書簡30で伊香保に鈴木が滞在しているのは、病後の静養のため。(11) 山田珠樹は大正十年四月に一足先に渡欧し、妻の茉莉(森茉莉)は大正十一年三月、医学研究のために留学する異母兄の於菟と共に渡欧した。(12) 「un book」(一杯のビール)のこと。(13) 心理学者の矢田部達郎(一八九三～一九五八)。この頃、ソルボンヌ大学に留学していた。森茉莉の「矢田部達郎」(前掲「記憶の絵」)の中では、「気概と自信が荒鷲のように内に羽搏いている」矢田部の姿が活写されている。(14) エドモンは辰野がパリのフランス人としてしばしばエッセイで言及している人物。前述のカフェ・ラビラントに三十五年つとめ、多くの常連客を知る給仕。エミール・ファゲとの交友など、この書簡の内容は「エドモン」(『辰野隆随想全集』第四卷)と多く一致する。(15) エミール・ファゲ

(Emile Faguet, 1847 ~ 1916) はフランスの批評家。「アカデミシヤン」とは、ファゲがソルボンヌ大学教授であったことを指す。(16) ベルフォールのダンジュータン(前掲西堀論)。書簡33では、実際に辰野が訪ねたことがわかる。(17) ルネ・ギル(Rene Guil, 1862 ~ 1925) はベルギー生まれのフランスの象徴派詩人。マラルメに認められ、火曜会の常連となり、独自の詩法を追究した。辰野は放浪の貴族コント・ド・クローズにはじめてその詩を勧められて読み、本人を訪ねてその詩法やマラルメ・ヴァレリーへの評価、石川啄木の歌の話をし、詩集を贈られている(ル・パントゥーン・デ・パントゥーン)、『辰野隆随想全集』第四卷(18) ソルボンヌ大学教授のフォルトゥナ・ストロフスキー(Fortunat Srowski, 1866 ~ 1952) か。

書簡30 (1301:30) 大正十一(一九二二)年四月八日・十日付(十一日消印/五月十六日消印) Tokyo (Japan) 日本東京西巢鴨向ヒ原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様(乞御廻送 上州伊香保温泉場木暮武太夫方 鈴木信太郎様) 「発信住所欠」 「発信名欠」 封書内に絵葉書二枚 ペン

【一枚目表】

(第一号) 四月八日(土曜) 春風に誘はれてフラくと和蘭に行く気になり、夜十時半巴里のギヤアル・ド・ノオルから出発。同行三人石本、山田、辰野。里雨「今日はおしやか様の生れた日だよ。知ってるかい」巳四「黙」かくしから船酔の薬をコツソリ取出して汽車の中で呑んでゐる。珠「黙」……暫くしてから思出したやうに「きざらぎの中の五日ではなかつたかな」里雨「ばか云へ。そりや鶴の林にたきッ尽きにし日だ」珠「フン」つまらないうにファイガロを読み始める。箱は二等室、三人の他に英人と覚しき若夫婦一組。年の頃廿ばかりの仏蘭西の女、一寸踏める顔なんだ。珠「ねえ里雨公今日は下宿とちがふからオナラは禁物だよ」里雨「心得た。しかしスカシは受

合はないよ」巳四「しかしスカシは：：何だか東北の地口のやうだな」此んな埒もない話をしてゐる間も汽車は遠慮なく走つて夜はシン／＼と更けてゆく。さうさね。何でもうし三ツ頃だ。白耳義の国境でパスポートをしらべられたので一同目がさめて、それから更らにうつら／＼し初めた時例の仏蘭西美人がとつもないデカイ尻をたれたんだ。己は吹出し度いのを堪へながら一寸己の前にある石本の顔を見た。石本も笑ひを無理に押へ付けてゐるらしい。すると今迄石本の膝の上に頭をのせて睡つてゐたと思つた山田が不意にとんきよな声を出して、「今の尻は里雨公かい」里雨「馬鹿云へ貴様の隣の女だい」

【一枚目裏】*アムステルダム国立美術館所蔵のヘラルト・テル・ポルフの絵

己達三人は一時におかしくなつた。それでも無理にこらへてゐた。するとよせばよいのに再た山田が「オイ巳四公、笑つてゐるのかい、お臍がヒコ／＼動いてるよ」と下らない事を云ふので、もうどうにもかうにも、我慢が出来なくなつて三人一時に吹出した。可哀さうに尻の女は間もなく室を替へて了つた。

四月九日、朝十時半己達の汽車は白蘭の国境をすぎて愈々カナールの多い和蘭の平原を走つてゐる。里雨「和蘭は海よりも低いんだよ。遠くの方を見る。上の方に海がアラアね」珠「成程、まア水族館を思へばい、な。オランダ鮪の横顔が見えるぜ」巳四「尤も雑魚は遠方だから見えねえ」里雨「下らねえコトを云ふない。だが待てよ、向ふの林の上に海があるやうだな」巳四「だから云はねえこつちやない。魚木に登る風情ありサ。ウフフ。」此んなあんばいで午後二時アムステルダムに着く。美術館でレンブラントに一同感服そこで今日は幕だ。

【一枚目表】

第二号 四月十日。（月曜日） 今日ハ活動ヲシタ。朝早くあむするだむヲ発テはーれむニ行ク。コ、デ、⁽⁴⁾Frans Halsノ美術館ヲ見テ、更ニらいでむニ出ル。らいでむト云ツテモ雷電⁽⁵⁾為工門ノ故郷ヂヤナイ。らいでむ瓶⁽⁶⁾デ中学以

来御承知ノ理科大学ノ所在地。近クハおんねす・かめれをん(?)博士ノ低温度研究ニ名高キ：：偉イダロウ。石本ガ居ルノデ、おんねす先生ノ実験所ヲ見テ来タ所ナンダヨ。：：れんぶらんハコノ地ニ産レタムダガ今ハナンニモナイ。更ニ今一息フンバツテ、はーぐニ来タ。はーれむノ町デ、空腹ヲカカヘテ、安食堂モガナト探シ歩イテル時ノコトダツタ。彼方カラ物売りガ声高々ト呼びナガラ来ル。ソノ声ヲキクト「オマンコ、オマンコ」ト云ツテ居ル。石本曰ク「日本ニモ全ジ商売人アリトハキイテハ居タガ、ドーダ辰野、日本デモ、アーユウ風ニドナルノカイ」辰野「日本デハ泣クンダ」山田ガソノ商品ハナニカト好奇心ヲ起シテ、ノゾクト、ちーすダツタ。赤黒クテ臭カツタ。石本ツケ加ヘテ「モチヤモチヤ黴ガ生ヘテ居ルヨ」

はーぐノ町ヲ歩キナガラ、大議論ガ起ツタ。問題ハ「西洋ニ於ケル東洋人ノ義眼」青眼ニシテ人ヲ見ルニ便ナリト云フ説ト、金玉ガ四ツ出来テ便ナリト云フニ説ガアツテ、遂ニ決シナイ。石本「ソレハマツタクノ盲目ノ場合ダネ」山田「一ツハへそダ」

【二枚目裏】*ワルヘレンの風車の写真

石本「黄色イ臍ハ見タコトガナイ」辰野「べそヲカクト云フカラ臍モ眼ニ違ヒナイ」ホントノ辰野曰ク「己ハそんな事を云つた覚えはない。己は黄色いへソを見た事があるのだ。小供の時に虫が起ルとよくへソにやにをつけられたからね」石本「黄色い臍は断じて見たい」山田「俺は白い臍を見たことがある。」二人「なんだ」山田「悪夢の翌朝」

(1) この時のオランダ旅行のエピソードは「欧州双六」(『辰野隆随想全集』第四卷)で描かれている。(2) 石本巳四雄(一八九三—一九四〇)は地震学者で、後に東京帝国大学の地震研究所の所長をつとめた。辰野「石本巳四雄博士」(『辰野隆随想全集』第

一卷) によれば、石本が山田の下宿でレンブラントが嫌いと言ったことで「実物を観ながら是非を極めよう」という話になり、『夜警』を見にオランダ旅行が決まったという。(3) 「二月の中の五日は、鶴の林に薪尽きにし日なれば」は『増鏡』序。こちらは釈迦入滅の日とされる。(4) フランス・ハルス (Frans Hals, 1585 頃 - 1666) はオランダの画家で肖像画で著名。ハルスが晩年に過ごした養老院がハルス美術館になった。前述のレンブラントはアムステルダム国立美術館所蔵の『夜警』他を指すか。石本は実物を見て納得したという。(5) 雷電が右衛門(一七六七 - 一八二五) は古今最高の勝率を誇るとされる江戸後期の力士。(6) ライデン大学を指す。ライデン瓶は蓄電器の一種で、一七四六年にライデン大学の物理学者ミュッセンブルクが放電の実験に使用した。(7) カメルリン = オンネス (Heike Kamerlingh Onnes, 1853 - 1926) はオランダの物理学者で、低温物理学を發展させた。日本では「オンネス・カメルリン」などと表記された。(8) レンブラント (Rembrandt van Rijn, 1606 - 1669) はライデン生まれでライデン大学に入ったが退学して画家に転向、後にアムステルダムに移住した。

書簡31 (1301-31) 大正十一(一九二二)年五月十二日付(十三日消印・PARIS) 日本東京府西
巢鴨向ヒ原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 巴里にて 辰野隆 絵葉書 ペン

MON CHER AMI 三 其後からだの具合はどうだい。一時はなか／＼重大だつたときいて非常に心配した。此のはがきの着く時分には君が全快してゐる事を切望する。菊地は⁽¹⁾実に気の毒な事をした。いくら惜しんでも足りない。僕は此方に来てから菊地には手紙らしい手紙も書ずに了つた。死なれて見ると一層済まなかつたやうな気がする。君が入院する、久能木が病気になる、西園寺が再入院する。日本に停まるロザリヨ連は此年は厄年だね。どうか皆巴里にゐる僕等のやうに早く健康になつて呉れる事を切望する。君始め皆の健康を祈つてやまない。御宅の皆さま

んにも宜しく 五月十二日 巴里にて 辰野隆

【裏面】パリ・イタリアン大通りの絵

(1) 「玫瑰珠」同人の菊池香一郎は鎌倉で四月四日に死去した。

書簡32 (1301-32) 大正十一(一九二二)年六月八日付(九日消印・PARIS) Tokio (Japon) 日本東京府下西巢
鴨向原三五十九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 巴里ニテ 隆 絵葉書 ペン

日本の家から「目玉」が出て原稿料をもらつたと云つてよこした。万事君の御じん力によつて出版のはこびに至つた事を心から感謝する。僕が物を書いて金をとる事は家の者は全く予期しなかつたので、その金がお菓子になつたり洋食になつたり、半畝りや長じばんの袖になつたりして母や女房や小さな弟や小供達をよろこばしたらしい。ところで出版の運びに至らしめたかんじんの君に何か御礼をするのを忘れてゐるらしい。女ばかりでうかつだからきつと忘れてゐるにちがいない。僕から家の者によく云ひつけて置くから未だ君のところへ御礼に行かなかつたら僕にめんじてかんべんして呉給へ。皆さんに宜しく 六月八日 巴里ニテ 隆

此の頃巴里はなか／＼暑い七月中旬から英国、スカンヂナヴィヤ、デンマルクの方に旅をするつもりだ。

【裏面】パリ・商事裁判所の写真

(1) 留学二年目の夏の旅行。辰野と山田珠樹は七月十日にパリを出発、カレーから船でドーヴァー海峡を越えて汽車でロンドン

に向かい、山田はドイツ、辰野は十九日ノルウエーのベルゲンに向かう。二十一日デンマークのクリスチャニア、二十二日スウェーデンのストックホルム、二十四日デンマークのコペンハーゲンへ。翌日ドイツのハンブルグへと向かった(辰野「旅の日記」、『辰野隆随想全集』第五巻)。

書簡33 (13-01-33) 大正十一(一九二二)年九月十五日付(十九日消印・PARIS / 十月二十八日消印・TOKIO)
Tokio (Japon) 日本東京市外西巢鴨向比原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様(親展) 52 rue de la
Clef. Hôtel Jeanne d'Arc Paris (V^e) France T. Tatsumo 封書 ㄨㄣ

御ブサタハお互ヒダカラ、チヨ一消シニシテ、兎二角、君ノ健康ガ旧ニ復シツ、アルノハ何ヨリお芽出度イ。女房カラ手紙ガ来テワザワザ君ガ病後ノカラダヲオシテ駒場迄来テ下サツタコトヲ非常ニ悦ビ且ツ君ノヤセタカラダニ障リガナカツタカト云フコトヲ大イニ心配シテ来タ。

其後引続イテ快方ニ向ヒツ、アルノダローネ。et je l'espère一此夏ノスカンヂナビヤ旅行ハ非常ニ愉快ダツタ。山田夫妻トロンドン迄ハ一緒ダツタガ、ロンドンデ彼等ハ欧外先生ノ計ニ接シタノデ、取敢ヘズ森於菟学士ト種々打合セラスル為メニ彼等ハ伯林ニ僕ハ独リデノールウエーニ行クコトニナツタ。

ノールウエノ景色ハ蓋シ天下一品ダネ。僕ハベルゲンカラヴオスヲ過ギテクリスチャニヤニ至ル迄汽車ノ窓カラ窓外ヲ過ギ行ク北欧ノ nature ラメバタキモセズニ見通シタ。

有名ナファイヨールド、河、湖、谷、山、森、全ク日光ト箱根、塩原、伊香保、大井、天龍、富士川ナドガ一時ニ集マツタヤウナ景色ト云ヘバ先ヅ大抵想像出来ルダラウト思フ。

クリスチヤニヤデハイプセン、ビヨルンソンノ墓ニ詣デタ。スキーデンデハストツクホルム、デンマルクデハコオペハアゲン、何レニモ独特ナ面白味ヲ見出シタ。

一体欧羅巴ハ何処ニ行ツテモ面白イ。ドンナ少サナ都会でもソレゾレノ特色ヲ備ヘテ僕ヲ楽シマセテ呉レタ。

然シ世界ノ大都会ト云ハレル英京倫敦ダケハ実ニツマラナイ。ロンドント云ヘバ僕等ハ未ダ幼ナクテロンドンヲドンドン或ハヨンドント呼ンデ居タ四才カ五才ノ時分カラ覺エテ居タ天下ノ都ノ名ダ。ソレガ行ツテ見リヤア何アソダテムス河畔ノ船着場ニスギナイ。ロンドン位、非芸術的ナ都ハ欧州ニハナイ。ブリテイシミュジウムハ立派ダガ英国トハ何ノ関係モナイノダ。商人ヤ政治家ノ住ムニハロンドンハ恐ラクイイ場所ナノダローガ、己ハゴメンダネ。第一食ヒ物ノマツイコト、コイツハ欧州第一等ダ。生来食心坊ノ己ハロンドンデハ食事ノ度毎ニイヤーナ心持チニナツテ妙ニ氣ガ沈ンダ。ネエ君、刺身ヲ味ハフ時ニ、先ヅ刺身ヲ一切レ食フテ次ニシヨ―油ヲ飲ンデソレカラワサビヲ甜メル。コレジア全ク刺身ヲ味ハウンジヤナカロー。英吉利子ノ奴等ノヤリ方ハ万事之レナシタ。(…)

兎ニ角英国ノ食ヒ物ノマツイコトハ特筆ノカチガアル殊ニ巴里カラ倫敦ニ行クト全ルデ食ヘナイ。毎日々々ロスビフニソースアングレーズダ。

一体食物ノマツイ国ニイイ芸術ガ興ル筈ガナイ。仏蘭西ヤ壤地利ヤ露西亜ト英米ヲ較ベレバ直グニ氣ガツクコトダ。英国ダツテシエークスビヤノ居タ時分ハ確カニ料理モ旨カツタニチガヒナイ。今デモアイウルランドニ行ケバ多少旨イニチガヒナイト思フ。

何ト云ツテモ巴里ダネ。次ガウイーンダロー。此ノ二ツノ都程都ラシイシ^マ都ハ先ヅナイト云ツテヨカロー。ウイーンハ現今デハ衰ヘテハキルガ腐ツテモ鯛ダト云フトコロハ争ヘナイ。アル点デハ巴里ニモオサオサ劣ラヌ点ガアル。然シ何ト云ツテモ巴里ダ。

巴里ノ何処ガイト云フワケジヤナイガシミジミイ都ダト一日ニ少クモ三四回ハ思フ。

元来巴里ニハ外国人ニ見セル巴里ト巴里人ノ巴里トガアル。殊ニ後者ガステレ佳イ。

グランブウルバアルカラオペラ、ルウヴル、チュイルリイ、コンコルドカラシヤンゼリゼエヲ過ギエトワアルヲ抜ケテボードブウロニユアタリ迄ノ巴里ハ Paris monumental デ巴里ノ客間ダ。お客様ニ見テ頂クトコロナシタ。実ニ大キクテ美シイガ、然シ Paris monumental ハ Paris international ナノダ。巴里兎ノ巴里ハモツト汚ナラシク、ムサ苦シクテ、小便臭イガソコニ何トモ云ヘナイ味ガアルンダ。ソレハ右岸ナラバモンマルトル(イハユル淫売窟ノアルモンマルトルデハナイ)ノ丘ノ上、サクレクウルノ寺ノ下ノ一劃カ、左岸ナラバカルチエ・ラタンノ狭イ街々ダネ。ツマリ仏蘭西人ガ意識シテ後代ニ遺ソウトシテノコシタ巴里デハナク、幾世ノ風雨ニサラサレテ自ラ取りノコサレタ古イ巴里ノ町々ダ。往来ノ石ダタミガ凸凹シテ歩キニクク、犬ヤ猫ノ糞ガ多ク、辻便所トカマンベール(チイズノ一種デ女ノ淫部ノヤウナ臭ヒガスルノデ特ニ仏蘭西人ノ愛好スル)ノ臭ヒガ何処トナク漂ツテキル。カ、ル街々ヲ己ハ限りナク愛スル。

グランブウルバアルノ珈琲店デ往キ来ノ巴里女ノ風俗ヲボンヤリ眺メテキルノモ尽キナイ興味ガアルガ。裏通りノミスボラシイ珈琲店ニ己ハ好ンデハイルンダ。コントワアルノ上カラ肥ツタ五十恰好ノオカミサンガ唇ノ上ニウスイヒゲノ見ヘル口ヲシキリニ動カシテ二三間先キノテーブルニ飲ミカケノビールヲ置イタタキシノ運転手ヲシイ男ト話ヲシテキル。

己ハ無造作ニ空イタテールノ一ツヲ前ニシテ腰ヲオロス。「ギャルソン」ト呼ブト「Voilà」ト答ヘテ白イ前掛デ手ヲフキフキ出テ来ルノガ上衣ノ襟ノヘリニ従軍略綬章ヲ着ケタビツコノ男ダ!

Ah! C'est toi! Ça va? — リンコンニシテ "Qu'est-ce?" "Comme toujours?" ト云ツテ「」ノ頼ムモノヲチャヤント呑

込ンデピコンキユラソオ（アツペリチフノ一種）ヲ持ツテ来ル。見渡スト己ノスジ向フニハノンダケレノ古着屋ノオカミサンガ再タ来テキル。己ノ顔ヲ見テ一寸アイサツヲスル。右ノ横ニハコレモ *habitude*（常客）ノ小金ヲ持ツテラシイ大人シサウナ隠居ガ *le Petits-Parisiens* ヲ讀ミナガラチビリチビリトマンガランを飲ンデキル。目ノ前ノテーブルデハ若イ学生ト女学生ガ人目モハバカラズニ顔ト顔トヲ寄セテ楽シサウニ囁キ合ツテ居ルガ一分間ニ二三度ヅ、ハニツト笑ヒナガラ接吻ヲスル。然シ之ヲ珍ラシサウニ眺メル者ハ一人モ非ナイ。皆平気ナ顔ヲシテ *jeunesse est là* ナドト考ヘテ居ラシイ。

イツゾヤモンマルトルノ丘ノ上ニ散歩シタ折ニ己ハ不図嘗テ如是我聞ノ中ニ書イタラパナジルト云フ頗ル古風ナタベルヌヲ見出シテ今ダニ存在シテキルノカト独リデ悦ンダガソコニホームーノヤウナ *le Rele* 老人ガ今ナホ生存シテキルノヲ発見シテ実ニ喜シカツタ。

何デモ初夏ノ夕暮ダツタ。詩人 *Nouët* 君ト己トガ其ノ家ノテラツスニ腰ヲオロシテフト横ヲ見ルト白髯デ埋マツタ小柄ナ老人ガ入口ノ椅子ニモタレテ *pipe* ヲフカシテキル。夕日ニ照ラサレタ其ノ老人ノ横顔ガヒドク己ノ氣ニ入ツタ。己ハ思ハズ口ニ出シテ傍ノ *Nouët* 君ニ「*Frédé*」ト囁イタ。 *Nouët* 君モチラリト横顔ヲ見テ「*Tiens ! C'est lui !*」ト答ヘテ、*J'ai cru qu'il était mort !*ト附ケ加ヘタ。己モ *Frédé* ハモウトウニ死ンダコトトバカリ思ツテキタノニ未ダ生キテイルンダ

己達ノ占領シテキタ一間ニ一間半位ノウス汚イ木ノテーブルノ一角ニハ既ニ二人ノ *Pierruses*（インバイ、*Pierruses* ト *péripatéticiennes* トモ云フ）（逍遙派ト云フ意味ダ）一人ハ十八九、一人ハ二十五六ノ相当ニフメル奴ガ陣取ツテキタガ、トシマノ方ガ「*Ca va ? Frédé*」ト云ヒナガライタハルヤウニ老人ノ顔ヲ見タ。老人ハ相変ラズ空ヲナガメナガラ「*Comme ci, comm ça*」ト云ツタキリ、ヤツパリ *pipe* フカシテキタ。

二人ノ女ハヤガテ歌ヲ唄ヒ出シタ。スルト老人ハ思ヒ出シタヤウニ立チ上ツテ一寸二人ノ女ヲ顧ミテ「悪クナイゾ、古イ古イ歌ダ」コンナコトヲ言ヒナガラ暗イ家ノ中ニハイツテ行ツタ。己ハ彼ノ姿ガ更ラニ暗イ部屋ノ中ニ消エテ行クノヲ見送ツテキタ。彼ハ間モナクギタールヲ握ツテ再ビ出テ来ヤウトシタガ絃ガ一本切レテキタノニ氣ガ付イテ「Pas moyen」トカ何トカツプヤキナガラ再ビ暗イ部屋ニギターアルヲ捨テ、出テ来タ。女達ハ相変ラズ唄ヒツ、ケテキタガFrédéハ旧ノ椅子ニ再ビ腰ヲオロシタナリ、モウ女達ニハ見向キモセズニ彼ノ éternelle pipe ヲクハエナガラ空ヲ眺メ続ケテキタ。

スカンデナビヤノ旅ヲ了ヘテカラ己ハハンブルヒカラ伯林ニマワツテ其処デ山田夫婦、箕作夫婦、矢田部、石本ナドト一週間バカリ愉快ニ暮シテ丁度一月ブリデ八月十日ニ巴里ニ帰ヘツテ来タ。夏ノ巴里ハカラツボダ Opéra Comédie Française モ続イテ興業シテハキルガ面白イ外題モナイノデ、何モスルコトガナイ。(……)

Dijon, Belfort, Strasbourg, Nancy ヲ見物シテ廿八日ニ巴里ニ再タ帰ヘツテ来タ。Belfort デハエツク先生ノ嚴君ヲお訪ネシタ。非常ニ悦ンデ、僕ノ手ヲトツテ「Cher petit Emile ハ私ノ百才ノ祝ヒニハ帰ヘツテ来ル cher petit Emile」ト繰返ヘシテ居ラレタ。此ノ事ハ己カラ精シクエツク先生ニ書キ送ルツモリダガ、君カラモ先生ニ逢ツタラ「己ガ Belfort ニ先生ノ御尊父ヲ訪ネタト伝ヘテ呉レ給へ。Nancy カラ帰ヘテ来テカラ十日バカリ巴里デ休ンデ又、ローレーン、ブルタアニユノ旅ニ出テ四五日暮シタ。ソシテ十三日ニ巴里ニ帰ヘツテ来タ。

来週中ニハ更ラニ伊太利ノ旅行ニ出カケルツモリダ。

巴里デハ此頃岸田國士君トヨク逢ツテ話ヲシタリ飯ヲ食フ。岸田君ハ君ガ思ツテキル通りヤツパリイイ人ダツタ。逢ヘバ必ズ半日位ハナシ続ケル。岸田君ハ Vieux Colombier 座⁽⁹⁾ Comédie des Champs-Élysées, l'Odéon ナドト關係ヲツケテ真面目ニ劇ヲ研究シテキル。キツト今ニ立派ナ舞台カントクトシテ日本ノ芝居ノ為メニイイコトヲシテ

呉レルダロート思フ。

お互二見タリ聞イタリシタコトヲ話シ合フノガ非常ニ為メニナル 己ハ遠慮ナク議論ヲフキカケル 岸田君モ控エズニ思フ処ヲノベテ呉レル 啓発サレル処ガ少クナイ。

モウ日本ヲ出テカラ既ニ一年ト五ヶ月、マルセイユニ着テカラハ一年三ヶ月ニナル。仏蘭西文学ノ研究ニ関シテノ僕ノ智識ハ第一研究ヲシナイノダカラ進歩シタト云フ自信ガナイ。タダ仏蘭西ヲ見タ、聞イタ、香ヲカイダ、味ハツタ、触ハツタ、ト云フ点デハ相当ニマンゾクシタト思フ。

日本ニ帰ヘツテカラガ本当ノ研究ダ。

来年三月中旬ニハ君始メロザリヨノ連中ニ逢ヘルノダ。倫敦デスツカリ英国ニアイソヲツカシタ僕ハ英国ヨリモ更ラニ印象ノ悪イアメリカヲマワツテ帰朝スルノガツクツクイヤニナツタ。アメリカモ僕等ニハ関係ノナイ点デ偉イ国カモ知レナイ。然シソレガ偉ラケレバエライ程愈々イヤナダ。未ダ確定ハシカネテキルガ恐ラク僕ハ一月廿八マルセイユカラ伏見丸ニ乗ツテ帰ヘルコトニナルダロート思フ。

之レカラスル旅ノ先キガ伊太利ニ西班牙ダ。古イ国ダ。寧ロ亡ビテ行ク国ダ。サウ云フ国バカリガ己ヲ透迷スル。新興国ヲマワツテ帰朝スルノガイヤデ堪ラナイ。

連中ニヨロシク。特ニ西園寺、久能木ニ宜シク。久能木ノ奴ハチツトモ手紙ヲヨコサナイ。叱リ置クト伝ヘ給ヘ。

お宅ノ方々ニ呉々モ宜シク。 九月十五日 在巴里 Y.Tatsumo

(1) ロンドンのホテルで鷗外死去の電報を受けとり、ベルリンに向かった。この時のことは森茉莉「父の死」、「伯林の夏」(前掲『記憶の絵』)他に詳しい。(2) 辰野はコントル・スカルプをその代表的な場所として取り上げている(「パリの臭い」、『辰野

隆随想全集『第四巻』。下宿先や行きつけのカフェなども含め、辰野や山田らはこうしたよそ向きでないパリを好んで探訪した。(3) 書簡3(1)、27(3)を参照。登場人物の一人である祖父が、かつてパリで「放浪の詩人や画家と飲んだり歌ったり騒いだりした」場所として言及する。十九世紀末にユトリロやピカソらが通ったことで有名なモンマルトルのキャバレー。(4) 詩人のノエル・ヌエット(Noël Nouët, 1885～1969)。島崎藤村や西條八十にパリでフランス語を教えた。辰野や山田珠樹とも交流があり、大正十五年に静岡高校のフランス語教員として来日、一度帰国後に再び来日し、東大やアテネ・フランセ他で多くの学生を育てた。(5) フレデリック・ジェラルド(Frédéric Gérard, 1860～1938)は一九〇三年にラバン・アジールのオーナーになった。「髯のフレデ」と呼ばれた人物で自ら弾き語りもした。(6) 山田夫妻は山田珠樹と森茉莉、矢田部は前掲矢田部達郎、箕作夫婦は「玫瑰珠」同人の箕作新六・寿賀子夫妻。箕作新六(一八九三～一九五三)は学者一家箕作家の一人で、のちに理学博士。寿賀子は法学者穂積八束の三女。(7) 辰野はエックの紹介でその父を訪ねた。書簡29(16)を参照。(8) ひとあし早くパリに渡った岸田國士はチロル滞在を経て、この時期はビュー・コロンピエ座でジャック・コポー(Jacques Copeau, 1879～1949)に学んでいた。

書簡34(1301-34) 大正十一(一九二二)年十月二十三日付(二十三日消印・PARIS) Tokio (Japon) 日本東京
市外西巢鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 在巴里 辰野隆 絵葉書 ㄟん

矢田部に頼んで伯林からマネエの画集を帝大文学部の君宛に送って貰った 甚だ失礼だがもし届いたら駒場の家に送って置いて呉れないか。其后健康はどうだい。僕は相変わらず達者だ 皆様に宜しく。 十月廿三日 在巴里 辰野隆

【裏面】パリ・サン・メダール教会の写真

書簡35 (13-01-35) 大正十二(一九二二)年一月一日付(三日消印・PARIS) Tokyo (Japon) 日本東京西巢鴨向
原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 52 rue de la Clef. Paris T. Tatsumo 絵葉書 ㄨㄨ

賀正 愈々此の廿八日にマルセイユから伏見丸で帰朝する事にした。大いに嬉しいね。君が送ってくれた「シラノ」
「明星」何れも落手した。ありが度う。相変らず僕は芝居を見てゐる。何でも一年で二百回程行つた。恐らくレコ
オドだらう。

~~~~~

皆さんに宜しく。

~~~~~

仏文学の諸兄にも宜しく。 一月一日 在巴里 辰野隆

【裏面】パリ・コンコルド広場の写真

(1) 「シラノ・ド・ベルヂユラツク」(白水社)は十月刊行、「明星」大正十一年十一月号に鈴木はマラルメの「フォオヌの午後
相聞牧歌」を翻訳・発表している。

書簡36 (13-01-36) 大正十二(一九二二)年一月十六日付(十六日消印・PARIS) / 二月二十二日消印・TOKIO)
Tokio (Japon) 日本東京市外西巢鴨向原三五一九 Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 52 rue de la Clef. Paris
(V^e) France T. Tatsumo 封書 ㄨㄨ

返事 一、文学概論 これはとても僕の手におへない。五年六年の後なら兎に角今の僕には出来ない。お断りする。今の僕程度の浅い智識文学概論などは大それた話だ。

二、高踏派詩人 これも帰朝早々は用意が出来ない。自分では高踏派などと限らずに「十九世紀仏蘭西文学」[抹消]に現はれた精神」の思潮」とでも云ふ題で講じて見たい。而もそれは九月からでなければ出来ない。

そこで一学期丈は仏蘭西の近代の脚本をテキストにして講読したいと思ふ。そのつもりで既に「Jean Sarmant の Pêcheur d'Ombre」や François de Curel の Danse devant le miroir とを十五部づゝ買つて帰へるつもりだ。

三 演習 演習と云ふのは何んだかわからない。引受けてもよまなうだね。

右よろしく姉崎先生にお頼みして呉れ給へ。一月十六日 在巴里 辰野生 信太郎様

十九世紀仏蘭西文学の思潮（三「欄外で」「四」と直してある）——九月より

現代フランス戯曲 Texts : Jean Sarmant : Pêcheur d'Ombre François de Curel : Danse devant le miroir. (三)

(1) 渡辺二夫の回想によれば、辰野の「最初の講義は、名講義として有名な『十九世紀文芸思潮』でしたし、演習としては、ジャン・サルマンの『影を釣る人』や、ポール・ブウルジェの『弟子』や、ヴィリエ・ド・リラタンの『残酷物語』などを、テキストに使われ」（辰野隆先生のこと——一九四九年・一九六四年）、前掲『白日夢』たという。書簡にある「十九世紀仏蘭西文学の思潮」と「Jean Sarmant の Pêcheur d'Ombre」と対応する。(2) ジャン・サルマン (Jean Sarmant, 1897～1976) は俳優作家。フランソワ・ド・キュレル (François de Curel, 1854～1928) は劇作家で小説家。いずれも古典劇にとどまらず、現在活躍している劇作家の戯曲を読ませようという辰野の意図が窺える。(3) 姉崎は姉崎嘲風（一八七三～一九四九）。「教授のみなかつた仏文の代理世話人」（前掲鈴木「仏文事始」）だった。

書簡37 (13-01-37) 大正十二(一九二三)年一月二十三日付(二十三日受付印) Hongō futsubunka Daigaku
Tokyo Suzuki Lyon Tatsumo 電報 ペン

⁽¹⁾
Ichidekinu Tatsumo

(1) 詳細は不明だが、書簡36を踏まえると、重ねて「一、文学概論」を断った電報か。

書簡38 (13-01-38) 大正十二(一九二三)年一月一日付(一日消印・渋谷) 府下西巢鴨町向原三五一九番地 鈴木
木奥様 荏原郡上目黒駒場九二八 辰野久子・明・博子 葉書 墨筆

⁽¹⁾
明けましてお芽出度う存します 大正十二年 一月一日

(1) 辰野婦朝の年、辰野の家族から鈴木木奥の家族に送られている。葉書は三田平凡寺作。

書簡39 (13-01-39) 大正十二(一九二三)年九月十三日付(十五日消印・渋谷) 府下西巢鴨町向原三五一九 鈴木
信太郎様 上目黒駒場九二八 辰野隆 封書 ペン

前略 今日教授会で極めたコト、

一、研究室の書籍で火災を免れたものは航空バラックの中に在ルカラ、一マトメニシテ置くコト
一、サシアタリ授業ニ必要の書籍ヲ購入スルニ就テ、其ノリスト及ビ価格の概算ヲ提出スルコト
一、少クモ十月一杯ハ授業ガ出来ナイコト 以上。

若シ暇があつたら航空バラックに行ツテ研究室の書籍ヲ一マトメニシテ呉れタマヘ。（暇がナケレバ誰カ本郷近
クニ居ル仏文科の学生ニ頼デモイ、ト思フ。）僕モ其ノ中ニ行ツテ見ルツモリダ リストは僕モ作ツテ見ルカラ、
君モ作ツテ見テ呉れ給ヘ（期限ハ急ガナイガ来々週ノ月曜日迄トシテ置く） 隆 信太兄 十三日

（一）航空研究所は、東京市深川区越中島の東京工業試験所跡地に設置された。現在の先端研の前身。重要施設は焼失を免れたが
建物の多くが破損し、「バラック」を新設した（『東京帝国大学一覽從大正十二年至大正十三年』東京帝国大学、一九二四）。

書簡40（130110-01） 大正十二（一九二三）年十一月六日付（六日消印・渋谷） 府下西巢鴨向原三五一九 鈴木
信太郎様 上目黒駒場九二八 辰野隆 封書 ペン

【本文1】 実さんから此んな手紙（返事）が来た。御参考の為に目にかける 十一月六日 隆 信太様

* 著作権継承者不明のため省略。西園寺実の手紙が同封。

書簡41（130111） 大正十四（一九二五）年（推定）九月二日付 「宛先住所・氏名欠」 「差出住所・氏名欠」 封

書（封筒欠） ペン *松屋製二百字詰原稿用紙

冠省^① ビエール・シヤンピヨンを訪ねたり、シユアレスに会つたり、芝居を観たりして、何んて巴里はい、都だらうなんて悦に入りながら旨い料理を食つて旨い葡萄酒を呑んでゐるかと思ふと、一寸癪だなア！

日本では何も面白い事なし。山田と時々酒を飲んだり、ロザリオの会がせめてもの心やりだ。勉強はしてゐる。他にする事がないから。

二日月ばかり前から岸田君が、肺患で房州館山病院に入院してゐる。咯血数回、一時は生命も危かつた。此頃は稍々快いが、此の先どこ迄の命だか、一寸わからない。独りで金もなし、死と戦つてゐるのを見るに忍びなかつたから、せめて金の心配だけでも除いてやり度いと思つたから、信天翁の目玉の原稿料三百円丈け御見舞として送つたら、大へん悦んで呉れて、僕も嬉しかつた。

「シラノ」も出た。金は^②参百参拾円。九十日以内に貰ひに行くつもりだ。もし受取つたら、半額は君の留守宅に届けて置くから、そのつもりでゐて呉れ。

池の端のプラトニシヤンだつた珠樹が全く僕等ガツサンデイストの哲学の色彩を帯びて来た事は既に前便で報じたが、其後達郎も多少改宗の傾向がある。芽出度しとも芽出度し。これで尼子がコツシヨシ・ド・バルナツスになればパルフェーだね。久能木はいよく本郷に引越して家を建てた。と云ふよりも兄きの金で改築して建増をしたと云つた方がい、かも知れない。

実公には暫く会はないが、近日ロザリオ会を催すらしい。京阪地方の用事旅行から帰つて来て急に僕等聖人たちの顔が見たくなつたらしい。

與志雄さんは筆硯愈々すこやかだ。坦々たる大成、王達の道を悠々として進んで行く。

渡辺一夫兄は此夏休みも一週に一回づゝ、「エーヴ・フィユチュール」の質問に來た。相変らず勉強してゐる。廿五にもなつて女も知らずに學問にいそむと云ふ事は僕にはアンコンスブルだけれども、世の中にはさう云ふ青年も少しはゐるらしい。

僕のラ・ヴィ・デピキユールは相変らずだ。珠樹から知らせる僕の噂は悉く嘘だ。かけ引なしに、「大いに読み、少し買ふ」だ。

今年のコメデイフランセーズの古典劇的活動はすばらしいね。いゝ年に君は巴里に行つたよ。ガブリエル・ボアシイの劇評を尊敬を払ひながら読んでゐる。あの位古典劇を精しく読んでゐる男も珍らしいと思ふ。

此の手紙のつく頃は、秋のサロンが始まる。そろ／＼プリユニエーのかきが旨くなり、音楽のシーズンになるね。音楽はきいてゐるかい。

ルネ・ギルヤチボデーには会つたかい。チボデーのマラルメ論が若し手に入つたら送つて呉れないか。(ヴランに頼んでも、何処にもないらしい)。健康を祈る 隆 九月二日 信太郎兄

(1) ピエール・シャンピオン (Pierre Champion, 1880 ~ 1942) は、シャンピオン書店主オノレの息子、エドゥアールの兄で、フランス中世の研究家。鈴木は弟のエドゥアール・シャンピオンと親交を結び、文学者達に紹介された。鈴木の実際や演劇鑑賞の模様については、留学の過程を手紙・日記から再現した、『フランス文学者の誕生』(前掲)を参照。(2) 批評家のアンドレ・シユアレス (André Suarès, 1868 ~ 1948) とは、シャンピオン書店で出会い、紹介されて親交が始まったという(前掲『フランス文学者の誕生』)。(3) 「玫瑰珠」は大正十四年十月号を最後に自然消滅するが、同人の会合は続いた。鈴木の回想によれば、集

まりは月に一度日本橋横町の鳥料理屋末廣で行われ、二十数年間続いた。戦後も年に二、三回集まった（「ろざりよの仲間」、『全集』第五巻）。（4）パリで結核が再発した岸田は、帰国後大正十四年七月に房州館山で肺炎にかかり咯血、一時は危篤状態に至った。翌年に回復、旺盛な執筆活動が始まる。（5）当時、公務員の初任給が七十五円でその四ヶ月分（週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』上、朝日新聞社、一九八七）。（6）フランスの哲学者ピエール・ガッサンディ（Pierre Gassendi, 1592～1655）の思想を指す。エピクロス説を復活させた。ここでは享樂的な生活を暗示している。達郎は矢田部達郎、尼子は医師の尼子富士郎（一八九三～一九七二）。他、久能木慎治、西園寺実（実公）、豊島與志雄、渡辺一夫が言及されている。（7）パルナシアンは高踏派。（8）豊島與志雄は大正十年東京帝国大学法文学部講師をつとめて創作が一時少なくなるが、大正十二年以降、創作、評論、隨筆を旺盛に発表していた（関口安義『評伝豊島與志雄』未來社、一九八七）。（9）渡辺一夫はこの年の三月に仏文科を卒業し、東京高等学校でつとめていた。「エーヴ・フィユチュール」は一八八六年発表のリラダンのSF小説*L'Ève future*（『未來のイヴ』）で、渡辺は一九三七年に同書の翻訳を白水社から刊行する。（10）ガブリエル・ボアシー（Gabriel Boissy, 1879～1949）は劇評家、ジャーナリスト。日本ではあまり紹介されていないが、堀口大學が『檳榔樹』（青磁社、一九四三）で詩人としてその詩を翻訳している。（11）パリで毎秋開かれた美術公募展サロン・ドートンヌ（Le Salon d'Automne）を指す。鈴木は滞仏中の高島達四郎らと多くの美術館・展覧会を回った。（12）一八七二年に創業した、魚介料理で有名な料理店。（13）書簡29（17）を参照。辰野隆と交際があり、留学時に鈴木はルネ・ギルを訪ねたが会えないままに死去する（前掲『フランス文学者の誕生』）。（14）批評家アルベール・チボータ（Albert Thibaudet, 1874～1936）の最初のマラルメ論、『マラルメの詩』（*La Poésie de Stéphane Mallarmé*, Paris, NRF, 1912）を指す。最も早い時期にマラルメの詩を評価して論じた書物。（15）ジョゼフ・ヴァン（Joseph Vrin, 1884～1957）はパリの書店主。辰野や淀野隆三などと、この書店からフランス書を購入している。

書簡 42 (13-01-42) 大正十四 (一九二五) 年十月二十九日付 (三十日消印・TOKIO) chez M^{me} Leclerc 32 Avenue Charles-Floquet Paris (VII^e) (France) 〔国田〕里 Monsieur S.Suzuki Kami-Meguro Komaba 928 Tokio (Japon) Y.Tatsumo 封書 ㄷㄢ

○ルネ・ギルが死んだと聞いて一寸心がくらくなつた。晩年は淋しかつたんだからね。

○癪だね。いやに巴里をジゴロテー（此んな字はないかい？）しやがるな。

○珠樹のコツシヨンヌリイは近頃いよ／＼甚しい。

○矢田部、尼子、箕作までも此頃では珠樹流だ。其間に立つて己独り澄む。形而上的な孤独を感じるね。理由はない。金と思ふやうにならないからだ。

○岸田の病は其后稍よろしい。然し当分筆は執れないので友人が集まつて本を作つてその印税を病人に送る事にした。名は「岸田國士慰問集」。豊島君、山本有三氏の發起だ。君には事後承諾を求めるつもりで、ポオドレエル詩訳評を撰んで置いた。

○僕は相変らずだ。勉強したり怠けたりだ。

○矢田部は来年いよ／＼東京高等学校に来る事になつた。桜田も東京高等学校に多分行けるらしい。先日校長に会つて話をした。

○学校の方は面白くやつてゐる。来学年からポオドレエル研究を始める。十九世紀思潮が今年了るから。劇の方は一学期にポアルド・カロットとムツスユ・ヴェルネを済ませて、今はミザントロオプをやつてゐる。コントクリユエルも相変らずつゞけてゐる。

○コメデイ・フランセエズのプログラム売りは二人ともよく知つてゐる。頭の禿げた丈の高い方がメジヤソオル禿げない中肉の方がドオルブと云ふんだ。ヴエスチビユルの有髯のおばあさんはマダム・モロオと云ふんだ。

○コメデイ・フランセエズの前のメトロの穴の近所に年の頃五十位のプウルが居たつけ。会つたら宜しく云つて呉れ。

○オテル・ジヤンタルクに行く機会があつたら、主人夫婦に宜しく云つて呉れ給へ。

○先日「シラノ」の印税を半分、君の家に持つて行つた。御尊父が少々御不快のやうだつたが、大した事ではないらしい。

○石川君のところでは女の児が生れた。「郊外」と云ふ雑誌に石川が「親になる話」と云ふのを書いた。馬鹿くしく面白いものだ。

○日本の文壇益々沈滞。

○三十一日の天長節にはロザリヨ秋期大会をやる。会場不明午后五時迄に久能本事務所に集まれと命ぜられてゐる。十月廿九日夕 隆 信太さん。

(1) 矢田部達郎、尼子富士郎、箕作新六。(2) 辰野隆・山本有三・豊島與志雄・山田珠樹編『白葡萄』(春陽堂、一九二五)として刊行された。芥川龍之介『桃太郎』などの小説、井汲清治「プロムナード」のような岸田の戯曲への批評、菊池寛『真似』などの戯曲、内藤濯「仏蘭西の文芸味の為に」などの評論、鈴木信太郎「ポオドレエル」などの翻訳、辰野隆「ル・パントゥーン・デ・パントゥーン」などのエッセイと、岸田と親交のある作家やフランス文学者が稿を寄せている。(3) 旧制東京高等学校は大正十年設立の官立の七年制高校。文理両方に丙類(仏語専修)を置いた。卒業生は多く東京帝国大学に進学した。(4) 桜田佐

（一九〇一～一九六〇）。暁星中学・一高を経て大正十四年に東大仏文科を卒業した。フランス語廃止まで東京高校でつとめ、その間パリに留学。ドーデの翻訳で有名。（5）この時から本格化するボードレール研究が、昭和四年刊行の『ポオドレール研究序説——詩人の態度』（第一書房）に結実する。（6）それぞれ、ルナール『にんじん』（*Poil de carotte*）、ルナール『ムッシュユヴェルネ』（*Monsieur Vernet*）、モリエール『人間あざむき』（*Le Misanthrope*）、リラタン『残酷物語』（*Contes cruels*）を指す。（7）ヴェスナビュルは *vestibule*（ロビー）。（8）辰野があまりにコメディイ・フランセーズに通っていたために顔を見知り、このプウル（*poule*）の女性から「珈琲店に行かぬか」と誘われたという（「おもいで」、『辰野隆随想全集』第四巻）。（9）父政次郎は翌年六月に亡くなるが、既に予兆はそれ以前から現れていたと見られる。（10）後に石川欣一『むだ話』春陽堂、一九二六）に収録。長女出生の時のエピソードを描いた随筆。

書簡43（1301-13） 大正十四（一九二五）年十二月十二日（十二日消印・渋谷） 32 Avenue Charles-Floquet 32 Paris (VII^e) (France) 仏国田里 Monsieur S.Suzuki 928 Kami-Meguro Tokio Japon T.Tatsuno 封書 ××

相変わらず元気で何より芽出度い。

アノトオだのモラスだの、君はなかく名士に縁があるね。モオラスの金^ぶつんぼを今頃知るやうでは遅い。僕は三年前前に知つてゐた。とうに極右党代議士となる善なのをつんぼのためにならなかつたのは有名中の有名の話ぢやないか。

君の手紙は早速岸田君のところに送つて置いた。岸田君の病氣は其后や、い、方だ。同君の慰問集「白葡萄」が最近に出た。いづれ春陽堂から君に送る事だらう。

研究室の方は桜田が来てから大いに事務が進んで、書物を旺に買ひ込む。然し桜田も来年は多分東京高等学校に行けるらしいから、後継者を物色しなければならぬ。市原(2)にしゃうか、杉にしゃうかと考へてゐる。

卒業生の口は此年度は不景気で一ツもない。困まつた事だ。

小松清(3)は吉野作造氏の女と近々結婚するさうだ。

渡辺は相変らず勉強。伊吹(4)（旧森武彦）は京都へ行つてからうんともすんとも云つて来ない。此秋にいきなり、松茸を送つて来た。何とも云はずに突如としてまつだけを送つて貰つた僕は一寸強姦されたやうな、変な気持ちになつた。と云ふ話を桜田にしたら、先生、わからなかつたと見えて、わざ／＼静岡范岡田(5)を訪ねて行つて、『松だけを買ふと何故強姦になるんだい？』ときいたのださうだ。後で僕は一人で笑つたね。どうして解らないのだと桜田にきいたら、『いきなり松だけを送る』のいきなりと強姦との関係は想像出来ても、松茸(だむ)と強姦との因果が解らなかつたんです、と答へたには愈々ふきだしたね。近來の大傑作として君に伝える価値があると思ふ。

山田の道楽近來ます／＼油が乗つて来たやうだ。新築の家はなか／＼贅沢な家だ。冬は温かいが夏が暑さうな家だと云つたら、山田は夏は涼しいよと独りで極めてゐた。まだ初めての夏迄半年以上あるんだ。來年の夏にでもなつたら、俺のところで此位あつていんだから他の家は堪らないだらう／＼なんて云ふに極まつてゐる。

僕の品行は相変らず円満だ。Je balaye comme toujoursと云ふ一言につきる。邦訳すれば相変らずほうきさ。恋着せる婦人一匹もなし。悲しき極みなり。十二月十二日 隆公 信太さん

(1) ガブリエル・アノトー (Gabriel Hanotaux, 1853 ~ 1944) はフランスの外交官で歴史家。シャルル・モーラス (Charles Maurrus, 1868 ~ 1952) はフランスの詩人・思想家。アクション・フランセーズを主宰した。若い時に病気で聴覚をほぼ失った。(2)

東大仏文科卒の仏文学者、市原豊太（一九〇二～一九九〇）と杉捷夫（一九〇四～一九九〇）を指す。（3）小松清（一八九九～一九七五）は、フランス文学者・音楽評論家。東大仏文科卒業は大正十四年。吉野作造の三女光子と大正十五年十月に結婚した。（4）伊吹武彦（一九〇一～一九八二）は大正十四年東大仏文科卒業。同年三高の講師となった。（5）岡田は岡田弘（一九〇〇～一九九一）。大正十四年に東大仏文科を卒業、静岡高校につとめた。

書簡 44 (13-01-44) 大正十五（一九二六）年三月三日付（四日消印） chez M^{me} Leclerc 32 Avenue Charles-Floquet 32 Paris (VII^e) (France) 仏国 巴里 Monsieur S.Suzuki 928 Komaba Kami-Meguro Tokio Japon Y. Tatsumo 封書 ベン *封筒裏に「Boucher Beaureun 59 Boulevard Malesherbes」の宛先。

長い間手紙が来ないので病気でもやつてゐるのではないかと思つて内々心配してゐたところが、昨日西園寺から、君の手紙をまわして来た。（…）

矢田部は此の春から東京高等学校に来る。そして来年四月に九州大学の心理の助教授に任命される事に確定した。先づ（一）芽出度き事である。九州大学と云へば須川弥作君も九大仏文学の助教授に愈々任命される事に極まつた。須川君の跡には（大学の方）渡辺一夫君が来る事になるだらう。桜田君もいよいよ四月から東京高等学校に行く。

君の助教授問題に就て先頃服部さんに話したら、賛成して呉れた。帰朝迄か或は帰朝后間もなく、旨い具合になるらしい。早晩な事には極まつてゐるが、早い方がい、から、機を見つ、ぬかりなく運動するつもりだから安心しておいで。

君の帰朝后、また二人で「⁽⁶⁾フィガロの結婚」を訳し度いと思ふ。如何。だから何度も芝居を見て置いて呉れ。そ

れから最後の歌(シエリユバンの歌ではない)の譜を探して呉れ給へ。なか／＼難解だからよく脚本全体を読んで疑点を晴らして置いてくれ給へ。

それからもう一つ、若し機会があつたら、(強いてとは言はない)ルイ・ル・グラン中学のルネ・カナ先生に会つて、先生の博士論文 *Le sentiment de la Solitude morale au XIX^e siècle* を翻訳して、か悪いかと云ふ事を訊ねて呉れ給へ。(機会があつたらだよ。)

日本は之を要するにつまらない。「信天翁」の続篇みたいなものを近々出す。出たら送る。此頃仏蘭西の新聞雑誌の問題ではポエジイ・ピユウルの議論を興深く覚える。三月三日 今日之れ丈け 隆 信太殿

(1) 書簡42を参照。ただし、矢田部達郎の名前は既に大正十五年の『九州帝国大学一覽』に心理学講座の助教授として名が見え、『東京高等学校一覽』には名がない。(2) 須川弥作(一八九四〜一九三八)は大正九年東京帝国大学仏文科卒。陸軍大学教授、浦和高校教授を経て、九州帝国大学に着任。大正十五年『九州帝国大学一覽』には、仏文学助教授として須川の名が見える。須川の経歴は、「故須川弥作教授追悼号」(『文学研究』一九三八・一二)を参照。(3) 渡辺一夫は大正十五年に一年間、東京帝国大学文学部講師をつとめている。(4) 書簡42(4)を参照。(5) 中国哲学者服部宇之吉(一八六七〜一九三九)。服部は大正十五年、評議員で文学部長だった。実際に鈴木信太郎が助教授に就任するのは昭和六年のことである。(6) 結局この時は翻訳されていない。同作は辰野がバリで舞台を見て「何時かは訳出して見たいと思つた」(辰野隆「フィガロの結婚」、『河童随筆』酣灯社、一九四七)作だが、実際に辰野の手で翻訳されたのは一九五〇年のことである。(7) 『フィガロの結婚』(Le Mariage de Figaro)で、館を追われる小姓。モーツァルト版のケルビーノに当たる。「最後の歌」は伯爵夫妻を祝つて登場人物達が第五幕の末尾で歌う歌を指すか。(8) リセ・ルイ・ル・グラン (Lycée Louis-le-Grand) は、カルチエ・ラタンにある名門の後期中等教育機関。(9)

ルネ・カナ (René Canat 1873 ~) はフランスの文学史家。この論文は後に須川弥作が「文学研究」一九三七年五月号・八月号にその序文を訳出している。

書簡45 (13-01-145) 大正十五(一九二六)年(推定) 32 rue Charles-Floquet, Paris (VII^e) (France) Monsieur Shintaro Suzuki Séminaire de la Littérature Française de l'Université Impériale de Tokio T. Tatsuno 928 Komaba Kami-Meguro Tokio Japon

*省略。東大仏文科からの寄せ書きで、鈴木信太郎記念館に展示。

書簡46—1 (13-01-146-01) 昭和三(一九二八)年三月二日付(四月二日か)(四月二日消印・目黒/二日消印・東京中央) 市外西巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様 市外上目黒九二八 辰野隆 封書(速達) 墨筆

*封筒のみで本文なし、以下伊吹書簡を同封。

書簡46—2 (13-01-146-02) 昭和三(一九二八)年三月三十日付(三十一日消印・□□院) 東京市外上目黒九二八 辰野隆様 京都市田中大堰町二七 伊吹武彦 封書 ペン

御手紙戴き有難う存じました

色々面倒な事情で松ノ木町から衣棚へまた衣棚から最近表記のところへ越して参りました 引越しに生れて来たやうな気がいたします 越すと間もなく大分ひどい流風にやられて了ひました 先の御手紙の返事もいたさず転宅御通知もおろそかにしましてまことに済みません

まづこの一月お訪ねしたときの御礼から申上げなければなりません あの折の愉快は小生たるものへの緒きつてはじめてのこととも申すべく今以てかの思ひ出をなつかしみをる次第万々何卒御推察願ひあはせて御礼申しあげます

さて手とりばやく要件を申しあげます

「仏研」原稿の件。こゝしばらく怠けましたためと、も一つものゝ考へ方がちかごろ何だかぐらくして来てありますためとで、これならと思ふものが仲々出来上りません ひとつメ切迄につとめてみたいと思ひます もし出来ませぬ節はノート欄に 近頃読んだ雑書の批評紹介でも載せていたゞきたいと思つてをります 「新潮社」の件。いろいろ御配慮恐れいたします。仰せの如くコルボオの翻訳をやり了せたいと存じます。期日は三ヶ月の御猶予をお願いしたいのですが如何でせう。もし何でしたら二ヶ月でも何とか出来ないことはあるまいと思ふのでござい
すが、その他のものでは今すでに訳したもので

① Vidrac : Indigent

J.Romains : Amédée

がありますか如何でせうか。どちらも長いものではありませんが、コルボオと合はせれば二百五十枚にはなるかと思ひます。

お答へ申し上げるのが大層遅くなりましたして済みませんでした 右とりあへず申し上げます 勿々

卅日 武彦拝 辰野先生 玉案下

二白 ヴィルドラックのものはもうたび／＼訳されましたし、ロマンのものは読んでは一寸面白くないやうな気がします。ほかに適当な長さのものでいゝものはありますまいか 御意見を伺ふことが出来ましたら幸ひに存じます。

(1) 伊吹は十歳の時に京都に越してきて、大学時代以降は再び京都に住んだ。麩屋町松原を皮切りに、衣棚夷川、植物園付近、田中大堰町へと移ったという（伊吹武彦「京都つれづれ」、『ペレー横町』中外書房、一九五八）。(2) 辰野が伊吹に、東大仏文科の雑誌「仏蘭西文学研究」昭和三年六月号へ寄稿を請うたことへの返事と見られる。伊吹は創刊号以来この雑誌に論考を継続的に発表しているが、結局以後伊吹の論考は掲載されていない。(3) 新潮社刊行の『世界文学全集』第三十四巻の「仏蘭西近代戯曲集」を指すと思われる。刊行は昭和三年七月。伊吹はこの集にアンリ・ベック（Henry Becque, 1837～1899）の戯曲「郡鴉」（*Les Corbeaux*）を訳出した。(4) シャール・ヴィルドラック（Charles Vildrac, 1882～1971）は詩人・劇作家。「寂しう人々」（*Les Indigent*）を指すと思われる。また小説家・劇作家のジュール・ロマン（Jules Romains, 1885～1972）の「アメデと靴磨き台上の諸君」（*Amédée et les Messieurs en rang*）の名も見える。両者とも伊吹が注目し評論で言及する作家だが、これら二作は訳出されていない。

書簡47 (1301-47) 昭和四（一九二九）年九月十日付（十日消印・目黒） 市外西巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎様（親展） 市外上目黒九二八 辰野隆 封書 ペン *松屋製二百字詰原稿用紙

冠省。シムチエル・マランの訳を一読した。未だテキストと対照しては見ないが、訳文は極めて上出来。見事々々！
 附録として、ピロン⁽²⁾の猥詩に午睡の余波を散らすことが出来た。即ち返歌を我が畏敬する槍一筋のアチラに奉る。

蚤になりたやりユウスの蚤に／コンの山越え、襷の谷越え／草の茂みや葛^{かづ}のもつれ／押し分けく身はどろく
 の／濡れぬうち露をもいとへ／暗い岩窟^{いわぐ}の岩水に／溺れて倒れて夢うつ、／刺してぬらして行かせはしたが／
 末は厠の滝の瀬を／蛆の古巢にくだりゆく。／とはいふものの、／蚤になりたやりユウスの蚤に。 大和ピロン
 信太様

(1) ポール・ヴァレリー (Paul Valéry, 1871～1945) の「海辺の墓地」(Le Cimetière marin)。鈴木と辰野の共訳の形でギユスターヴ・カーン「ポオル・ヴァレリーの『海辺の墓地』」が「仏蘭西文学研究」(一九二九・一二)に載っている。ただし、同誌上では詩は原文で引かれており、この論文の翻訳に際して、検討のために鈴木が原詩の試訳を辰野に示したものと見られる。(2) 鈴木信太郎が辰野宛に、詩人・劇作家のアレクシー・ピロン (Alexis Piron, 1689～1773) の「のみ」(La Puce) を書き送ったところ、「返歌」として書いたもの。原詩「のみ」は、女性の陰部で溺れる蚤に「なりたや」と謳った猥詩。なお、鈴木はこの辰野の「返歌」をエッセイの中で一部引いて紹介している(前掲「フランス文学黄金伝説」、『全集』第五巻)。

書簡48 (1301-136) 昭和五(一九三〇)年三月二十五日付(消印なし) 「宛先住所欠」 鈴木信太郎様 東京府下

上目黒駒場九二八 辰野隆・保⁽¹⁾ 封書 墨筆

【印刷】 謹啓 先般亡母儀死去之際は早速御懇篤なる御弔問を忝ふし且御鄭重なる御供物を賜はり御厚志難有奉拝

謝候 本日慈徳院殿妙光日秀大姉五七日忌に際し聊謝意を表し度粗品呈上仕候間御受納被成下候得は本懐之至に奉
存候 先は御挨拶迄如斯御座候 敬具 昭和五年三月廿五日 辰野隆 辰野保 鈴木信太郎様

（1）辰野隆の弟の保（一八九一〜一九三八）。弁護士・政治家・陸上競技選手だった。

書簡49（1301-49） 昭和五（一九三〇）年三月十日付（十日消印・目黒） 市外西巢鴨向原三五一九 鈴木信太郎
様 市外上目黒九二八 辰野隆 葉書 ペン

冠省 来る十六日（日曜）午後五時半。甚だ失礼だが、粗餐を差上げ度いので、お差支なくば、小生宅までお出
で下さい。生前客を好んだ亡母の霊を慰めるには旧友と一夕を語り暮らすに如かずと思ふから。 三月十日 市外
上目黒九二八 辰野隆

書簡50—01（1301-50-01） 昭和八（一九三三）年一月二十八日付（二十八日消印・目黒／二十八日消印・豊島）
市内豊島区西巢鴨三五一九 鈴木信太郎様 目黒駒場九二八 辰野隆 封書（速達） ペン

* 以下の手紙を封入

書簡50—02（1301-50-02） 昭和八（一九三三）年一月「宛先住所欠」 大槻先生「差出住所欠」 ロザリヨ同人

封書 ペン

*省略。久能木慎治回復の礼状で、「玫瑰珠」同人が連名で差出人。

書簡51 (1301-51) 昭和八(一九三三)年八月二十一日付(二十二日消印・目黒) 相州葉山一色一七九九 鈴木信太郎様 東京目黒駒場九二八 辰野隆 封書 ペン *松屋製二百字詰原稿用紙

冠省 続稿を読んだ。若しあの詩が詩人の詩の悩みを指すものなら、何も僕には異論はない。議論の余地はないのだ。最初(二三年前)君はあの詩を、女を歌ったものでマラルメの詩の中で最もイキな詩だと断言し、且つ中島や佐藤にも然う説明してゐるので、僕は異議があつたのだ。君はその後説を変へたのかい。僕は今迄一度も君から、あの詩が詩人の詩のなやみを詠んだといふ説は承らなかつた。僕が詩の悩みだらう、と言つた時にも君は断乎として否定してではないか。マラルメの未発表の詩までわざ／＼タイプライタアに打つて呉れたぜ。何だか狐につままれたやうな気がするが、僕ははじめから、詩人のなやみ以外には、あの詩を解釈出来なかつたから、君の説に反対したのだぜ。

一体どうしたんだい。いつの間に変節したんだい。何んだか、変だよ。折角、異説を挟もうと思つて楽しみにしてゐたんだが、あれでは異説の樹てやうがない。御返事を待つてゐる。八月廿一日 隆 信太郎様

(1)「道化懲戒」論争につながる書簡。書簡以外にも電話でマラルメ「道化懲戒」(*Le Pître chatié*)の解釈について論議をし、

それを往復論争の形に仕立てたのが、『道化懲戒』論議』（『文芸評論』一九三三・二〇）及び「再び『道化懲戒』に就いて」（『文芸評論』一九三四・二〇）。誌上では、鈴木が、女性に走ることで詩人として消滅することを詠んだ詩と解釈するのに対し、辰野が詩作をめぐる悩みの詩と解釈するという立場で整理されている。だがこの書簡からは、両者の議論はいくつかのやりとりを経て最終的に対立的な立場に整理されたことがわかる。

書簡52（1301-52） 昭和八（一九三三）年八月二十四日付（二十五日消印・目黒） 相州葉山一色一九七七^マ 鈴木信太郎様 東京目黒駒場九二八 辰野隆 葉書 ペン

玉翰拝誦。草野中島両君はマラルメ論争に期待をもつてゐるらしいから中絶するのはいけないと思ふから、僕は書くつもりだ。君の手紙でやつぱり重大なる点に異議がある事が判つたから、大にやるつもりである。あの詩には絶対に女性の介在などはない。徹頭徹尾詩人の「素白の悩み」あるのみだ。その他、疑問の点不可解の点が二三あるので、質問に及ぶつもりである。加之訳語の不適當。及びごまかしもあるやうだ。だから充分書き得る。

（一）草野は白水社の草野貞之（一九〇〇～一九八六）、中島は佐藤正彰との共訳でヴァレリー『ヴァリエテ』（白水社、一九三二）を刊行した中島健蔵（一九〇三～一九七九）。論争が掲載された『文芸評論』は、東大仏文研究室が白水社の後ろ盾で出した研究雑誌。

書簡53（1301-53） 昭和十（一九三五）年七月三十日付（三十日消印・目黒） 相州葉山一色一七九九 鈴木信太

郎様 東京目黒駒場九二八 辰野隆 封書 ペン（封筒は墨筆）

病気はもう癒つた。昨日赤羽^①で三回まわつた。半月休んでもスコアは44 39だから悪くはない。

尼子先生は今日一ぱいは不可^{いかん}といつてみたが、昨廿八日から始めて、朝から赤羽に行つたら、尼子大将と会つて睨められて叱られた。どうも大学派の医者は厳格で怖いよ。

—。—。—。—。

尼子に前後五回診察して貰つたのだが、どのくらゐお礼をしていゝのだから、初めてなので、判らない。君やお母さんや弟さんの時にどの程度にしてゐるか、お知らせ願ひ度い。御返事を待つてゐる。藤沢に行つてゐるかね。

隆 三十日 信太様

（1）学士会ゴルフクラブの赤羽ゴルフコースのこと。辰野は昭和八年の六月中旬に山田珠樹に誘われ、鈴木信太郎と赤羽のコースを回つて以来、ゴルフに熱中したのだという（「ゴルフ逆縁」、『辰野隆随想全集』第五卷）。辰野は毎日のように赤羽に通い、鈴木信太郎も月に十日はコースに出た（鈴木信太郎「ゴルフ浪人手記」、『全集』第五卷）。（2）尼子富士郎。鈴木によれば、辰野と尼子の三人が特に好敵手だったという（前掲「ゴルフ浪人手記」）。

書簡54（1301-54） 昭和十（一九三五）年八月十日付（十一日消印・目黒） 相州葉山一色一七九九 鈴木信太郎
様 東京目黒駒場九二八 辰野隆 往復葉書返信 ペン

御手紙拝誦。服部さんには僕は負けるよ。服部さんが136で僕が143だから、こんどうんと頑張らなければとてもだめだ。昨日は38 43 38 41で上出来だった。明日この調子が出ればい、と思つてゐる。

――

久米とのプレイオフには必ず勝てるよ。火曜か水曜には藤沢まで出むいて是非コオチをしてやる。八月十日

東京目黒駒場九二八 辰野隆

一昨日尼子先生はまた48を出して悦んでゐた。

(1) 久米正雄（一八九一―一九五二）と思われる。前掲「ゴルフ浪人手記」に久米正雄の名が見える。

書簡55 (13-01-155) 昭和十三（一九三八）年五月六日付（六日消印・吉祥寺） 市内豊島区西巢鴨一―三五一九

鈴木信太郎様（親展）板橋石神井立野町九二二 辰野隆 封書 ペン

お約束の書面お送りする 何分宜しくお願ひする 五月六日 隆 信太郎様 侍史

* 以下の書面を封入

書簡56 (13-01-56)

* 鈴木信太郎様と表書きされた郵便はがき裏に、以下の受領証

御検印票受領証 昭和13年12月27日 シラノ・ド・ベルヂユラツク 並版 初版 式千五百部 右之通り正に受領仕り候也 東京市神田区小川町三丁目八番地 株式会社白水社 鈴木信太郎 辰野隆様

(1) 白水社から、昭和十三年十二月三十一日発行、昭和十四年一月発行で改版『シラノ・ド・ベルヂユラツク』が刊行されている。

書簡57 (1301-57) 昭和二十四(一九四九)年八月十一日(消印) 東京本郷東京大学文学部フランス文学研究室
鈴木信太郎様 「差出住所欠」 隆・高橋玄一郎・鷺沢二郎・松本正久 絵葉書 ペン

*省略。松本からの寄せ書き。

【解題】

辰野隆(一八八八〜一九六四)は、鈴木信太郎とともに東大仏文学科の一時代を築いたフランス文学者である。学位論文は『ボオドレエル研究序説』(第一書房、一九二九)で、同じく象徴主義のリラダン、マラルメから、モリエール等の古典劇、エドモン・ロスタンやポーマルシエら大衆的な演劇、写実主義やロマン主義の小説まで、ジャンルや時代を問わず幅広く論じた。その人柄や講義、著作を通して多くの後進に影響を与えた。

辰野の鈴木信太郎宛書簡からは、鈴木との親密な関係性が浮かび上がってくる。話題は病氣見舞いや娯楽等の日常のやりとりから留学時の近況報告、雑誌編集や学科の運営、研究や翻訳に関する事柄と多岐にわたる。以下、書

簡の概要とそこから読みとれることについて述べる。

大正六（一九一七）年から大正九（一九二〇）年にかけての初期の書簡は、同人雑誌「玫瑰珠」に関するものが多い。書簡1（大正六年九月十月（推定））は、辰野が「玫瑰珠」に最初に「信天翁の目玉」を寄稿した際の添え状と見られる。大正六年一月創刊の「玫瑰珠」は、毎月五〜十篇の論考を掲載したが、書簡1の直前の大正六年十月号の寄稿は三篇に減少した。編集に関与していた鈴木が辰野に寄稿を要請し、辰野がこれに応えたものである。「此んなものでも」とは「信天翁」の随筆風のスタイルを指し、「雑誌の続く限り」との言葉通り辰野は同誌への寄稿を終刊まで継続する。多くの仏文学徒をフランス文学の世界に誘った『信天翁の眼玉』誕生の瞬間を示す書簡である。

書簡2（大正六年十一月四日付）、書簡3（大正六年十一月六日付）、書簡4（大正七年六月五日付）は「玫瑰珠」原稿の進行度合いの報告や原稿の組み方の指示、辰野の原稿への自己評価や鈴木掲載作への批評で、この時期の両者が「玫瑰珠」刊行に力を傾注していた様が窺える。書簡2のような訳文をめぐる相談は他の書簡にも見られるが、こうした姿勢は後に両者の共訳の仕事へとつながっていく。

書簡9（大正八年八月十五日付）と書簡10（大正八年八月二十七日付）は『シラノ・ド・ベルジュラック』翻訳に関する書簡で、前者からは辰野が送付した訳稿を鈴木が「直ほ」して「印刷」に回すという作業の過程が、後者からは「第四幕目は3・4・5・6齣を僕が訳す」という訳出箇所分担のあり方がわかる。いずれも、両者の協同翻訳の具体的な作業過程を教える書簡である。

また書簡16（大正九年八月十四日付）、書簡17（大正九年八月十五日付）、書簡18（大正九年八月二十三日付）はリラダン関連で、まず辰野が作品の翻訳を進め（書簡16）、鈴木が論文の執筆を辰野に勧める一方で辰野が山田珠

樹の既訳の発表を促し（書簡17）、辰野が鈴木木の翻訳を単独の名義で発表するよう促している（書簡18）。「玫瑰珠」大正九年十一月号は、全篇がリラダン特集の観を呈するが、その編集の裏側を物語る書簡である。

このように、「玫瑰珠」関連の書簡は、後年よく知られるようになる辰野と鈴木木の翻訳・研究の仕事の最初の一步を踏み出す現場を示している。

次に、書簡21（大正十年七月十六日付）から書簡37（大正十二年一月二十三日付）まで、約一年半の辰野留学中の手紙が続く。この留学中の手紙は分量質ともに本書簡群の中心をなす。

書簡21はリヨン到着から山田珠樹と同行してのパリ散策までを綴ったもので、以下二ヶ月のヨーロッパ旅行をめぐる書簡群（書簡22～24）の先頭に立つ。書簡21には下旬のスイス行き予定、書簡22（大正十年九月四日付）にはドイツ南部の感想とベルギー行きの予定、書簡23（大正十年九月十三日付）にはベルギーで見た情景として、「クウワンの中庭にはもう落葉がそこそこに散らばって雨にぬれてゐる」様や、「それを窓から寂しさうに眺めてゐる尼さんの顔」が書きとめられている。

このように留学中の書簡は、下宿している都市の外への旅行の際に書かれたものが多い。書簡26（大正十年十一月十一日付）ではアヴィニヨン、ニーム、アルルにおける観光地巡りが描かれる。書簡30（大正十一年四月八日・十日付）では山田珠樹・石本巳四雄とのオランダ旅行の様子が戯画的に描かれ、同行者との和気藹々とした雰囲気を書きとめられている。書簡33（大正十一年九月十五日付）は留学二年目の夏のヨーロッパ旅行をめぐる書簡で、山田珠樹夫妻らと同行してイギリスに渡り、森鷗外の計に接して夫妻がドイツに別れて以降、ノルウェー、デンマーク、スウェーデンを巡った様子が、風景への感動を中心に書かれている。

これらの書簡群は、辰野の留学が土地そのものに目を向けるものだったことを物語る。辰野は画家の出生地で見

る絵の印象、各地で食べ比べたパンの味、ロンドンの食事のまずさ、著名作品の舞台となった街の雰囲気への感想を書きとめる。「ドンナ少サナ都会でもソレゾレノ特色ヲ備ヘテ僕ヲ楽シマセテ呉レタ」（書簡33）のであり、フランスにとどまらずヨーロッパという空間を体感しようとする辰野の姿勢を伝える。

リヨンやパリから出された手紙からは、辰野の庶民の生活への眼差しが浮かび上がる。辰野はリヨンでは大学での講義より頻繁に「シヤムピヨン夫人」の元に通い、書き取りや作文や音読の稽古をする（書簡25）。パリでは山田珠樹夫妻と同じ安下宿のオテル・ジャンヌダルクに滞在し（書簡27）、近くのカフェ・ラビラントに通って客達を眺めた。

辰野も文人達と付き合っており、書簡29（大正十一年三月二十九日付）では詩人ルネ・ギルや文学史家ストロフスキーとの、書簡33（大正十一年九月十五日付）では詩人ノエル・ヌエツトとの交際が書かれている。だがやはり生き生きと描かれているのは、リヨンで野菜やパンを抱えて歩く主婦の様子や雨の日の電車の運転手の姿であり（書簡25）、カフェ・ラビラントのギャルソンであるエドモンとの対話であり（書簡29）、ラパン・アジールの名物店主フレデ爺さんと娼婦達の掛け合い（書簡33）である。辰野の留学はまさに「タダ仏蘭西ヲ見タ、聞イタ、香ヲカイダ、味ハツタ、触ハツタ」（書簡33）ものであった。

こうしたフランスでの人との関わりの中で印象的なのは、書簡33で書かれたベルフォール行きのエピソードである。辰野はエミール・エックの故郷に赴き、その父と会っている。辰野は父の「Cher petit Emile、ハ私ノ百才ノ祝ヒニハ帰ヘツテ来ル cher petit Emile」という言葉を鈴木に書き送る。修道士として帰らぬ覚悟で渡航した当人の代わりに辰野は父と会い、エックの姿をその父に伝えたわけである。エックの退官の際に「涙ヲ禁ジエナカツタ」（書簡24）鈴木は、この父の言葉を辰野とともに受け止めたことだろう。

パリやリヨンでの生活の中では、やはり観劇が目立つ。到着早々パリの劇場をはしごし（書簡21）、モリエール三百年祭で企画されたモリエール劇を次々と見る（書簡29）。古典劇にとどまらず、グラン・ギニョール座の恐怖芝居、ベルリンでストリンドベリ（書簡24）、そしてリヨンで人形芝居を見ている（書簡25）。人々の中で生きていく演劇を見ようという意図が透かし見える。

辰野の帰国と入れ替わりで出国した鈴木信太郎の留学の様子も書簡から読みとれる（書簡41～44）。鈴木の場合にはシャンピヨン書店を中心に、文化人・文学者との交流を深めた（書簡41）。観劇や美術展にも盛んに出かけていたことが垣間見える。

書簡には、東大仏文科の人事や運営・教育に関するものもある。

たとえば書簡5（大正七年十月十二日付）はエックとの会食、書簡8（大正八年八月九日付）はりヨン大学からの来客の接待に関する書簡である。辰野は大正七（一九一八）年九月に仏文学科の副手に就任するが、副手時代に海外の要人接待をしている。また書簡から、仏文科卒業生と研究室のつながりもわかる。書簡12（大正八年十月十八日付）は後藤末雄や太宰施門ら仏文科卒業生との会合に関わるものである。なお、仏文科卒業生のことは書簡29（大正十一年三月二十九日付）でも言及されている。暁星への講師派遣など、仏文学研究室が仲介することもあったのである。

書簡20（大正十年二月十一日付）は、辰野の助教授昇任に関するものである。鈴木は大正十（一九二一）年四月から豊島與志雄・アンリ・アンベルクロードとともに東大で講師を務めている。辰野は三月に助教授に就任して五月には渡仏するので、二月の時点で翌年の体制についてある程度相談が進められていたことが窺える。

書簡36（大正十二年一月十六日付）は帰国後の辰野の担当科目に関する相談の手紙である。当初は「文学概論」

という概論科目が予定されていたが、辰野がそれを断り、名講義として知られる「十九世紀仏蘭西文学の思潮」が決められる過程が見てとれる。また、古典劇ではなく現在演じられている現役の劇作家の戯曲をテキストに選んだことも見てとれる。

書簡39（大正十二年九月十三日付）は関東大震災後の処置に関わる書簡で、震災発生（九月一日）から二週間の九月十三日に教授会を開いて対応を協議したこと、研究室の書籍のうち被災しなかったものを越中島の航空研究所の仮設バラックに避難させていたこと、授業に必要な書籍を優先して購入する方針をとったこと、十月まで授業ができない見通しだったことがわかる。なお、震災後については、辰野書簡に続いて翻刻したJ.Vigroux書簡からもわかる。

書簡42（大正十四年十月二十九日付）と書簡43（大正十四年十二月十二日付）は留学先の鈴木宛に送られたものだが、辰野が卒業生や知り合いの進路について知らせている。仏文学研究室で副手をつとめていた桜田佐は東京高等学校に行くとの記述がある。「校長」は湯原元一で、辰野が「校長に会って話をした」旨が記されている。自由主義教育を掲げた東京高等学校は文理共に丙類（フランス語）を置いた点に特色があり、新進気鋭の教師を集めていた。そうした方針下で、仏文学科から卒業生を紹介する流れが作られたものと見られる。書簡44（大正十五年三月三日付）は卒業生の須川弥作が九州大学の助教授に内定したこと、また渡辺一夫が翌年に東京帝国大学の講師に予定されている旨が記されている。

フランス文学研究の発信に関わる書簡もある。

書簡46―2（昭和三年三月三十日付）は京都の伊吹武彦から辰野に送られた書簡で、辰野が東大仏文学科の研究雑誌「仏蘭西文学研究」に伊吹の寄稿を求めたこと、また新潮社『世界文学全集』第三十四巻の「仏蘭西近代戯曲集」

に収める翻訳の原稿を求めていることがわかる。この本は、辰野・鈴木訳／エドモン・ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』、小川泰一訳／フランソワ・ド・キユレル『聖女の裏面』、小川泰一訳／ロマン・ロラン『群狼』、市原豊太訳／ポール・ジェルaldeイ『ロベエルとマリアンヌ』、伊吹武彦訳／アンリ・ベック『群鴉』、渡辺一夫訳／アルフレッド・ド・ミュッセ『ロレンザッチョ』を収める。辰野・鈴木が監修の形で卒業生達に声をかけ、各自の手にある原稿を中心に一冊を仕立てた過程が読みとれる。

書簡47（昭和四年九月十日付）は辰野と鈴木が共訳したギュスターヴ・カーンのヴァレリー論の準備に関わる書簡である。論文中で触れられているヴァレリー「海辺の墓地」をまず鈴木が翻訳して辰野に送り、そのうえで両者がこの評論を訳したのである。

書簡51（昭和八年八月二十一日付）と書簡52（昭和八年八月二十四日付）は辰野隆と鈴木信太郎の間で闘わされた「道化懲戒」論争に関する手紙である。仏文科発行の季刊誌「文芸評論」に載ったものだが、書簡形式のその論争が、実際の辰野と鈴木の手紙のやりとりに基づき、それを論争の形に整理したものであるという事情がわかる。実際の論争では、辰野と鈴木の立場は明確に二分されているが、書簡51では鈴木が自身の解釈を取り下げようとして辰野にたしなめられている。また書簡52でも、鈴木が論争を中断しようとしたところ、辰野が粘って論争を継続したことがわかる。

以上、書簡は両者が学者としての主体を形成している時期のものであり、同時に東大仏文学科の体制ができあがっていく時期のものである。辰野と鈴木は互いに今読んでいる書物や取り組んでいる翻訳について語り合い、小説やエッセイ、訳文を批評し合い、書物の刊行や人事等について相談し、フランスでの見聞を生き生きと相手に伝えた。留学中の書簡は、後に随筆に整理して書かれる以前の、出会ったままの新鮮な驚きを伝えている。東大仏文学科の

草創期を手を携えて支えた二人の仏文学者の若き日々のやりとりが、さながらに立ち上がってくる書簡群である。
なお、書簡40・45・50・52・57は、許諾の関係で文字起こしをしなかった。（戸塚）

ニ、ジヨゼフ・ヴィグルス書簡

書簡1（16-24） 大正十二（一九二三）年十月三十日付（三十日消印・九段） 小石川区向原西巢鴨村三五一九
Monsieur Sh. Suzuki 鈴木信太郎様 東京市九段坂上 暁星中学校 J.Vigroux 葉書 へん

⁽²⁾
le 30 octobre 1923 Cher M.Suzuki.

J'espère que vous êtes toujours en bonne santé et que les conséquences du tremblement de terre ne vous ont pas trop atteint. Quand pensez-vous reprendre les cours de français à l'Université, si du moins il est possible de les reprendre comme avant ? Il me semble qu'on ne pouvait guère commencer avant le 7 novembre ; on risquerait de n'avoir pas d'élèves. Quien pensez-vous ? Et quel jour voulez-vous choisir ? Ce jour-là sera aussi le mien. Vous pourrez donc avertir le "Jimushō" en votre nom et en mon nom, lui demandant de fixer les salles de classe où nous enseignerons.

En attendant le plaisir de vous lire, je vous prie de recevoir l'expression de mes meilleurs sentiments. J. Vigroux

(1) 鈴木信太郎記念館の館内整理リストでは差出人「暁星中学校」。フランス語講師で暁星の教師ジョゼフ・ヴィグルス (Joseph Vigroux) が、鈴木に宛てて震災後の授業再開について問い合わせた手紙。辰野書簡の書簡24(5)を参照。(2) 以下大意。一九二三年十月三十日 鈴木様、お変わりないことと存じます。また震災の影響をあまり受けていないとよいのですが。大学でのフランス語の授業を以前のように再開できるとしたら、あなたはいつ再開されますか。私自身は、十一月七日以前には始められないように思えます。始めたとしても生徒が来ないのではないのでしょうか。どう思われますか?そして、あなたは何日に始めますか?私もその日に合わせたいと思います。事務所に連絡して、あなたと私の名前で、教室の配当をお願いしてもらえますか?ご連絡お待ち申し上げます。敬具 J・ヴィグルス

【解題】

差出人のジョゼフ・ヴィグルス (Joseph Vigroux, 1887 ~ 1968) は、大正十(一九二二)年のエミール・エック退官の後、大正十一(一九二二)年から十五(一九二六)年まで東京帝国大学仏蘭西文学科の講師をつとめた人物。マリア会の修道士で一八八七年九月十四日にフランス南部アヴェイロン地方のソラージュで生まれ(以下、ヴィグルスの経歴は木寅義信氏提供のシャミナード修道院蔵マリア会修道士名簿に拠る。ただし、一高・東大での教歴は『第一高等学校一覽』及び『東京帝国大学一覽』に拠った)、一九〇七年二十歳の時にカンヌで教員としてつとめたあと、一九一一年、二十四歳の時に日本に渡り、暁星中学でフランス語を教えた。第一次大戦中は他の修道士と同様に出征した。大正十一年からアンリ・アンベルクロードの後を引き継いで一高でフランス語を教えるとともに、東京帝国大学でもフランス語講師をつとめた。講師を引いた後は暁星の副校長や横浜のセント・ジョゼフ学院

の教員をつとめ、一九四七年に帰国、フィアックで英語教員としてつとめた後、八十一歳で同地にて亡くなっている。書簡は関東大震災の発生した九月一日から二ヶ月後の十月三十日、暁星中学校から鈴木信太郎宛に出されている。なお、辰野書簡39（大正十二年九月十三日付）でも十月一杯は授業が難しいと記されているが、この書簡はその後の経過を知らせる。この時、震災後の対応に寄附金集めなど奮闘していたのが東大を退官したエミール・エックであった（前掲『暁星百年史』）。

ヴィグルスは書簡で鈴木にフランス語の授業を何日に始めるか尋ね、自分も合わせて同じ日に始めるから教室の配当を依頼したいと記している。十一月七日以前には授業再開は難しいという具体的な日にちが書かれている点が注目される。大震災への教員個人の対応を示す意味で貴重な資料である。（戸塚）

（1）発音は「ヴィグルー」が実際に近いとも思われるが、表記は東京帝国大学一覽及び辰野書簡に拠った。

三、三好達治書簡

書簡1（032903） 昭和七（一九三二）年四月二日付（二日消印） 市外西巢鴨町大字巢鴨三五一九 鈴木信太郎様
「発信住所欠」 河上徹太郎・佐藤正彰・中島健蔵 封書 謄写版にペン書入れ

*省略。三好の入院に際して募った寄付の、昭和七年三月分会計報告。桑原武夫『詩人の手紙 三好達治の友情』（筑摩書房、昭和四〇）にほぼ同文の書簡が載る。

書簡2 (03-02-09) 昭和八(一九三三)年八月十三日付(十三日消印・長野湯田中) 東京都豊島区巢鴨一丁目

三五一九 鈴木信太郎先生 長野県下高井郡平穩村 発咄天狗ノ湯ニテ 三好達治 葉書 ペン

暑中御見舞申あげます、近ごろ^①コリント・ゲームといふ婦女子向きの遊戯が流行し、こんな山間でもそれがはやつてみます、先生はこんな遊戯がお好きだから、きつと今ごろやつてみられることだらうと想像しました。

(1) 三好達治の長野滞在は昭和八年七月末から。以下、書簡4までの手紙は当時の三好の足取りを知る手がかりでもある。(2) コリント・ゲームは戦前に大流行した遊戯、パチンコの源流の一とされる。

書簡3 (03-02-04) 昭和九(一九三四)年一月一日付(三日消印) 市内豊島区巢鴨一丁目三五一九 鈴木信太郎

先生 「発信住所欠」 三好達治 封書 墨筆

謹賀新年

昭和九年元旦

三好達治

鈴木信太郎先生

書簡4 (03-02-02) 昭和九(一九三四)年一月二十三日付(二十三日消印・長野湯田中) 東京都豊島区巢鴨一丁目

目三五一九 鈴木信太郎先生 長野県下高井郡上林 せきやニテ 三好達治 封書 ペン *江川書房二百字詰原稿用紙

拜啓 先日來多忙にかまけてみましたので、

先生がお風邪でふせてゐらつしやる由承りながら、たうとうそのお見舞にも上りませんでした、廿日辰野先生より、その後御快方の由承知いたし蔭ながら喜んでをりました、小生は湯治と共に、当分この田舎で翻訳その他の仕事をする積りでゐます、さしせまつた分を片づけましたら、仰せの如くほつぽつ⁽¹⁾「巴里の憂鬱」の改訳を初めます、その節はいろいろ御教示にあづかりたく、予じめお願ひ申あげます、

江川君⁽²⁾の方へは当地からも、入院はするやう極力薦めますから、種々御高配下さる様お願ひ申します、

なほまた、三四月ごろから、前に⁽³⁾「四季」といふ季刊雑誌を出してゐた日下部君の手から、堀辰雄君と丸山薫君といふ小生友人と、そして小生もそれに加つて、やはり⁽³⁾「四季」といふ名の、今度は月刊の詩の雑誌を出さうと考へてゐます、資力にも限りがあり、小生等も甚だ微力なので、到底先生のお眼がねに叶ふやうなもの出来上りませんが、まづ小手調べのやうなところから、僕たちの力になつた仕事を続けてゆかうと存じます、その節は種々御示教を賜りたく折入つてお願申しておきます、草々敬白

三好達治

鈴木信太郎先生 虎皮下

(1) ボードレール著、三好訳『巴里の憂鬱』は昭和四年厚生閣刊。同五年改造文庫『巴里の憂鬱』として刊行、のち改造文庫版

は昭和十五年、訳を大きく修訂した『新訂巴里の憂鬱』として刊行。(2)「江川」は江川書房を営んだ江川正之。もと白水社社員。「純粹造本」を標榜し、堀辰雄『聖家族』(昭和七)などを刊行。マラルメ著、鈴木信太郎訳『半獣神の午後』(昭和八)を最後に江川書房の活動を終える。長く腸チフスに悩まされ、「書物」昭和九年四月号には「この二年、臥床二ヶ月」、「鈴木信太郎先生が注いで下さるさんさんたる御厚情に身を委ねて、いま、健康を取り戻すべく病院の一室に横はつてゐる次第である」との一文を寄稿。(3)季刊「四季」は昭和八年五月創刊、二号で休刊。昭和九年十月に月刊「四季」創刊号発行。(4)「日下部君」は日下部雄一。もと江川書房社員、四季社を興した。

書簡5 (03/02/06) 昭和二十一(一九四六)年五月(推定⁽¹⁾、二十二日消印) 東京都豊島区西巣鴨一丁目三五一九
鈴木信太郎先生 京都市伏見区両替町 淀野隆三 三好達治 葉書 ペン

久しぶりに田舎から出てきて淀野邸に滞在、先生の御近況伝聞仕候 東上の意もあれとも昨今の旅行難にて閉口
何事も意にまかせぬことにて面白からず候 東京もほゞ同じことかと拝察御加養と申すも憚られ候へ共御大切を祈
上候 ㊦

*以下、淀野隆三のあいさつが続くが、許諾の関係で省略。

(1) 年次推定は昭和二十一年五月十六日大武正人宛書簡(『三好達治全集』十二巻、書簡番号二五七)に「二三日前京都から帰りました」とあり、同年五月十二日淀野隆三宛書簡(同書簡番号四〇)に「いづれ近日拝眉の機をうべく候」とあることによる。

書簡 6 (03-09-10) 昭和二十二(一九四七)年八月(推定) 「宛先住所欠」 鈴木信太郎先生 三好達治 封書「封筒欠」 墨筆

暑中御見舞申上候 昨日御^②高訳御署名本辺土までわざわざ御恵投賜りまことにありがたく厚くおん礼申上候 貴訳は諸雜誌上にて時々拝見卒読致居候もとりあつめて読ませていただくのは尚々結構にて暑中の一楽と心得居候唯今子供^③ども休暇にて身辺にうるさく雑事にかまけ申居候も一両日中にどこかへ追やるつもりにて候 ヴェルレーヌにも久しぶりにて再会ゆるゆる味読致度存居候 いづれ卑見はどこかにしたため度 その節は御高らん願上候 東京は諸事御不自由の時分と察上候暑中ことにおひとひ下され度候 田舎暮しはのんきはのんきなれともこれも退屈と不愉快のこと多くいづこにあるも味きなきことにて候 十月末頃また一度上京致度存候学校の方へも一度お訪ね致しませう 辰野先生にも一度面晤釈明を致さねばならぬ要あり久しぶりにて拝芝を得たく存居候 今日とはとりいそぎ御礼のみ草々不卷

八月七日 三好達治拝

鈴木信太郎先生 侍曹

(1) この時期、三好は福井に住んだ。(2) 鈴木の「御高訳御署名本」はヴェルレーヌ著、鈴木信太郎訳『ヴェルレーヌ詩集』(創元社選書、昭和二二年七月二五日刊)と考えられる。三好の卒業論文は「ポール・ヴェルレーヌの「智慧」に就て」。(3) 三好の長男達夫は昭和九年、長女松子は昭和十二年生。

書簡7 (03-02-01) 昭和二十四(一九四九)年八月二十七日付(二十七日消印/二十七日消印・豊島) 都内豊島区西巢鴨一丁目三五一九 鈴木信太郎先生 都内世田谷区代田一ノ三二三 岩沢方^① 三好達治 封書 墨筆

先日は夜分お邪魔を致し粗忽に忘れ物などして申わけありませんでした 早速御丁重に電報を賜り御送付を忝けなくしお手数をかけて全く申わけなく恐縮に存じてみます小包唯今落掌とり急ぎおん礼のみ いづれ近日改めて拝趨致し度存じてゐます 草々不一

八月廿六日 三好達治拜

鈴木信太郎先生 侍曹

(1) 三好は昭和二十四年二月、宇野千代の世話で岩沢方に移り住む。岩沢千恵子「三好先生のこと」〔新潮〕昭和三九(一)。

書簡8 (03-02-02) 昭和二十五(一九五〇)年(推定、三日消印・世田谷) 都内豊島区西巢鴨一ノ三三一九 鈴木信太郎先生 代田一ノ三二三 三好達治 葉書 墨筆

素白先生の印譜には驚きました^① かねがねお評さは伝聞してゐましたが内心高をくくつてゐたのを申わけなく存じます 近日御わび方々拝趨万々

(1) 鈴木信太郎『素白衛士印譜』(学海社)は昭和二十五年一月刊、限定八十五部。

書簡 9 (030207) 昭和二十五（一九五〇）年九月十一日（推定、十一日消印） 都内豊島区西巢鴨一丁目

三五一九 鈴木信太郎先生 世田谷区代田一ノ三三三 岩沢方 三好達治 葉書 ペン

この間から御返事かたがた一度参上しようと思ひながらそのひまがありません、あまりおそくなるので御返事申し上げます、実はそんな詩を訳した記憶がどうもはつきり致しません、ノアイユは「^①クル、インノンブラブル」
—（冠詞は忘れました）を昔読んだ記憶がありますからもしかするとそのうちからでも撰んだのでさうか、いづれにするも悪訳拙訳にきまつてゐますから、どうぞ先生の御本には省いて貰ひたくお願ひします。こんなお返事にて失礼ですが不悪

（一） Anna de Noailles, *Le Cœur inoubliable*, 1901. を三好が『心』と訳した詩は、昭和八年十月刊『仏蘭西現代詩選』（金星堂）に収録。（二）鈴木は日夏歌之介ほかと昭和二十六年に『名詩名訳』（創元社）を刊行しており、この題は本書簡中の「悪訳拙訳」の文言とも響きあう。同書に三好のノアイユ訳を入集しようと打診したか。同書にはポオドレエル『二重の部屋』『時計』の三好訳が入集。

書簡 10 (030205) 年次未詳（二十七日消印） 都内豊島区西巢鴨一ノ三三一九 鈴木信太郎先生 世田谷代田一
の三三三 岩沢方 三好達治 葉書 墨筆

冠省^①宇治の方より粗茶松の緑一かんお届け致させました 御笑納下さらば幸甚

(1) 『三好達治全集』十二巻にて「昭和二十三年十二月二十七日」とされる熊坂さよ子宛書簡(書簡番号二七六)に「京都宇治より粗品少々送らせました御笑納下されば幸甚です」とほぼ同内容の書簡があり本書簡消印日付「27」とも照応するが、本書簡の差出人住所「世田谷代田一の三二三岩沢方」は昭和二十四年二月以降の住所。

【解題】

「鈴木信太郎先生のマラルメ、辰野先生のボードレール、前者は殊に難解で私には領得できかねたが、いづれも生涯の賜ものであつた」(三好達治「辰野隆先生」、「毎日新聞」昭和三九・三・二)。三好達治(一九〇〇～一九六四)がフランス詩、そして翻訳という営為と本格的に向きあうようになるのは大正十四年四月、東京帝国大学文学部仏文科に入学してからのことである。詩人としての三好を育てたのも仏文科の同級生、そして鈴木信太郎や辰野隆の講義であり、「驢馬」誌上ですでに作品を読んでいた堀辰雄(国文科)と相知つたのも鈴木信太郎の教室だったという。「堀の答案が抜群だつたさうで、私たち仏文の同期生は鈴木さんから何だか皮肉めいたことをいはれて迷惑を蒙つた」(三好「堀辰雄君のこと」、「新潮」昭和二八・七)。

今回翻刻紹介した鈴木信太郎宛書簡群は、鈴木、淀野隆三をはじめとする仏文科の同窓生、堀辰雄、丸山薫、江川書房の江川正之、四季社の日下部雄一といった人々の交流が三好の詩業と密接に結びついていたさまを示すものである。特に昭和九年一月二十三日、すでに廃刊となっていた季刊「四季」を月刊誌として再興する経緯を述べた書簡4の文言には、淀野をのぞく右のメンバーが勢ぞろいし、三好の名訳『巴里の憂鬱』改訳版が鈴木「仰せ」に従うものであることが明かされている。「四季」再刊に際し「その節は種々御示教を賜りたく折入つてお願申し

ておきます」という三好の文言には、丸山とともに「詩・現実」（昭和五・六）を発行した時代とは異なり、新しい詩の運動にあたって訳詩を原動力とし、「驢馬」系統の詩人たちと合流してゆく決意がうかがえるだろう。実作と学問とが深く連関していた東京帝大仏文科の雰囲気は書簡5（昭和二十一年五月（推定））の淀野隆三の言葉、鈴木信太郎や辰野隆が淀野の参画した高桐書院の重要な書き手となっている一節にも明らかである。一方で鈴木宛書簡に小林秀雄グループの人々の名前があまり見えない点は——手紙の分量の問題はあるとはいえ——、仏文科の同級生であり「作品」（昭和五・四）同人だった小林との関係を考える上で興味深い。

コリント・ゲームの流行に際して「きつと今ごろやつてゐられることだらうと想像しました」と鈴木に書き送る三好の親しみにみちた感覚は、おそらく師である鈴木信太郎にとっても同じだった。そしておそらく鈴木にとっての三好は、愛すべき後進であるだけでなく、敬意をもって接すべき存在だった。三好の入院に際し寄付を行い、忘れ物したら丁寧に電報で知らせ（書簡7）、署名本や限定本を送り（書簡6・書簡8）、そしてフランス語訳詩集に三好の詩を掲載しようとする（書簡9）。書簡9でノアイユ夫人の訳詩掲載をことわった文言は、謙遜の辞だったか、どうか。せつかくなら『巴里の憂鬱』から選んでほしい、というひそかなメッセージが発せられ、みごとに師に伝わったのだと思いたい。本書簡群は三好と鈴木の関係の軸として、昭和前期における詩と学問との交響について考える際の貴重な手がかりである。（多田）

四、日夏歌之介書簡

書簡1（0201） 昭和四（一九二九）年二月二十日付（二十四日消印） 市外西巢鴨町三、五一九 鈴木信太郎様

梧右 阿佐谷八七三 日夏歌之介 封書 巻紙 墨筆

啓上 御高著早速御惠賜玉はり只今正に拝受 御高志厚く御礼申上ます ゆっくり拝見、精進に資したいと考へます 不取敢乍拝受の御礼耳申上ます 二月二十日 早々 日夏歌之介 鈴木信太郎様 梧右

二伸、菊池⁽¹⁾氏詩集を小生友人富田⁽²⁾碎花が感心して若し惠賜願へるならばと申してをります 残本がおありの節は一部御賜与玉はらば同君の尠からぬ喜びと存じます 同君は故人の詩を余程以前より熟知しその人となりその他について小生はいろ／＼同君から教はつた次第です。同君所書は高円寺五四八⁽³⁾嘉治隆一氏方です。合せて右まで申上ます。

(1) 『菊池香一郎詩集』(自費出版)、一九二八)を指す。菊池香一郎(一八八九～一九二二)は東大仏文科出身者のひとりで、辰野隆や鈴木信太郎らの随筆・年譜等にその名を見ることができ、象徴主義に造詣が深く、学友からの信望も厚かったという。結核のため三十二歳で早逝するが、弟の菊池武彦や親交の深かった中島健蔵が中心となり、没後六年を経て全六章四十五編からなる『菊池香一郎詩集』を刊行した。編纂の経緯については中島健蔵『回想の文学1 疾風怒濤の巻』(平凡社、一九七七)に詳しい。(2) 富田碎花(一八九〇～一九八四)と日夏はその初期の活動において、山宮允・西條八十・白鳥省吾・柳澤健の四名と雑誌「詩人」の創刊に関わり、詩話会にも共に参加するなど交流をもった。その後、富田は民衆詩派として活躍し、詩想の上では日夏と袂を分かつことになるが、両者の交際は途絶えず、昭和三十年代まで書簡の往来があった。飯田市美術館(編)『日夏歌之介宛書簡集』(二〇〇二)参照。(3) 嘉治隆一(一八九六～一九七八)は上田敏の女婿。東京帝国大学を卒業後、南満州鉄道東亜経済調査局を経て、東京朝日新聞社に勤務。富田碎花は大正九年、嘉治と共に日光菅沼へ登山に行くなど親交が深く、

昭和二年末からは嘉治の居宅に寄寓して、『上田敏全集』（改造社、一九二八～一九三二）の編集にも関与している。

書簡 2 (0202) 昭和四（一九二九）年（推定）七月二日付（消印不明） 市外西巢鴨町三、五一九 鈴木信太郎様

御直披 阿佐谷八七三 日夏耿之介 封書 巻紙 墨筆

虔啓 本日玉稿正に拝受。御繁忙中の御厚誼一方ならず寔に感謝に堪へませぬ。

実に斯うなつたら男一奴落ちか、つた石は落ちずにもみられず斃れる迄やる決心。当来とも御援助を俟ちます。近く、辰野氏邸にておめにかゝりたく存じてをります。不取敢乍御礼耳 拜具 七月二日 黄眠 鈴木大雅 梧右

（1）日夏監修の雑誌「游牧記」一巻一冊（一九二九・八）に鈴木が寄稿したステファヌ・マラルメ Stéphane Mallarmé の翻訳「海の微風」(Bris marine) あるいは同一巻三冊（一九二九・一一）に寄稿した翻訳「聖女」(Sainte) を指すか。なお、同誌には辰野隆、柳田国男、折口信夫、矢野峰人、木下杢太郎、茅野蕭々、嘉治瑠璃子（嘉治隆一の妻で、上田敏の娘）らも執筆している。（2）日夏と鈴木、辰野隆の交誼については解題を参照されたい。

書簡 3 (0203) 昭和四（一九二九）年十一月末～十二月（推定） 「宛先住所欠」 鈴木学兄 梧右 「差出住所欠」

日夏耿之介 封書 「封筒欠」 巻紙 墨筆

虔啓 東京日々紙上御高正の一文只今拝読。下巻は詩壇辺にて大分異論多きやにて、尤も多くは何故乃公をよく

書かぬかとの□□「亡歎カ」に結論される様ですが、読売迎へはちよいく反駁が参り其度記者が返事をお出しになるかと訊きに來るかわづらはしく、柳虹子^②へのを一つ代表させて一寸答へました。が大分氣を腐らしてゐる折柄ワセダ学校の先生にもかげ口にて悪書と云ひふらす人ある由仄聞不快に考へてゐましたが大兄にはげましていたゞいて大分元氣が出ました。稚淳の点御嗤笑下さい。

近い内辰野氏をお訪ねします。其節、おめにかゝり度考へてをります 不取敢乍御礼耳 早々 日夏耿之介 鈴木学兄 梧右

(1) 昭和四年十一月、日夏耿之介『明治大正詩史』下巻が新潮社より刊行。同書が展開する日本近代詩への遠慮なき批判に対し、詩壇からは反發する声も挙がった。鈴木信太郎は同年十一月二十五日の「東京日日新聞」紙上において、「日夏君は明治大正の文学に広く深く通曉して、同時に外国文学を早稲田大学に講ずる真摯な学徒である」「日夏君が、何よりも先きに詩人であることは、この業における最大の強味である」といった、総じて好意的な書評を寄せている。(2) 『明治大正詩史』下巻に対し、川路柳虹(一八八八〜一九五九)は十一月二十四日「読売新聞」紙上にて「日夏耿之介に与ふ——明治大正詩史の迷妄をただす」を発表し、反駁を試みた。また、それに反応して堀口大學(一八九二〜一九八一)も同紙に「第三の聲——川路・日夏二氏論争の傍に」(一一・三〇)を寄せている。

書簡4 (9204) 昭和五(一九三〇)年十二月二十二日付(二十二日消印) 西巢鴨町三五一九 鈴木信太郎様 侍
者 杉並、馬橋、三六〇 日夏耿之介 封書 卷紙 墨筆

復啓 御丁寧な御手翰拜読 秋以来身辺何かと忙はしくおめにかゝれませんでした。二十七八日頃から仕事を抱へて伊豆へ行ますので、それ迄に一度お訪ねしたいと考へてゐた折柄でした。二十四日教授会があるので吉江さん⁽¹⁾におめにかゝりますから、先生の御都合がよかつたら二人で、前以て電話をかけてをいてお訪ねします。吉江さんの御都合がつかぬ様でしたら、小生一人にて二十四、五、六日間に電話をおかけしてをいてお訪ねします。久しぶりで快談を楽しみにしてゐます。とり忙ぎ御返事まで。十二月二十二日 日夏耿之介 鈴木学兄 梧石

(1) 仏文学者・吉江喬松(一八八〇〜一九四〇)は、早稲田大学における日夏の恩師にあたり、前年に日夏監修のもと創刊された雑誌「游牧記」にも寄稿している。書簡2(1)も参照。

書簡5(02/05) 昭和七(一九三二)年一月二十四日付(二十五日消印・中野) 西巢鳴三、五一九 鈴木信太郎様
榻下 杉並町、馬橋三六〇 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

復。久敷おめにかゝりません。元日から又激しい不眠の為貧血を惹起して臥床まだ休講中ニテソロ／＼学年も終りにせぬかと悦んでをります。どうも不眠が芥川⁽¹⁾的に深刻になりさうなので一週日前から毎日ヒルを三十四匹づ、足につけて血をとり(同時にヒルジンと申す精分が身体に入りて之が薬の由)試み中ですが血をとり過したのか顔色あしくめまいがするのでけふから当分止めてをります。さて本日はまことに美⁽²⁾ごとな寒餅⁽²⁾あまた御恵賜下され、老母ある小生家庭では一入うれしく頂戴 厚く御礼申上ます。山国生れの一同餅は大好物故皆々大悦びです。

其後大兄や辰野氏にもお目にかゝれず淋しい心持ちです。小生は大兄らとたまに心持ちのよく合した逸興の数時

間を送る事が生活の楽事と考へてをります故快癒しましたら電話をかけて大兄の書室を驚かさうと楽しみにいたしてをります。不取敢横臥中乱筆御用捨御令聞によろしく御伝へ願升 早々拝具 一月二十四日夜 黄眠道人 鈴木学兄 侍者

(1) 日夏耿之介は大正三年、吉江喬松や西條八十らと愛蘭土文学研究会を立ち上げ、この会を通じて芥川龍之介と知り合った。なお、芥川が亡くなった際に日夏が記した「我鬼窟主人の死」(『三田文学』一九二七・九)にも、「芥川的」「芥川趣味」といった表現が用いられている。(2) 鈴木信太郎の生家は神田佐久間町の米問屋で、鈴木は「年の暮の餅と寒餅とのため、年々二三俵づつ最上の糯米を選択させて、伸餅にして、親友たちに賞味して貰った」(『鈴木信太郎全集』第五巻、一三〇頁)という。このことについては「鈴木信太郎記念館だより」八号(二〇一三・三)に詳しい。

書簡6 (0206) 昭和七(一九三二)年九月十二日「便箋」十三日「封筒」付(十三日消印) 市外西巢鴨三、五一九 鈴木信太郎様 市外杉並町馬橋三六〇 日夏耿之介 封書 便箋 ペン

拝啓 先日はわざわざお見舞に御来車その後一時たいへんよかつたのですが八月半から又悪くなつて脳神経の暑気あたりから起る心臓疾患がいかにも苦しいので三四日おきに強心済マ注射をしたりたへず間もなく酸素吸入をして一時は大分苦しんだが三四日前の秋雨からやつと一息ついてゐます 二学期は全く休み静養を続けやうないと来年の暑気があぶないと医者に云はれて居りますのでその気になつて一際読書と執筆を廃して散歩や運動に宗旨がへをしやうと思つてゐます

辰野君と御同道でおひまの時には是非（夜分より日中の方がこちらには好都合ですが）颯爽たる閑談をおき、した
いものです。

本日はお見舞の品をありがたう 病氣勝ちの小生には至極結構な品です。御礼かたぐ右まで 草々 九月十二
日 日夏生（代筆） 鈴木信太郎様

書簡 7 (0207) 昭和八（一九三三）年一月二十九日付（三十日消印・神奈川藤澤） 東京西巢鴨三五一九 鈴木信

太郎様 御礼 鵜沼下岡円城別荘 日夏耿之介 封書 巻紙 墨筆

大寒の折柄御健安何よりと存じます 本日、結構なお餅を御恵投まことに珍味家中にてうれしく頂戴いたしま
した あたかも文藝春秋にて兄のギャストロノミー論をおもしろく拝読した後にて一入うれしく賞味いたしたわけ
です 庇陰様で少しつ、よろしくなつて参り一寸つ、散歩してをりますが神経の病故外科程直りが早くないので
りくする事もあります それでも漸つとこんなによりくした文字でも書きうるやうになりましたから自分で認
めました。

カマクラ行

鎌倉やアナニヤシオトメラ冬木立

① 山内君夫妻がちよいく見舞つてくれます。辰野君の随筆はおもしろく一気に読了しました。マラルメの御事業
② 其後如何にや 寒中皆々様何卒御丈夫におくらし願ひます 暖くなつたら是非お遊びにおいて下さい。

又一句

臘梅^③や捧心のをみな欄による。 不宣 二十九日 黄道人 拝 鈴木学兄

(1) 昭和七年十月より、日夏は神奈川県藤沢にて療養生活に入っており、この句はその時期に詠まれたもの。「アナニヤシオトメラ」は、『古事記』でイザナギがイザナミに対し、「阿那邇夜志、愛袁登賣袁（アナニヤシ、エオトメラ）あなんと、いいおとめよ」と言った故事に拠る。この一句はのちに『婆羅門俳諧』（昭森社、一九四四）に、「鎌倉大仏ニ詣ル」と詞書を改めて収録されている。(2) 仏文学者・山内義雄（一八九四～一九七三）夫妻を指す。山内は昭和二年に吉江喬松に招かれて早稲田大学で教鞭をとっており、日夏の監修する雑誌「戯苑」（一九三二年創刊）にも寄稿するなど交流があった。なお、鈴木や辰野も「戯苑」にて執筆している。昭和三年から昭和十年まで山内は鎌倉市笛田に居住しており、その間、昭和七年に雑誌「女人芸術」の同人・小池みどりと結婚している。(3) 「臘梅」は十二月（＝臘月）に花をつける中国原産の梅。「捧心」は春秋時代の美女・西施の故事に由来し、胸をおさえる美女のさまをいう。この句も(1)同様、「婆羅門俳諧」に収録されている。なお、句集では「臘梅や捧心の阿嬌欄に憑る」と改められている。

書簡8 (1938) 昭和八（一九三三）年三月四日付（四日消印・神奈川藤澤） 東京市西巢鴨三五一九 鈴木信太郎
 様 鶴沼下岡 日夏耿之介 葉書 墨筆

一 首
 茂木部隊の勇敢さに新聞を実に待たれます。共産派如き□□□にとびませう

すめろぎの御代腐^くだとふしこの博士しこの教授をザバイカル^②に斫れ。

御健安を祈上候 以上

(1) 昭和八年の二月から五月にかけて、満州南西部に位置する熱河では、当地に割拠する軍閥・張学良と関東軍との間に軍事衝突が発生。最終的に熱河は関東軍によって制圧されることとなった(熱河作戦)。茂木部隊はこの作戦に従事した部隊で、国立公文書館デジタルアーカイブ「陸軍省発表」によれば、「茂木部隊は三月五日夕刻南台子(困場東北方約三十軒)に進入した」との記録がある。(2) ザバイカルは満州・モンゴルの北部一帯を指す地域名。

書簡9 (2200) 昭和八(一九三三)年九月二十一日付(二十一日消印・神奈川藤澤) 東京豊島区西巢鴨町一丁目
三、五一九 鈴木信太郎様 侍者 鶴沼下岡円城別荘 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

新涼永夜候如何御起居候也 本日は牧神詩御恵投素晴しき高雅本、諷詩といひ外装といひ寔に間然する処なく、健羨至極、之に比ぶれば在来拙著如きは兒戯に類せり長く坐右の珠として賞玩仕事に御坐候 御厚情繰返し御礼申上候 小生残暑病骨を彫みて此三週日程まことに耐へかたき苦惱に有之一両日や、軽快を覚え申候

幸に小生も御高著如き大鴉訳本を上板出来たらば一期の喜びと□□いたしをり候。印税などなくてもアレ丈の本ならば大悦也。

それにつけても引つゝきマラルメ全訳の一日も早く御出版、病骨の命ある間にせめて拝見いたし度候 何卒そのおハコビ願入候 不取敢御礼御喜び迄 頓首 二十一日 日夏耿之介 鈴木雅兄

(1) 鈴木信太郎(訳) マラルメ『半獣神の午後』(江川書房、一九三三・九)を指す。日夏の旧蔵書が保存されている飯田市立図書館・日夏文庫でも所蔵を確認できる。「鈴木信太郎記念館だより」創刊号(二〇一九・六)によれば、「信太郎が、自身が携わった書物の中で最も気に入っていると述べているのが、一九三三(昭和八)年に一〇〇部限定で発行された豪華翻訳本『半獣神の午後』(江川書房刊)」であり、「その前年頃に原典初版を入手した信太郎は、自らが翻訳した日本語版も「それに負けない美本に仕立ててやらうと野心を起し」、装丁はこの版に忠実に倣いながらも、さらに上質の烏子紙を使用し、挿絵も原寸通りに再現」したという。(2) 鈴木から日夏に宛てた昭和八年十月二十四日の手紙(『日夏耿之介宛書簡集』所収)には、「拜復、御端書拝見大鴉のこと、二十日の夜、江川書房拙宅に参りし節種々打合せしました。」とあり、書簡9のあと、日夏によるポー『大鴉』訳書の出版に向けて、鈴木が仲介の労をとっていたことがわかる。鈴木 of の送った手紙には、江川書房からの出版の段取りが具体的に記されており、前向きな検討がなされていた様子がうかがえるが、最終的に日夏訳『大鴉』は野田書房から出版されている。書簡14も参照。なお、江川書房および野田書房については、中林雅士「純粹造本——江川書房と野田書房」(『圖書の譜』明治大学図書館紀要)一号、一九九七・三)に詳しい。

書簡10(0210) 昭和八(一九三三)年十二月二十六日付(二十六日消印・神奈川藤澤) 東京西巢嶋一丁目三、

五一九 鈴木信太郎様 御礼 くけ沼 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

御見舞金拝受いつも乍ら御厚情□□の外無之く小生十二月中二回出講せるもマーケットスクールの経営者の心証を害し一週一回では俸給が貰へず、やむなく蔵書百二十余冊を売つて旦那のキラいな大晦日を越年 一月半には更に蔵儲の書物悉く売つて四月迄の療治費生活費といたすべく、どうせ売るならケルムスコットなど判る仁に買つて

貰ひたく候 斎藤勇君など如何でせうか。本虫が本を放つ心持ち之は大兄でなくては同感して貰へますまい。前途
 只偉大なる闇黒ある而已 此闇を一篇の詩に残さずば死ねません。何れ二十九日頃には東京へ移転、阿左ヶ谷の
 賤ヶ伏屋のおどろが下よりおたより差上可取敢御礼申上候 草々 廿二日 黄眠□士 鈴木学士 吟梧下

(1) ケルムスコット・プレスを指す。ケルムスコット Kelmscott は、イングランド南東部オックスフォードシャーの村で、ウイ
 リアム・モリス (William Morris, 1834 ~ 1896) が一八七八年以降に居住したこと知られる。モリスは一八九一年にケルムスコッ
 ト・プレスを創設し、Arts and Crafts Movement を展開。美麗な工芸として装飾された書籍を制作した。現在、日夏文庫には
The Poems of William Shakespeare, Kelmscott Press, 1893. が収蔵されている。日夏のケルムスコット・プレスに対する思い入
 れは、随筆「美しき書籍の話」(「改造」一一巻七号(一九二九・七)所収)に詳しい。(2) 英文学者・斎藤勇(さいとう・たけし)
 は、大正十二年四月から大正十四年六月にかけて、英文学研究のために欧米を歴訪。大正十二年七月十四日にはロンドンから日
 夏に宛てて絵葉書を送っており、「いつぞやバートン訳「アラビア物語」を御探しのやうでしたが、こゝに来て珍書目録を見ると、
 ぼつ／＼見えます」「もし御入用あらば私にできる丈の事は喜んで致します」と伝えているなど、洋書に関する日夏の相談相手で
 あったことが察せられる(『日夏歌之介宛書簡集』七九〜八〇頁、ただし同書では同名の労働運動家・斎藤勇(いさむ)と混同さ
 れている)。(3) 「賤ヶ伏屋」は身分の低い、卑しい者の住む粗末な家の意。「おどろが下」は「藪のなか」程度の意か。

書簡口 (0211) 昭和九(一九三四)年一月三日(消印・杉並) 市内西巢鴨一ノ三、五一九 鈴木信太郎様 玉案
 下 杉並区阿佐谷六丁目一一七 日夏歌之介 封書 巻紙 墨筆

啓上 卅日鶴沼を棄て、阿佐谷新居に移り申候 氣持引立ず茫々然味々然とくらしてをります。正月のいつものうまいお餅を拝受一同賞味。特に地方旧家に育つて郊外茅屋に侘住居の母親はむかしを偲び一入喜んで頂戴しました。

新居は阿佐谷駅北口より十五分、鷺ノ宮一丁目の傍にて、中野石神井間バス東原停留場下車北入二丁、日本モザイク研究所前と□ふ処です。

風邪が時花るやうです みな様ご健安を祈上ます 御礼而已 拝草 甲戌新春 日夏耿之介 鈴木信太郎様 梧下

書簡12 (2012) 昭和九(一九三四)年二月十四日付(十四日消印・杉並) 西巢鴨一丁目三五一九 鈴木信太郎様

研北 阿佐谷六ノ一一七 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

貴墨拝読御病身御快方の由安神しました。いろ／＼の心労でお見舞も出来ず申訳ありません。年末から春かけて蔵本三百餘冊を売り年越しをすまし一月から種々交渉してやつと月給を又くれましたので、ケルムスコットも当分売らなくてもよい事になりました。売つた本は駄本でしたが明治小説史用のバックナンバーを貫目買いにされた時は一寸泪が出ました。二月中出ないとサラリーをやらぬといふ厳命で自働車で往復して辛くも一週二日すませてゐます。帰ると氣息エン／＼です。昨日は猛烈な胃加答児でしたが腹を押へて今日出校、学生が見るに見かねてどうか帰つて下さいといふ仕末です。学校は企業屋で学生は株主ですが株主の方が同情が真摯です。

水仙辞は余りよい訳でなさうですが御参考になるよりゲテ物の民藝趣味でせうか。アレを送つた人は支那で出版されたシンボリズム(日本語)の本をくれました。佐藤(春夫)と太田(七郎)の世話で随筆が出ます。コノ随

筆が売れ、ば続いて出版してくれるといふのです。ダカラ僕の文のよい点だけを紹介して批評していた、きたいとお願ひしたかつたのですが御病中故さし控へました。本は三月一杯には出ませうか。

歌集も半^④銭戯社から出ます。さうかうして零厘な印税をかき集めて菓餅の料としてゐます。

君が全癒され僕がモ―少しよくなつたら又曳尾庵^⑤博士と三人鼎座の談笑を今から楽しみをります。

臥てゐての乱筆御用捨下さい。 已上 十四日 日夏歌之介 鈴木信太郎様

(1) 日夏が売却した「バックナンバー」を用いて執筆した「明治小説史」は、昭和元年七月「中央公論」初出の「明治煽情文芸概論」(のちに梓書房から昭和四年に出版された「明治文学襍考」に収録)を指すか。(2) 『水仙辞』は梁宗岱(一九〇三―一九八三)によって昭和三年に刊行された、ヴァレリー『ナルシス断章』の中国語訳を指す。鈴木はそれに先立って、大正十三年に『ナルシス断章』を日本語訳している。同書にまつわる経緯については、鈴木信太郎「リャン君去来」(『帝国大学新聞』一九三七・一・二八)に詳しい。(3) 佐藤春夫(一八九二―一九六四)とともに名前が挙がっている太田七郎(一九〇六―一九四三)は早大英文科出身で日夏に師事。富山房を経て外務省・北京駐在の経歴を有する。兩人の世話で出版予定の「随筆」とは、『残夜焚艸録』(竹村書房、一九三四・三)を指すか。(4) 「半銭戯社(半仙戯社)」は、日夏門下の独文学者・石川道雄(半仙道人、一九〇〇―一九五九)が編集・発行を担った出版社。雅号は「半仙」だが、親交のあった澤田四郎作の随想「山でのことを忘れたか」(創元社、一九六九)では「半銭子」となっている。この半仙戯社から出る「歌集」とは、翌年刊行の歌集「病艸子」(半仙戯社、一九三五・八)を指すか。(5) 「曳尾庵」は辰野隆の庵名。

書簡13 (02.13) 昭和九(一九三四)年十二月二十九日付(二十九日消印・杉並) 豊島区西巢鴨一ノ三、五一九

鈴木信太郎様 阿佐谷六ノ一一七 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

啓上 昨日は例のウマイお餅をたくさん御恵投下され厚く御礼申上ます。

折から舎弟に嫁をとり、二十五日に披露したばかりの処なので一同花嫁さまも皆々うれしく頂戴、毎々の御厚情、御礼申上ます。

大兄達にも久しくお目にかゝりません。御健かなることは学生からきいて陰乍ら喜んでをります。佳き新年をお迎へ下さるやう奥様によろしくお伝へ下さい 草々 十二月二十九日 日夏耿之介 鈴木学兄

書簡14 (0214) 昭和十(一九三五)年三月六日付(七日消印) 西巢鴨一丁目三、五一九 鈴木信太郎様 平安
阿佐ヶ谷六ノ一一七 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

啓上 本日大鴉^じ出来。昨夜野田がソチラへも持参いたせし由大兄の一方ならぬお心遣ひにて、臥てゐて自分の本が出来てコンナ嬉しい事はない 厚く厚く友情を感謝します

本屋は何かお礼を持つてゆかねばと相談しましたが貧乏本屋がヘタなものを大兄の家へ持ち込んでもどうかと思ふ故それより今後出る本を必ず呈上して謝意を表したらと申しおきました。

臥てゐて答案しらが仲々神経を使つてやりきれません。二十日迄はその苦痛の連続です 大兄も御多忙最中でせう 不取敢御厚情を深謝まで 草々 三月六日 日夏耿之介 鈴木信太郎様 玉案下

（1）日夏耿之介（訳）、ポー『大鴉』（野田書房、一九三五・三）を指す。文中の「野田」は野田書房店主・野田誠三（一九一〇～一九三八）のことか。

書簡15 (22.15) 昭和十二（一九三七）年八月十五日付（十五日消印・杉並） 豊島区西巢鴨^マ二ノ三五一九 鈴木信太郎様 侍者 「差出住所欠」 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

御芳書並製本拝受。仲々立派な出来で大に気に入りました。御面倒厚く御礼申ます。製本代を立替て下さった趣何程でしたか。御序での折御報示冀上ます。

けふは朝から日本軍航空機の勝利を号外で見大に気をよくしてゐる処です。祝盃をやりたいではありませんか。何とかいふ日本出来のシヤンペン⁽¹⁾をサイダーのつもりでガブ呑みをして大に酩酊して医者の手にかゝりましたのはつい此間の話です。とり忙ぎ御礼まで 拜上 八月十五日 黄眼狷齋 鈴木雅丈 御座下

今度ノ宅ハ駅ノソバ^マで眺メガ一寸佳イ処デス 秋興ト共ニ御来談下サイ クレ〜モ御礼申上マス 再白

（1）昭和十二年八月十三日から始まった第二次上海事変に関する記述。十四日から十六日にかけて日本海軍による渡洋爆撃が実施された。

書簡16 (22.16) 昭和十二（一九三七）年十月二十四日（消印・杉並） 豊島区西巢鴨^マ二ノ三五一九 鈴木信太郎様 御直披 阿佐谷四ノ四五五 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

御高著拝受御礼申ます。^①小生一週間ほど本郷の神経病院に入院昨日退院しました。

不日何処かの温泉へ旅行の予定です。

アポリネールの「カリグラム」限本(番号一七四二)を所持してゐますが之は絶版本相当高価とき、ましたが近比の古本市価御教示冀上ます。又、アポリネール趣味の仏文学本蒐集家で割によく買つて下さる人があつたら御紹介願上ます。

籠城及養病費といたしたいのです 御願と御礼と 已上 日夏生 鈴木兄 二十四日

(1)『日夏歌之介全集』八巻の年譜によれば、日夏は昭和十一年十月八日から本郷にある病院に一週間入院し、発作性心臓急拍症を克服したとある。ただし、書簡16の消印は昭和十二年となっており、一年のずれが生じてゐる。(2) Guillaume Apollinaire, *Calligrammes: poèmes de la paix et de la guerre, 1913-1916*, Paris, Mercure de France, 1918. にひびくは、令和六年十一月現在、日夏文庫のデータベースで所蔵を確認できない。後日、何らかの形で日夏の手を離れたものと推測される。

書簡17 (92-17) 昭和十四(一九三九)年一月十七日(消印・杉並) 豊島区西巢鴨^マ二ノ三五一九 鈴木信太郎様 [差
出住所欠] 黄眠道人 葉書 墨筆

^①シラノ辱く拝受 爰に再誦の怡を有ちます 御厚礼而已 拝上

(1) 鈴木信太郎・辰野隆(共訳)、エドモン・ロスタン『シラノ・ド・ベルヂュラック』(白水社、「初版」一九二二「改版」

一九三九）を指す。一、辰野隆書簡の書簡56も参照。

書簡18 (Q218) 昭和十五（一九四〇）年十月十九日（消印） 豊島区西巢鴨^マ二ノ三五一九 鈴木信太郎様 侍者 [差

出住所欠] 日夏歌之介 封書 巻紙 墨筆

ロオ^①マイヤのうまいもの拝受 いつもく御心つくし心うれしく御礼申上ます 小生信効での山羊の乳が小生の特異体質にたたりて貧血症状を生せし処へ風を引いて喘息となりラッセルもきこえる由にて臥床一ヶ月に及びました 段々快気致しましたから御安神下さい 大兄のマラルメ^③研究が白水社より出る由之は期待いたし居るものです。只表紙の布がありませんね。今日来た日野葦平^④の話では銀座のタクミ^⑤に流球^マの帯地の裂れで特製本にふさはしきがある由故一寸御耳に入れておきます 御礼而已 拜上 十九日 黄眠道人 鈴木学兄

駄歌二首

英京^⑥の炎上つづきわが債鬼ふみ屋のふみも今か燬かれむ

生きがたき世に生きぬきて五十年ありへしも惟へば心たらへる

御一笑く

(1) アウグスト・ローマイヤが大正十年に創業した、大崎の工場を拠点とする、ハムやソーセージを取り扱う会社。大正十四年より銀座にてドイツレストランおよび売店を開業（書簡26も参照）。(2) ラッセル音（気管支や肺などの聴診で聞かれる異常呼吸音）のこと。ドイツ語の「Rasselgeräusch」に由来し、しばしば「ラ音」と略される。(3) この書簡が執筆された昭和十五年

十月付近に、鈴木信太郎が白水社から出版したマラルメに関する研究書は、管見の限り見当たらないが、『鈴木信太郎全集』四巻の編者注（松室三郎）によれば、昭和十六年頃、『半獸神の午後研究』の出版について白水社と相談していたという。（『鈴木信太郎全集』第四巻、八七九頁下段）（4）『日夏耿之介宛書簡集』には、火野葦平（一九〇七〜一九六〇）からの書簡が八通（昭和十五〜三十四年）収録されている。そのなかでも昭和十五年十一月十二日の日夏宛書簡には、「先般は突然御伺ひいたしました失礼いたしました。御病氣のこと少しも存じませず、たいへん相すまぬことに存じました」はじめて先生のおすまひにお伺ひし、（中略）心洗はれた思ひがいたしました」など、火野が日夏の居宅を初めて訪れた際のことについて述べられており、本書簡中の火野の来訪を指しているものと思われる。（5）銀座の民芸品店「たくみ工芸店（現・銀座たくみ）」のこと。同店は昭和八年創業。柳宗悦らが事業に関わり、長く民芸品の普及と振興に尽力してきたことで知られる。（6）「英京」は英国の首都ロンドンを指すか。第二次大戦下、ナチス・ドイツによるロンドン空襲が昭和十五年九月七日から翌十六年五月十日まで行われ、とくに十五年九月十五日の空襲は激しかったという。「債鬼」は借金取り。「燬」の字義は「うずみ火、灰の中に埋もれた火」。（7）二首の内、後者は歌集『文人画風』（関書院、一九四七）に「生きかたき世に生きわびて五十とせをありへしともへば心足らへる（昭和十四年春）」と若干改訂して収録している。

書簡19 (0210) 昭和二十(一九四五)年(推定) 一月十六日付(十七日消印) 豊島区西巢鴨一ノ三五一九 鈴木

信太郎様 御礼 阿佐谷四ノ四五五 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

啓上 先刻は令息を以て御高蒙^①一顆御恵与辱拜受 早速坐右書に押捺 その雅趣を珍玩しました。永く□□□□の珍として友誼を偲ぶ事と致します。昨日は曾田研究室にて辰野君と会談

香^②の高きウキスキイかもわが友は 疎開談歇めてさらに杯とる

索莫たる頃のの生活に佳友との雅談ほど嬉しいものはありません。一昨日のアノ会は月毎に致す所存です 不取
敢御厚礼申上ます 一月十六日 黄眠 拜 素白^③雅丈 師坐下

(1) 日夏と鈴木は共に篆刻を趣味としていた。日夏の印章に対する関心については、「飯田市美術博物館研究紀要」三一号
(二〇二一・三) 所収の織田顕行「日夏耿之介旧蔵の印章」に詳しい。(2) 書簡18(7)と同様、『文人画風』に収録。(3) 「素白」
は鈴木信太郎の雅号。鈴木が日夏の喜寿に際して執筆した「素白私語」などにもみられる。

書簡20 (0520) 昭和二十(一九四五)年(推定) 六月八日付(消印不明) 東京都本郷区三丁目 東京帝国大学文
学部仏文学科 鈴木信太郎様 茨城県那珂郡平磯町川向高磯一五七一 日夏耿之介 絵葉書 ペン

啓上 つひに御罹災の趣辰野君より承りせめて其文庫の安全なりしをき、寔に何よりと存じ上りました。早速故宅に
向けて御見舞差出せし処本日に至り戻り来りし故更に東大宛御見舞状を差出します。拙宅も約十間さきで立木にて
止まり助かりましたが、狩場の鹿、明日をも知らぬ事です 老生腸胃よりいたく栄養不良に陥り此地に静養中。今^①
月末には信笈入りの考です 何卒切に呉々も御一家皆様御自愛の程祈上ます 草々 頓首 六月八日 日夏耿之介

【裏面・印刷】(平磯名勝) 義公名命の護魔坦石^②

【裏面・手書き】

想像直観^③の密房ゆ立出でみればた、かひたけなはなりけり

磯の巖夕昁りしてうつうつとねむり初むらし浪のの中に

ひたちのうみ阿字之浦曲に水脈^みひくは上つ代よりの棚なし小舟か

山羊^{かとし}のおぢは木蔭^{こき}地に思ひ恍^{まじ}く物言ひ出れば疊言^{まじごと}なるへし

雲垂れて海は灰白にうち沈み皺だむおもて底意あるに似たり

暢氣のこし折れ失礼御免被下度

(1) 日夏耿之介の疎開時の記録である「栗里亭記」によれば、昭和二十年の年初、「常州平磯に遊びて気色佳かりければ、五月初榮養やうやく衰へしを奇貨として、その五日同地に又赴きて旧飛行隊將校住宅を賃して六月十一日まで病を養ひたりき」とあり、五月五日～六月十一日の約一か月ほど、平磯で療養していたことがうかがえる。なお、その後日夏は七月、飯田市山本村に疎開。親戚筋にあたる竹村襄平宅を借りて「栗里亭」と名付け、翌年九月まで滞在したという。(2) 義公は徳川光圀。元禄時代、茨城県平磯の名勝・護摩壇石を「清浄石」と命名したと伝えられる。(3) 裏面は護摩壇石の写真に日夏による歌が五首、手書きで記されている。これらの歌は若干の異同こそあるものの、すべて『文人画風』(関書院、一九四七)に収録されている。

書簡21 (0221) 昭和十九(一九四四)年(推定)十一月四日付(五日消印) 豊島区西巢鴨一丁目三五一九 鈴木

信太郎様 親啓 杉並区阿佐谷四ノ四五五 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

啓上 辰野君より大兄論文教授会通過の報に接し本より当然の事乍ら邦家の表彰を受けし事慶賀の至に存じます
文部発表次第何処やらにて祝盃を同人にてあけたく小生を發起人にお加へおき会場等小生一向不案内故辰野君に

お願ひ致したく存じます

西条董の大道艶歌□「師／杯カ」が見もせずに悪口諫言はむしろ滑稽なれど吠えれば犬にも水をかけてやりたきは人情ならずや一笑々々 此上は早く白水社刻本を拝見致したく待望至極です お祝旁むだごと而已 草々 頓首
十一月四日 日夏歌之介 鈴木雅契

(1) 鈴木信太郎は昭和十八年十二月七日に『ステファヌ・マラルメ詩集考』を学位論文として東大に提出しており、これを指したもののか。最終的に鈴木は昭和二十年五月三日付で文学博士の学位を授与されている。(2) 日夏は『明治大正詩史』において、西條八十の詩風を厳しく批判した。「西條は輓近に及んで愈よ多作に駛り、一年間に於けるその制作の夥しき丈けそれだけその佳品は真に稀少である」「彼の童謡と小曲との濫作が、發展すべきその詩想の新幼芽を著しく傷めてしまった」と、西條が歌謡に接近したことを非難し、もはや「艶歌師」(『日夏歌之介全集』第三卷、七五七頁)であると断じている。本書簡はこれに関連する記述であることが推測される。(3) 白水社から出版を検討していたマラルメ『半獣神の午後』に関する研究書を指すか。書簡18(3)も参照。

書簡22 (0222) 昭和二十二(一九四七)年十一月十九日付(十九日消印) 豊島区西巢鴨一丁目三、五一九 鈴木信太郎様 杉並区阿佐谷四ノ四五五 日夏歌之介 葉書 ペン

新著半獣神午後拝受 時節柄にしては厚い本を出されましたね。印譜はまだですか。いつそや支那の錢瘦鉄君とあいました まことに佳い人物でした。山田正平の文人画展があつて久振でアルコール分を注射して快談しました

すばらしい画をも描く印人です 御礼まで 草々 十九日

(1) 鈴木信太郎(訳) マラルメ『半獣神の午後 其他』〔初版〕(要書房、一九四七・二〇)を指す。日夏文庫に所蔵あり。(2) このおよそ二年後、鈴木は自ら篆刻した印章の印影・印款を載録した『素白衛士印譜』を出版する(一九五〇・一)。書簡19も参照。(3) 錢瘦鉄(一八九七〜一九六七)は中国の画家・篆刻家。江蘇省無錫市出身。水鉄・苦鉄(呉昌碩)と共に三鉄と称せられる。大正末年には京都の白沙村荘に居候した。会津八一をはじめ、日本の文人と交流を持ったことでも知られる。(4) 山田正平(一八八九〜一九六二)は篆刻家・画家。篆刻家山田寒山の女婿。若くして中国にわたり、河合荃廬の紹介で清の文人呉昌碩に師事。篆刻や画を学んだ。

書簡23 (0223) 昭和二十六(一九五一)年五月(推定)二十五日付(消印不明) 豊島区西巢鴨一ノ三、五一九
鈴木信太郎様 阿佐谷四 日夏耿之介 葉書 墨筆

呪詩人⁽¹⁾ 詠本辱く⁽²⁾ 押受 先日拙作古曲の節つけ成り都一舟師匠宅にて封切奏有之 勢を得て更に数曲を試みむと詩興を相待申候 頓首

(1) 鈴木信太郎(訳) ヴェルレエヌ『呪はれた詩人たち』(創元社、一九五一・五)を指すか。日夏文庫に所蔵あり。(2) 都一中を家元とする一中節の奏者。『日夏耿之介全集』の年譜によれば、昭和二十九年十一月に新橋演舞場にて日夏による小唄「鎌倉四季 四景」が演奏され、その作曲者が「都一舟(一中節)」であったという。

書簡24 (0224) 昭和二十七年（一九五二年）一月十五日（消印・杉並） 豊島区西巢鴨一ノ三五一九 鈴木信太郎様
阿佐谷四 日夏歌之介 葉書 墨筆

① エルレエヌ集辱く拝受御厚礼申上 やつがれ心臓肥大症より更に坐骨神経痛に悩み臥正月を熱海に送りて帰宅。
月金は銀座医師まで通ひをり追々ガタピシのフォード車お笑ひ下さるへし 草々

① 「エルレエヌ集」は鈴木信太郎（訳）『ヴェルレエヌ詩集』（創元選書120）「初版」（創元社、一九四七）を指すか。日夏文庫に所蔵あり。

書簡25 (0225) 昭和二十七年（一九五二年）年（推定）十一月十九日（消印） 豊島区西巢鴨一ノ三五一九 鈴木信太郎様
【ゴム印】 東京都杉並区阿佐ヶ谷四ノ四五五 日夏歌之介 葉書 墨筆

① ポエジイ・フランセエズ拝受御礼申上候。夏の疲れが秋に出て臥床又臥床 □□に驚起く事久し 御礼而已 草々
頓首

① 「ポエジイ・フランセエズ」は鈴木信太郎（編）『フランス抒情詩集』（世界抒情詩選）（河出書房、一九五二）を指すか。日夏文庫に所蔵あり。

書簡26 (0226) 昭和十三(一九三八)年(推定)十二月二十八日(消印) 豊島区西巢鴨二ノ三五一九 鈴木信太

郎様 法前 阿佐谷四ノ四五五 日夏耿之介 封書 便箋 墨筆

拜啓 本日老妻を従へて銀座に赴き露肆にて支那焼染付硯屏の雅趣した、るやうなのを掘出し、日劇地下街にてニュースを見物して只今帰宅して一休みしたる処へ、山内兄よりのロオマイ屋の大牢の慈味と共に大兄より吉例のもちひを拝受いたし候。御厚情御礼申奉り候 小生近比たん／＼元氣にて方々東京見物いたしをり、全く十年楚囚の身が放たれて街上散策の感有之。是実感に候也 一度御訪ね申さむかと存じつ、御多忙と推察して遠慮いたし候来年からはそろそろ文場の弾正台に立て降魔利剣を振ふべく候 先⁽³⁾つ谷崎君を論することを頼まれて頃日脱稿。公表の上は御叱正待上候 御礼而已 拜上 黄眼道人 鈴木雅契 法前

二伸 小生今学年はイキリス象徴主義を講じをり、一年にて終らず更にいま一年継続いたすべく候 頃日出し片山何かし執筆の象徴主義概説といふもの、下らぬ借着論とにらみ候 但し店頭の立見に候也

(1) ハムヤソーセージの製造・販売に携わる企業。書簡18(1)も参照。「大牢」は天子が社稷を祭るときの牛・羊・豚などの供え物を表し、転じて「立派なご馳走」の意も。(2)「文場」は文壇の意か。「弾正台」は律令制で非違の取締りや風俗の肅正を司つた役所。また、「降魔利剣」は密教の法具で、不動明王が持つ悪魔を降伏するための鋭利な剣。(3)「谷崎文学の民族性」(「中央公論」五四卷二号、一九三九・二)、あるいは「谷崎潤一郎 詩境及散文境」(「新女苑」三卷六号、一九三九・六)を指すか。なお、日夏は谷崎潤一郎の弟・谷崎精二と、早稲田大学英文科の学生時代から親交があり、兄の潤一郎とも関わりがあった。(4) 河出書房の『廿世紀思想』全十一巻中の第四巻『神秘主義 象徴主義』(一九三八・二二)に収録された片山敏彦「象徴主義概論」を指

すか。

書簡27 (02-27) 昭和二十四（一九四九）年（推定）（消印不明） 豊島区西巢鴨一ノ三、五一九 鈴木信太郎様 阿

佐谷四ノ四五 日夏歌之介 私製葉書 ペン

【裏面】^① 覚書拝受、立派な装幀です。僕はクソ虫の全国書房が上巻だけで打ち切つて丁寧^②に手紙できいてやつても返事をよこしやがらぬので忌ま／＼しいたらない。こ奴必ず社会的自殺をさせてやります。御礼旁ふんまん迄 草々

【表面】 此間初めて一人で外出 江戸川アパートへ山内^③を訪問。夜まで話し大木卓^④に送られて無事かへりました。桜間金太郎に逢ひました。好ましい人物です^⑤

(1) 鈴木信太郎『フランス象徴詩派覚書』（青磁社、一九四九）を指す。日夏文庫に所蔵あり。(2) 日夏歌之介『英吉利浪漫象徴詩風』上巻「増補重刻版」（全国書房、一九四八・二）を指す。同書は上下二巻本として、昭和十五年・十六年に白水社から刊行され、昭和二十二年にその増補版を全国書房から出版する予定だったが、上巻のみの刊行にとどまり、下巻は結局未刊のままに終わった。

(3) 山内義雄は昭和十年より東京市牛込区新小川町の同潤会江戸川アパートに居住。書簡7も参照。(4) 大木卓（一八九九～一九六九）は洋画家、太平洋画会委員。家業の大木製薬会社取締役会長も務めた。(5) 「桜間金太郎」は金春流能楽師・桜間弓川（一八八九～一九五七）、またはその長男（一九一六～一九九一）のことか。

書簡28 (02-2801) 昭和十七～十八（一九四二～一九四三）年（推定）六月二十四日付（二十四日消印・杉並）

豊島区西巢鴨^{マヤ}二ノ三五一九 鈴木信太郎様 御札 阿佐谷四ノ四五五 日夏耿之介 封書 巻紙 墨筆

① 仏文学史初中巻追蒐けて拝受 豫而精読を要する好著とき、及びましたから敢て古代史迄御要求に及びました厚く御礼申ます

世相も段々浙瀝たる有様になりましたが、菊池寛^②如き大ヤマ師が、何にうろたへてか、此際美を犠牲にしてもなどとほざくと、何となく彼奴らの自己弁明のやうにも受取られ笑止千万です。山本有三^③如きに至つては、文字を破壊し言葉を破壊し乍ら便乗に汗をかいてゐますが、その著の訳がナチスで忽ち発売禁止に処せられた事大に笑ふべしです。最後の関頭迄われらの大雅の趣味を押し通せば之にまさる御奉公はあるまいと愚考いたします 何かと雑談に及びました。御丈夫にてお暮し下さい 草々 二十四日 黄眠 拝手 鈴木賢契 玉案下

(1) 鈴木信太郎・辰野隆(監修) Joseph Bédier, Paul Hazard(共編)『フランス文学史』(創元選書)全三巻(創元社、一九四二〜一九四三)を指すか。(2) 菊池寛(一八八八〜一九四八)は、昭和十三年に佐藤春夫や岸田國士ら二十二名を伴つて戦時下の中国を従軍視察。帰国後文芸戦後運動を開始し、昭和十七年には日本文学報国会の理事に。翌十八年には映画会社「大映」社長として国策映画製作にも従事した。(3) 山本有三(一八八七〜一九七四)は、菊池と同様、日本文学報国会の理事に就任(昭和十七年)。

書簡29 (0228.02) 昭和九〜十(一九三四〜一九三五)年(推定) 「宛先住所欠」 鈴木雅兄 侍座 「差出住所欠」
黄眠道人 封書 「封筒欠(書簡28の封筒に同封して保管)」 巻紙 墨筆

啓上 其後奈何御消光ですか。小生は週に一日一寸出講してあとは蝸牛の床にもくり込んでくらしてゐます。先週は眠薬の中毒を惹起し医者がかけつけて一寸さわきました。さて本日は御高著ポエジー^①特製本拝受。前著に似て更にすばらしい装幀に驚きました。もし、朝日か日々のブックリビウで紹介せられる場合は、小生も執筆いたしませう。

その節は本屋から新聞やへ申やり、新聞から小生へ申し来るやう御取計らひ願ひます。

それにつけても、早くマラルメの全集訳を、小生の息がある内に、完成して見せていた、きたい熱意です。厚く御礼而已 頓首 二十八日 黄眠道人 鈴木雅兄 侍座

(1) 鈴木信太郎(訳)『ポエジイ』(白水社、一九三四)を指すか。日夏文庫に所蔵あり。

書簡30 (02-29-01) 昭和十(一九三五)年十二月二十九日付(推定) 「宛先住所欠」 鈴木雅契 「差出住所欠」

日夏歌之介 封書 「封筒欠(書簡33の封筒に同封して保管)」 巻紙 墨筆

啓上 本年は小生の大凶年にて六月母を十一月妹を葬り、今度は積年の久病にて早大を讖首されこゝに一年三回の葬式の素志を完遂しました。明日の、とは言へないが、明月のパンには脅かされる身の上ですから、一先づ石神井辺へでも退耕して良寛サマのやうに暮せば半歳位は生命をつづけられませう。ソノ先は真暗です。日頃驕慢無比な日夏が痛快にも路頭に迷やアがると、巳之公や大学が手を打つて喜ぶ顔が見えます。ト、ソノ事小生は、発熱した病軀を自ら棺の中に横へて感じてゐるやうな気がします。ともあれペン一本で二本の箸を養ふ境涯ですから、

原稿のタネがありましたら御紹介希上ます。野田書房も大鴉^③で40円くれたのみで、くれる／＼とくれないが、お宅へ見えたらモー少しやれと御口添へ下さい。

ソナナ折柄佳例のウマいお餅を頂き、味覚的にうれしいのみか、米味噌醤油のやうに実質的にも太だ喜ばしく頂戴した次第です。藝道には迷信的自信を持ちますが、生活計営となると中学生にも劣る小生、昨今大に周章してゐるわけです。辰野君にもトンと御無沙汰してゐます。宜しくお伝へ下さい。御礼旁近況御報而已 拝上 二十九日
日夏 鈴木雅丈 侍者

(1) 『日夏歌之介全集』八巻の年譜によれば、昭和十年三月に早大教授辞任、六月十九日母いし没、十一月十九日妹保子没とある。
(2) 長谷川巳之吉(一八九三—一九七三)、堀口大學(一八九二—一九八一)を指すか。長谷川は第一書房の創業者で、堀口の理解者として『月下の一群』(一九二五)や『堀口大學詩集』(一九二八)などを第一書房から出版。昭和四年に日夏と堀口は断交しており、長谷川もまた堀口を擁護して日夏と絶縁している。(3) 日夏歌之介『大鴉』(野田書房、一九三五・三)。書簡9および14を参照。

書簡31 (02-29-02) 昭和十一(一九三六)年十月二十九日付(推定) 「宛先住所欠」 鈴木雅契 「差出住所欠」
日夏歌之介 封書 「封筒欠(書簡33の封筒に同封して保管)」 巻紙 墨筆

吉例の御餅拝受御厚情奉深謝ます。十月^①一寸入院後経過よく電車に乗って発作が起ないうれしさ。巖窟王が巴里へ出た時のやうです。その内参上つもる雑談をいたしませう 拝上 廿九 日夏歌之介 鈴木雅契

(1) 年譜によれば、日夏は昭和十一年十月八日から一週間入院した結果、発作性心臓急拍症が快癒したという。書簡16も参照。

書簡32 (02-29-03) 昭和十一(一九三六)年十二月二十八日付(推定) 「宛先住所欠」 鈴木信太郎様 「差出住所欠」

黄眠 封書 「封筒欠(書簡33の封筒に同封して保管)」 便箋 墨筆

餅を拝受、いつかの文学附近の随筆により兄の餅に関する並々ならぬ造詣を知つたので一入うまく頂戴出来る次第。今度出す俳文句集の序にも餅を喜び酒を嗜む也と書きましたが、どうしても酒は嗜むべく、餅は喜むべき小生です。佳き新正をお迎へ下さい。

例歳の御好情御礼厚く申上ます。 拜上 二十八日 黄眠 鈴木信太郎様

(1) 鈴木信太郎の随筆『文学附近』(白水社、一九三六)を指す。(2) 日夏耿之介の句集『溝五位句麁』(野田書房、一九三七)を指す。同書敍の冒頭に「餅を喜び且酒を怡ぶ也」との記述あり。

書簡33 (02-29-04) 昭和十四(一九三九)年十二月二十九日付(二十九日消印・杉並) 豊島区西巢鴨二ノ三、

五一九 鈴木信太郎様 平安 阿佐谷四ノ四五 日夏耿之介 封書 巻紙 墨筆

佳例の餅を頂戴いたし今年は時節柄一入難有御寵贈拝受 折柄河竹氏⁽¹⁾より到来の信笺の黒砂糖の中に包んで焼いて啖べ申し候 来春は岳母喪ニテ年始状失礼仕候 何卒みな様御機嫌にて御迎年祈上候 その内参上快談拝聴仕度

御礼而已 一筆拝上 十二月廿九 黄眠 鈴木雅契 研北

(1) 河竹繁俊(一八八九〜一九六七)は長野県下伊那郡の出身で日夏と同郷。明治四十四年に早大英文科を卒業、坪内逍遙の仲立ちで河竹黙阿弥の娘・糸女の養子に。早大講師、同教授、早大演劇博物館館長、日本演劇学会初代会長などを歴任。日夏の日記や書簡にもしばしば登場する。

書簡34 (051801) 昭和十七(一九四二)年一月二十三日付(二十三日消印・杉並) 豊島区西巢鴨一丁目三、五一九 鈴木信太郎様 杉並阿佐ヶ谷四ノ四五五 日夏歌之介 葉書 墨筆

貴意の如く海軍の大活躍はムカ〜した沈鬱を吹飛してくれました。⁽¹⁾新嘉坡が陥落したら三人で何処かで一杯やりませう 御打電下さい

みんなみのあく屋の島の島だわにたたなはる沙の一つ〜うれし 已上

(1) 大日本帝国陸軍は昭和十六年十二月八日にマレー半島に上陸。翌十七年一月にはイギリスの海峡植民地であったシンガポールに向けて進撃し、イギリス軍を主体とする連合国軍を相手に、有利な戦局を展開した。シンガポールは同年二月十五日に陥落している。

書簡35 (051802) 昭和十八(一九四三)年十月二十八日付(二十八日消印) 豊島区西巢鴨二丁目三五一九番地

鈴木信太郎様 杉並阿佐ヶ谷四丁目四五五 日夏耿之介 葉書 墨筆

先日大阪から拙著一冊お送りました御落手でせうか伺上ます。いつそや手紙を差上た処不明として戻つて来たので更に大学宛でその手紙をお送りしました。番地でも最近変更になつたのかとも考へてみますが此ハカキはいま一度御自宅宛同所書で差上ます。草々

書簡36 (05-18-03) 昭和十八(一九四三)年(推定) 豊島区西巢鴨一ノ三五一九 鈴木信太郎様 覆信 阿佐ヶ谷四ノ四五五 日夏耿之介 封書 巻紙 墨筆

覆啓 御風気長引いて御臥床の趣何卒御多愛祈上ます 老生も寒気と疲労にて十日許臥藤 V_{B,C} 注射三回にて些か快気いたしました 辰野君も休講されし由之は又鬼の癩乱とやら三人の冗語も弥生迄延引致しませう

落ちさうで落ちぬは獅子島と紫式部と近頃の洗濯屋、早く落ちて三月に入て三人で何処か静かな日本料亭で(目黒驪山荘など如何)一杯やりませう。何卒御静養の程祈上ます 草々不一 二月十五日雪の午前 黄眉山樵 拝
鈴木雅兄 懂行

心寂かあるへかりけり地の上はさわ立そめき限り知られす

(1) 歌集『文人画風』(関書院、一九四七)に収録。同書の詞書には昭和十七年十一月の句とある。

書簡37 (01-180) 年代未詳(昭和八(一九三三)年以降) 「宛先住所欠」 鈴木信太郎様 付童 「差出住所欠」

日夏耿之介 封書 「封筒欠」 巻紙 墨筆

残暑酷しい事です ヴァリエテ^①を御恵賜被下有難く御礼申升 実は英訳で読みたくもないので、邦訳本を此間古本屋に命じて探すべく手配した処でした 仲々六ツかしい本ですネ、若い諸君がよくアレ丈けこなしたものと感心してゐます。ジックリ読みたいと楽しみにしてゐます。岸田君^②のにんじんも貰つて一読しました 大活字本が時花るのはウレしい傾向です。

不取敢御礼而已 頓首 二十五日 日夏耿之介 鈴木信太郎様 付童

(1) 中島健蔵・佐藤正彰(共訳)『ヴァリエテ』(白水社、一九三三)を指すか。(2) 岸田國士(訳)ルナル『にんじん』(白水社、一九三三)を指すか。

【解題】

本書簡群は昭和四年から昭和二十七年にかけて、日夏耿之介(一八九〇～一九七一)が鈴木信太郎宛に送った私信である。鈴木信太郎記念館所蔵の計三十七通からなるこの書簡群には、同館の整理方針に沿って整理番号が付されておき、本稿では便宜上、その順序に従つて書簡1、書簡2……と改めて番号を付与し、配列した。

書簡1～書簡33は一括して保管されていた書簡群で、「02」から始まる整理番号が付されている。このうち、書

簡1～書簡25は昭和四年から昭和二十七年までの書簡を時系列順に配している。書簡26・27については書簡の執筆時期が判然とせず、書簡28・29と書簡30～33については、それぞれ一つの封筒に複数の書簡が同封されて保管されていたことから、他と区別する形で整理されている。また、書簡34～37は上の書簡群とは別に保管されており、「05」から始まる整理番号が付されている。年代が特定できず、推定にとどまるものも多いが、書簡26以降を時系列順に配した場合、次のようになる。

〔37「昭和八年以降」〕↓29〔昭和九～十年〕↓30〔昭和十年十二月〕↓31〔昭和十一年十月〕↓32〔昭和十二年十二月〕↓26〔昭和十三年十二月〕↓33〔昭和十四年十二月〕↓34〔昭和十七年一月〕↓35〔昭和十八年十月〕↓36〔昭和十八年〕↓28〔昭和十七～十八年〕↓27〔昭和二十四年〕

なお、鈴木から日夏に宛てた書簡については、飯田市美術館（編）『日夏耿之介宛書簡集』に計十二通が収録されている。今回翻刻した三十七通の書簡に対して直接応答している書信こそ見られないが、併せて読むことにより、ふたりの親密なやりとりの様子がより鮮明に浮かび上がるだろう。

書簡群の内容について検討してゆくと、まず目を引かれるのは献本に関するやりとりである。なかには書簡1（昭和四年二月二十日付）や書簡16（昭和十二年十月二十四日消印）など、具体的な書名に触れていないものもあるが、「シラノ」（書簡17）や「半獣神午後」（書簡22）、「呪詩人訳本」（書簡23）、「エルレエヌ集」（書簡24）、「覚書」（書簡27）などは、鈴木の著書から概ね同定し得る。鈴木が折に触れて、日夏に著書を寄贈していた様子が見てとれよう。日夏の方でも詩集『咒文』や白水社版『英吉利浪漫象徴詩風』上巻、『聴雪廬小品』といった著書を鈴木に送っ

ており（『日夏耿之介宛書簡集』参照）、両者の間ではこうした交流がさかんに行われていた。

本書簡群のなかで特に注目すべきは、鈴木が昭和八年から九年にかけて制作した『半獣神の午後』（書簡9）と『ボエジイ』（書簡29）の寄贈である。両書はいずれも精巧な装幀の施された限定本であり、手紙の文面からは日夏がその美麗な仕上がりにいたく感心している様子がうかがえる。折から自身もポー『大鴉』訳の出版を企図していた日夏は羨望のまなざしを向け（書簡9）、鈴木もそれに応えて、『半獣神の午後』を出版した江川書房を紹介したようだ。最終的に日夏の限定本『大鴉』は野田書房から出版されることになるが、これも鈴木が実現に尽力したとみられ、日夏は重ねて礼を述べている（書簡14）。

また、本書簡群では、日夏が体調不良を訴えているさまがよく目にとまる。日夏は幼少期から喘息を患うなど、長く健康不安を抱えていた。四十代に入ると不眠による貧血（書簡5）、睡眠薬による中毒（書簡29）、暑気あたりからくる心臓疾患（書簡6）などに悩まされ、五十歳を過ぎると山羊の乳で貧血を起こし、風邪から喘息を誘発したこともあれば（書簡18）、心臓肥大による坐骨神経痛に悩まされることもあったという（書簡24）。とくに昭和八年頃はこうした体調不良のため、当時勤務していた早稲田大学での授業も休みがちになっていたようで、俸給を出し渋る大学当局への不満を同じく教員であった鈴木に吐露し、生活費と医療費を捻出するため蔵書売却するつもりだと嘆いている（書簡10・12）。昭和十年にはとうとう失職の憂き目に合い、生活資金に窮しつつある旨も綴られている（書簡30）。ケルムスコット・プレス（書簡10・12）やアポリネールの限定本（書簡16）の売却も検討しており、美本や稀観書を愛蔵していた日夏は「本虫が本を放つ心持ち之は大兄でなくては同感して貰へますまい」と、共感を求めている。鈴木はこうした日夏の窮状を汲んで、見舞金を持参するなどしばしば支援していたようである（書簡10）。

本書簡群では、餅の贈答にまつわる話も頻繁にみることができ（書簡5・7・11・13・26・30・33）。生家が

米問屋であった鈴木信太郎は、友人に対して季節の折々に餅を贈っていたといい、日夏はこれを喜んで賞味したと綴っている。生活に不安を抱えていた時期の書簡では、「味覚的にうれしいのみか、米味噌醤油のやうに実質的に太だ喜ばしく頂戴した次第です」（書簡30）とも述べられており、日夏と鈴木木の近しい間柄がうかがえよう。

日夏にとって、鈴木信太郎は気心の知れた友人であると同時に、その研究に期待を寄せる学者でもあった。日夏は「マラルメの御事業其後如何にや」（書簡7）と、鈴木木のマラルメ研究を常に気にかけており、折に触れてその動向を尋ねている（書簡9・18・29）。また、高雅な文人趣味を共有できる友人としても信頼しており、とりわけ篆刻に対しては、鈴木木から贈られた一顆を珍重したり（書簡19）、印譜の刊行を心待ちにしたりと（書簡22）、強い興味を示している。

日夏と鈴木木の関係について語るうえで、特筆すべきは辰野隆の存在であろう。日夏は辰野と鈴木木を結び付けて考えていたようで、書簡2や書簡3ではわざわざ辰野邸で鈴木木と面会したい旨を伝えている。同様に三人での鼎談を希望する内容は書簡6や書簡12でも見られ、書簡5では、鈴木木と辰野の二人をして「大兄らとたまに心持ちのよく合した逸興の数時間を送る事が生活の楽事と考へてをります」と述べるなど、日夏がこの両人とは馬が合うと思っていたことがよく伝わってくる。書簡21では辰野から鈴木木の表彰について聞かされ、祝賀会を催したいと述べながら、会場の手配を辰野に頼ってみせたり、書簡36では三人して体調を崩したことに触れつつ、「三人で何処か静かな日本料亭で一杯やりませう」と提案したりしている。（なお、『日夏歌之介宛書簡集』に収められた辰野の書簡には、辰野が自らを「ゆた公」、日夏を「耿ちゃん」と呼んでいるものや、日夏の博士号授与を喜ぶもの、また戦時下にあつて「敵国の空襲を受け候事も候はゞ、先づ阿佐ヶ谷へ馳け付け大兄をひつかついで安全地帯へ運び出す」と日夏の身の安全を請け負うものなどがあり、二人の親交がよくあらわれている。）年齢も日夏からみて辰野は二歳年長、

鈴木は五歳年少であり、学識豊かな東大の仏文学者であった辰野と鈴木は、早大の英文学者で、求道的な象徴詩人として詩壇にしばしば敵をつくった日夏にとって、気の置けない貴重な友人だったのであろう。

書簡の差出人住所にも着目してみると、日夏が頻繁に転居を行っていた様子が見てとれる。日夏の居所地については、『日夏歌之介全集』八巻の年譜にその詳細が記録されているが、本書簡群の該当時期に沿って整理してみると、昭和元年以降、四年までは杉並区阿佐ヶ谷八七三番地に居住し、その後、昭和五年に同馬橋三六〇番地に移転。昭和七年十月には神奈川県藤沢鶴沼（当初は下岡・円城別荘に滞在、一年後八橋銭春荘へ）にて転地療養し、昭和八年十二月に杉並区阿佐ヶ谷六丁目一七番地へ再び転居すると、昭和十一年四月には杉並区阿佐ヶ谷四丁目四五五番地に移転。以後はここを本宅として、時おり療養や戦時疎開を理由に、一時的な転居を繰り返した。具体的には、昭和十五年七月から九月にかけて長野県飯田・伊藤政吉宅に、昭和二十年五月から六月にかけて茨城県那珂郡平磯町川向高磯一五七一に、それぞれ静養を目的として滞在し、その後二十年七月からは郷里に近い長野県飯田市山本村へ疎開している。本宅に戻ったのは、一年半近く経過した二十一年十二月のことであった。これらの推移を本書簡群の差出人住所と照合すると、たしかに一致する。書簡群のなかには転居先の様子について記したものもあり（書簡11）、生活の実感がこもっている。

このように転々と居を移すなか、日夏が昭和二十年六月に平磯から送った絵葉書（書簡20）には、当地の名勝である護魔坦石の写真とともに、常州平磯の地に寄せた短歌が五首したためられており、静養先での詩人の感興をしる。このほかにも、日夏はしばしば俳句（書簡7）や短歌（書簡8・18・19・34・36）を文中に添えており、その折々の関心がうかがえる。

たとえば書簡8（昭和八年三月四日付）は昭和八年三月初頭に展開された熱河作戦に、書簡34（昭和十七年一月

二十三日付）は昭和十七年一月の南方における海軍の活躍に、それぞれ寄せて作られた歌とみられ、日夏の時局に対する反応が示されている。本書簡群の多くは国家が戦争へと足を踏み入れてゆく、いわば重苦しい時代に書かれたものだが、ここに綴られた時局への言及は、「けふは朝から日本軍航空機の勝利を号外で見て大に気をよくしてゐる処です。祝盃をやりたいではありませんか」（書簡15）、「新嘉坡が陥落したら三人で何処かで一杯やりませう」（書簡34）といった内容であり、『軼身の頌』や『黒衣聖母』の作者として知られる象徴詩人・日夏耿之介の姿とは、また違った表情をのぞかせている。

もっとも書簡28（昭和十七〜十八年（推定）六月二十四日付）においては、菊池寛や山本有三に対し、時流に迎合して美を毀損する人物であると糾弾する一方、鈴木には「最後の関頭迄われらの大雅の趣味を押通せば之にまさる御奉公はあるまいと愚考いたします」と、「大雅」を重んずる自身の立場を述べてもいる。

学匠詩人・日夏耿之介は、舌鋒鋭い批評家でもあった。ときにそれは悪罵に近い表現をとめない、しばしば筆禍を引き起こしたことで知られる。鈴木への書簡においても、友人への私信という気安さも手伝ってか、敵視する人物や著述に対する仮借なき批判がところどころに見られ、象徴主義の概説書について「下らぬ借肴論」（書簡26）と断じたり、著書の出版をめぐる対立した全国書房には「必ず社会的自殺をさせて」やると（書簡27）、穏やかでない表現でもって憤懣を書きつらねたりしている。青年詩人の時分、共に切磋琢磨した堀口大學や、それを支援する第一書房の長谷川巳之吉とは、本書簡群が書かれた時期には既に断交していたが、彼らに対する反感も隠そうとはしなかった（書簡30）。日夏のこういった辛辣な態度を、鈴木は果たしてどのように受け止めていたのだろう。

こうした苛烈な姿勢によって、しばしば文壇・詩壇に敵を増やした日夏であったが、一方で交誼を大事にする一面もあり、日夏を慕う作家や門弟もまた少なくなかった。本書簡群においても山内義雄（書簡7・26・27）、富田

碎花（書簡1）、吉江喬松（書簡4）、佐藤春夫・太田七郎（書簡12）、火野葦平（書簡18）など、日夏と良好な関係にあった人物の名前をいくつもみとめることができる。日夏を取り巻く人間関係を理解する上で、これらの書簡は重要な資料となり得るだろう。（水野）

* 今日観点から見て不当・不適切と思われる表現もありますが、時代背景に鑑みてそのままとしました。

* 書簡の権利者にはできる限り許諾を得ましたが、何かお気づきの点がありましたら武蔵大学戸塚学苑にご連絡ください。

* 翻刻に際し、日本語の難読箇所については出口智之氏、フランス語の手紙やフランス関係の注釈については浅間哲平氏、Sylvie Beaud 氏、館葉月氏のご教示を得ました。記して感謝申し上げます。

* 本稿の準備中に、書簡の元の所有者であり鈴木信太郎ご子息の鈴木道彦氏の計報に接しました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

* 本稿の執筆に当たり、科研費【24K03829】の助成を受けました。